Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

082
Ko548
Kk
0071256D

國譯漢文大成

文學部
第六卷

三體詩

國譯漢文大成

文學部
第六卷　三　體　詩

082
K0548
Kk

國會圖書館
41.11.28
圖書館藏書

712560

例言

一三體詩は宋の周弼の選に係る、而して元に至り釋天隱之を注し、更に元の裴庾之を增注し以て四方に流行せしものなり、我が邦に傳來せしは確乎たる時代を知る能はざるも五山の禪人が入元の際攜へ歸りしものならんと想像するなり、或は云ふ妙喜庵の中巖和尙が將來なりと、

一周弼字は伯弼、汝陽(湖北省荆門州遠安縣)の人、嘉定の進士、墨竹を善くし、其の詩端平集十二卷ありと云ふ、

一原本、裴庾季昌と方回の序文あり、其の詩を論ずる共に肉眼の見にして未だ天眼を開かず、矧や法眼、矧や慧眼をや、此に錄して以て論ぜざる所以なり、

一此の選、人に於て百六十七人、詩に於て七絕百七十四首、七律百十首、五律二百九首、通計四百九十三首とす、所謂唐に興りて唐以前に無き所の法、冠らすに唐賢を以てする所以なり、

一詩人唐に於て初盛中晚の區別を立つ、禪を以て詩を論ずる者は曰く盛唐の詩は第一義諦なり、中唐の詩は第二義諦なり、晚唐の詩は則ち聲聞辟支果なり、善哉是の論や、彼に於て馮鈍吟、我

に於て孝經樓、盛んに反駁を加ふるも、加ふるもの本來辟支なり聲聞なり、何ぞ第一義諦を知るを得ん、然らば周弼は如何、是の人元第一義諦を知る、知ると雖も、中晩唐以下を多く選んで盛唐を取ること寥寥たり、是れ猶ほ佛陀の頓圓の機類を後にして、鈍根の機類を先きに度せしと一般なり、是の故に此の三體詩を讀むの人は、之に熟參して、更に開元天寶に遡らざるべからず、然らずして終生此の境に止まらば唯周弼の罪人なるのみならず、亦斯道の闡提たるなり、

國譯三體詩目次

國譯三體詩原序……一——五
至天隱註周伯弼三體詩序……六——一五
求名公校正咨目……一五——一九
國譯三體詩……一——七八四

卷の一

序言……一
七言絶句……五——二四〇
實接……五
虛接……一四三
用事……一九四
前對……二一
後對……二七
拗體……三三
側體……二三二

卷の二

七言律……二四一—四五八

四實……二四一　四虛……二九一

前虛後虛……三三一　前實後虛……三九二

結句……四六六　詠物體……四四五

卷の三

五言律……四五九—七八四

四實……四五九　四虛……五六〇

前虛後實……五九七　前實後虛……七〇二

一意……七四八　起句……七七七

結句……七六五　詠物……七七一

國譯三體詩原序

詩自三百篇以還。至唐而聲律大備。今人作詩以唐爲法。唐詩蓋數百家。雖不盡預四庫之目。先賢猶慮其繁。欲便後學。乃選爲三體四體極玄又玄衆妙二妙英靈間氣等集。然其用事源委多有未達。因博採簡册所載。參以平昔見聞。訓釋成編。諗諸同志。咸俾入梓以助啓蒙。余尙懼疎舛。或曰朱文公註楚辭未免闕疑。李侍讀注文選。亦或祖述之謬。況其餘者乎。博洽君子庶幾補而正之云。時至大二年重陽日。裴庚季昌書。

詩は三百篇より以還、唐に至つて、聲律大に備れり、今人詩を作るに唐を以て法と爲す、唐詩蓋數百家盡く四庫の目に預からずと雖も、先賢猶其の繁を慮ばかりて、後學に便せんと欲し、乃ち選んで三體此の本四體一卷なり、極

玄一卷　又玄三卷　衆妙三卷　二妙三卷　英靈一卷　間氣三卷等の集を爲す、然れども其の事を用ふること、源委多くは未だ達せざるあり、因て博く簡册の載る所を採つて、參するに平昔の見聞を以てし、訓釋して編を成す、諸を同志に諗げて、咸な梓に入れて以て啓蒙を助けしむ、余尙疎外ならんことを懼る、或ひと曰く、朱文公の楚辭を註するも、未だ疑を闕くことを免かれず、李侍讀が文選を注せしも、亦祖述の謬りあり、況や其の餘の者乎、博洽の君子庶幾くは補うて之を正せと云ふ、時、至大二年重陽の日裴庚季昌書す、

是れ始めて此の『三體詩』を上梓して天下に流布せしめし、元の季昌の序文とす、是より先き僅僅五年前なれど高安に住する沙門圓至天隱あり、始めて此の三體詩を注釋す、伯弓が此の集を選してより六十年後とす、而かも此の天隱の注釋たる極めて簡略にして、殆んど無きに均しきもの、是に於て季昌が起ち、是れが增注を著はす、此の增注たる五十步百步の類、到底兒輩をして解せ

しむるの力を有せず、力を有せずと雖も、此の書に於ける忠臣たるの功は沒すべからず、是の時に當り、日本は漢土と往來し、五山の傑僧等爭うて渡海す、其の渡海せし一師が始めて此の書を日本に傳來し、五山の精舍として此の書を藏せざるは無きに至る、紫陽に素隱なる高僧あり、家醜を忘れて此の俗釋を著はす、筆を執つて著せしにはあらず、口授せしものを門人等が筆記して以て一部と爲し、之を諸寺に頒ち、雛烏をして誦讀せしむ、其の解釋たる詩に就て論ずる所全く無しと雖も、當面の句釋は全く遺憾なしと謂ふ可し、熊谷立閒の『三體詩備考大成』と共に雛烏には二大恩書と稱して可なり、此の後種種なる注解出で二十有餘部の多きに至る、一一名を玆に擧げず、今隱師が此の季昌の序に就て注する所のものを俗譯して以て其の功を益す顯はさんと欲す、

『唐書藝文志』に云ふ、漢より以來、史官其の姓氏を列して、次第を編す、以て六藝、九種、七略と爲せり、唐の開元中玄宗に至り、始めて四類に分ち經史子集と曰ふ、其の著錄は五萬八千四百六十九篇なり、嗚乎盛んなりと謂ふ可し、註に曰く玄宗兩京（長安と洛陽）に各の書を聚むること四部、甲乙丙丁を以て次と爲し、經史子集の四庫を列せり、其の本正あり副あり、軸帶帙籤、皆色を異にして以て之を分つ、天寶十四載玄宗より祿山の亂あり、書簡全く藏せず、代宗の時

に至り、鄭覃（珣瑜が子宰相となり祭酒を領ず司空を授けらる）進めて曰く、經籍未だ備はらず、祕書閣に詔して搜訪せしむ、是に於て四庫の書復全し、又『景龍文館記』に曰く、馬懷素（字は惟白丹徒の學者）經庫の知たり、沈佺期（字は雲卿、相州内黄の人）は史庫に知たり、武平一（戡德の子）は子庫に知たり、薛稷（字は嗣通）は集庫に知たり、通じて四庫の書と曰ふ、私に云く唐に至りて聲律大に備はるとは、『才子傳』（西域の劉氏が著）の一に魏の建安より江左に迄んで、詩律屢ば變ず、沈約、鮑照、庾信、徐陵に至つて音韵を以て相婉に屬對を附すること精微なり、沈佺期、宋之問に及んで又靡麗を加へ、聲病を忌み、句を約にし、篇を準にす、格律を定めて遂に近體を成せり、（五言絶、七言絶、五言律、七言律、此を近體と云ふ）錦繡の文を爲せるが如し、學者宗として尙ぶ、『語』に云く、蘇李前に在り、沈宋肩を比ぶ、所謂唐詩の變體なり、二公（沈と宋となりより始まる、猶ほ蘇武李陵より始まるが如し、私に云ふ音韵とは音は平仄を謂ふ、韻は韵脚を謂ふ、聲病とは四聲相ひ調はざるを謂ふ、近體とは近代の詩の體裁を謂ふの義なり、卽ち唐詩の體を謂ふ、沈約以下は皆盛唐（高祖の武德より玄宗の天寶に至る大凡そ百四五十年間を云ふ）の時の詩人なり、數百家は、盛唐、中唐晚唐の間詩人千家なりと雖も、（肅宗より以後大凡百年間を中唐とし、懿宗より以後大凡百年間を晚唐とす、宋の初めに至るまでを云ふ）世に昭顯する者、凡そ五百家なり、然して『唐才子傳』載する所は凡そ三百餘人なり、故に其の大數を擧げて數百家と曰ふ、盡く四庫の目に預からずとは、四庫の名目中に入らざる者を謂ふ、帙籤色を異にすと

は、『藝文志』に甲部の經は紅牙籤、乙部の史は綠牙籤、丙部の子は碧牙籤、丁部の集は白牙籤なり、『三體詩』は周弼（宋人なり）が選する所、『四體集』『極玄集』各の一卷、三十三家の詩を集む、姚合（唐人なり）が選する所、『又玄集』三卷詩三百首、韋莊（唐人なり）が選する所、『衆妙集』『二妙集』『英靈集』殷璠（唐人なり）が選する所、『英靈集』は盛唐の詩なり、五言を詳にし、七言を略す、律絶に至つては僅かに一二を存するのみ、『間氣集』二卷は高適（唐人なり）が選する所、此れ等の集に就て凡事の源委、卽ち事の始末、多く達せず、余が訓釋も或は疎舛卽ち差錯相ひ背くあらん、朱文公字は元晦、晚年に紫陽山に隱れて雲谷老人と號す、謚して文公と曰ふ、此の朱文公が楚辭に就て注を著はす、猶ほ疑問の點あり、李善が如き『文選』の注に一生の心血を灑ぎし人も、亦謬誤あるを免れず、余が寡陋完全を期せずとなり、至大二年は武宗の世、以上季昌の序文に就ての略解なり、只恠しむ天隱の序文を未だ見ざることを、次ぎに方回の序文を擧げ以て此の書の由來する所を知らしめん、

至天隱註周伯弓三體詩序

子曰、詩三百。一言以蔽之。曰思無邪。此詩之體也。又曰。小子何莫學夫詩。可以興。可以觀。可以羣。可以怨。邇之事父。遠之事君。多識於鳥獸草木之名。此詩之用也。聖人之論詩如此。後世之論詩不容易矣。後世之學詩者。捨此而他求。可乎。近世。永嘉。葉正則水心。倡爲晚唐體之說。於是四靈詩。江湖宗之。而宋亦晚矣。聖人之論詩不暇講矣。而漢。魏。晉以來。河梁。栢梁。曹。劉。陶。謝俱廢矣。又有所謂汶陽周伯弓三體法者。專爲四韻。五七言小律詩設。而古之所謂詩。益付之鴻荒艸昧之外矣。其說以爲。有一詩之法。有一句之法。有一字之法。止於此三法。而江湖無詩人矣。唐詩。前以李杜。後以韓柳爲最。姚合而下。君子不取焉。宋詩。則歐。梅。黃。陳爲第一。渡

江以後。放翁。石湖諸賢詩。皆當深玩熟觀體認變化。雖然以吾朱文公之學而較之。則又有向上工夫。而文公詩未易可窺測者也。近高安沙門至天隱。乃大魁姚公勉之猶子。聰達博贍禪熟。文熟。詩熟又從而注伯弓所集之詩。一山魁上人。回之方外交也。將磧砂南峯表公之命。俾回爲序以弁其端云。紫陽山虛叟方回序。

子の曰く詩は三百、一言以て之を蔽へば曰く思無邪と、此れ詩の體なり。又曰く小子何ぞ夫の詩を學ぶこと莫きや、以て興しつ可し、以て觀つ可し、以て羣しつ可し、以て怨みつ可し、邇くは父に事へ、遠くは君に事ふ、多く鳥獸艸木の名を識る、此れ詩の用なり、聖人の詩を論ずること如此の如し、後世の詩を論ずること容易ならず、後世の詩を學ぶ者、此れを捨てて他に求めて可ならんや、近世永嘉の葉正則水心、倡なつて晚唐體の說を爲す、是に於て四靈の詩、江湖之を宗とし、宋も亦晚なり、聖人の詩を論ずること

と講ずるに暇あらず、而して漢魏晉より以來、河梁、柏梁、曹、劉、陶、謝、俱に廢しぬ、又所謂汶陽の周伯弼が三體法と云ふものあり、專ら四韻五七言小律詩の爲めにして設けたり、而して所謂詩は益す之を鴻荒艸昧の外に付す、其の說に以爲らく、一詩の法あり、一句の法あり、一字の法あり、此の三法に止まる、而して江湖に詩人無し、唐の詩、前に李杜を以てし、後に韓柳を以て最と爲す、姚合より下、君子は取らず、宋の詩は則ち歐、梅、黃、陳を第一と爲す、渡江以後、放翁、石湖諸賢の詩は皆當に深く玩び熟ら觀て變化を體認すべし、然りと雖も、吾が朱文公の學を以て之に較ぶれば、則ち又向上の工夫あり、而して文公の詩は未だ易く窺ひ測るべからず、近ごろ高安の沙門至天隱は乃ち大魁姚公勉が猶子なり、聰達博贍にして禪熟し文熟し詩熟せり、又從つて伯弘が所集の詩を注す、一山魁上人は回が方外の交なり、磧砂南峯の表公が命を將て、回をして序を爲り

以て其の端に弁むらしむ、紫陽山の虛叟方回序す、

孔子の曰く詩は三百篇、其の三百の篇に就て之を評すれば、思無邪の一言に盡きたるなり、孔子は今日傳はる『詩經』に於て此の語を發したる者なるが、後世に於て發達したる詩、所謂詩と名の付くべきものは、思無邪の義を離るる能はざるなり、詩を以て邪を去ぞけ、正に歸せしむ、詩を以て政治を爲すなり、詩を以て教化と爲すなり、人の邪と爲り、正と爲り、曲と爲り、直と爲り、皆性情に本づかざるは無し、其の性情をして之を柔し、之を優せしむれば、人は邪と爲らず、又曲と爲らず、性情の優柔を失するが故に邪曲の道に入り、小にしては一身、大にしては國家を誤るに至る、孔子は能く之を知る、是を以て詩の教を說て以て人を正道に歸せしめんとす、故を以て詩を學ぶ者は必ず『詩經』三百五篇を窺はざるべからず、小子何ぞ夫の詩を學ぶ莫きや、夫の詩卽ち『詩經』の詩を學ばずして、下降せし詩を學ぶ者多きは何ぞ、虛叟の嘆息を發する所以なり、以て興し、以て觀、以て羣、以て怨、悉く詩經に本義を於きて言ふ、興は譬喩を以て人を正道に導くなり、觀は諸國の風俗の高下を觀て以て感憤すべきなり、羣は人と人と正に羣するなり、鳥獸の羣は眞の羣の意義なきもの、人の羣を以て始めて以て羣の意義を爲す、怨は邪政を怨刺するなり、怨刺するに之を言ふ者罪なく、聞く者以て戒しむるに足

る、邇きは父に事ふる道、遠きは君に事ふるの道、說て悉く詩經に在り、蓼莪凱風の詩、是れ親に事ふる道を歌ひしものなり、大小の雅、周頌魯頌は是れ君臣の道を歌ひしものなり、關雎鵲巢、晨風鷽羽、是れ鳥の名を知るなり、麟趾匪狐、虺隤豺虎、是れ獸の名を知るなり、有臺白華、萇楚芄蘭是れ艸の名を知るなり、有梅常棣、其檉其灌、是れ木の名を知るなり、詩に於て此の體と此の用との功德は頗る偉大とす、詩經を學ばずして後世の詩を學ぶは抑も淺しと爲す、詩を說く者必ず聖人に依らざるべからず、後世の詩を論ずること容易ならず、後世とは素隱解す暗に元代の詩家を指すと、然り、此を捨てて他に求めて可ならんやを解して此とは唐の詩法を指すと、唐にはあらず、詩經を捨てて可ならんやと云ふに在り、素隱誤つて方回が唐詩法を捨てて、他の法度を求めば何の可かあらんと云ふ、雛鳥を迷はしむるの罪大なり、近世永嘉の葉水心は字は正則、達道の人、倡は卽ち本心にあらずして、晚唐の詩を可なりと唱ふ、一智者之を唱へて、衆愚忽ち之に和す、是に於て四靈たる者、水心の後塵を拜して起ち、以て『毛詩』は論勿し、盛中唐に至るまでも廢して、徒らに輕薄俗陋を極めたる晚唐を喜ぶに至る、江湖卽ち天下の愚人、多く之を宗とするを見る、四靈とは何ぞ、永嘉の徐照、字は靈暉、永嘉の徐璣字は靈瑞、永嘉の翁卷字は靈舒、淸苑の越秀字は靈芝是れなり、而して宋も亦晚れぬ、宋

の起るや汴に都す、是れを北宋と言ふ、高宗に至り江を渡つて浙に都す、是れを南宋と言ふ、寧宗理宗の世に至り國將に傾むかんとし、詩も亦墮落するに至る、晚唐と晚宋は共に是れ夕陽の光輝あるは力强からざるが如し、而して此の晚唐、此の晚宋の詩たる、唯陋俗の言を輕率に之を出し、毫も世敎に補ひ無し、世敎に補ひ無き詩を以て本領と心得る者、何ぞ聖人の詩卽ち三百の遺篇を講せんや、暇無きに非ざるなり、講ずるを欲せざるなり、僅に朱文公一人ありて以て正道を擎げるのみ、而して漢、而して魏、而して晉、詩經と共に之を捨てて顧みず、漢には李陵の如きあり、蘇武の如きあり、是れ河梁 武帝の如きあり、魏には曹操の如きあり、曹子建の如きあり、劉公幹の如きあり、而して晉には、陶淵明の如きあり、謝靈運の如きあり、或は雄渾、或は高雅、或は閒遠、或は沈痛、或は冲澹、或は豪放、或は淸奇、或は曠達、或は委曲、或は自然、漢より晉に至るの間は所謂天を動かし、鬼を感じ、邪を去て、正に就くの詩は在在拾ふべし、然るに捨てて顧みず、宋の愈よ末に至り、周伯弱出で、三體の詩法を設けて、戶誦し家讀し、是に於てか古の所謂詩は、之を鴻荒草昧の外に付す、虛叟の慨する所以何ぞや、『揚子湯問篇』に鴻荒の世は聖人之を惡めり、何故に惡むと言へば、其の禽獸と別なきを以てなり、草昧とは何ぞ、『易經屯の卦の彖に曰く天の造すこと草昧、侯を建るに宜し寧からず、

屯とは天地始を造るの時、造物の始めなり、冥昧に始まる、之を要するに虛叟の意、今の詩を學ぶ者、古の詩を以て全く之を度外視すると言ふに在り、素隱虛叟の意を測りて曰ふ古の詩の近朴にして鄙野なるを以て、古人の詩を抑へて唐詩の體を揚げるなりと、隱公の蒙昧か老蒙か何ぞ誤謬の甚しきや、唐詩を揚げたるにはあらず、古詩を讀まざる者を抑へたるなり、全く顚倒して此の序を注するは人を誤らすの罪尤も大なり、周の說に一句の法五言なり七言なりあり、一詩の法あり一律なり絕なり一首を云ふ一字の法あり、自と用ふべき處へ空しくと用ふれば是れ一字の法を失するなり此の三法の外唐人は作らずと爲す、前は唯李太白と杜子美、後は唯韓昌黎と柳子厚とのみ、姚合なり下は君子の取らざる所、虛叟の此の言にても唐詩を揚げしにあらざる事明白なり、姚合は元和の進士にて大中間に沒したる人なれば、中唐に屬して、猶晚唐ならず、而かも晚唐の部に屬して取らずと貶す、而して宋の詩は歐陽永叔と梅堯臣と黃山谷と陳后山との四家を以て第一と爲す、其の餘の東坡ですら取らず、況んや四靈輩をや、伯弓は四靈を信ずる者なり、虛叟は之を排する者なり、其の間逕庭あること知るべし、渡江以後とは何ぞ、宋の孝宗が胡人に逐はれ汴より江を渡り南來して杭に居る、之を渡江と云ふ、又南渡と云ふ、其の南渡後に出でし詩人、少からずと雖も、大家と稱すべきは陸放翁と范石湖となり、陸游字は夢觀、放翁と號す、晚年に渭南伯に封せらる、故

に陸渭南と敬稱する、又劍南と云ふ、其の詩文集は二十五卷あり、詩萬首を超ふ、紀行に『入蜀記』あり、紀行文の最も佳なるもの、范成大、字は至能、石湖居士と號す、詩文共に淸逸贍麗自ら一家を成す、石湖居士集百六十卷あり、虛叟は以上の歐梅黃陳陸范の六家を稱して諸賢と言ひ、而して此の六家の詩は兒輩をして熟讀玩味せしめよと云ふ、而して朱文公を加ふるに向上の工夫ありと云ふ、窺ひ測るべからずと云ふ、朱文公は道を以て自任し、他の詩人とは同日に見るべからずと爲すに在り、蓋し其の詩も他六家の下には置かざるなり、而して最後に正しく此の集に關係深き天隱の事を叙す、天隱圓至禪師は藥山に住す、仰山雪巖欽禪師の法嗣とす、姚公勉は雪坡と號す、瑞陽の人、胡中文、劉元高、黃夢炎と錦江の四俊と稱せらる、天隱は其の弟の子なり、此の僧禪文共に熟して、凡僧の及ぶ所にあらず、虛叟が方外の友に一山魁上人あり、磧沙の遠公の命を以て、虛叟に此の集の序を請ひ、以て上梓せしもの、此の序を作る意大畧上の如し、素隱の如く解する者は全く虛叟の知己にあらず、元末明初に瞿宗吉出づ、瞿は『咏物詩』を著はし名を馳せたる人、其の著はす所の『歸田詩話』三卷讀むべきもの多し、上卷の一に此の序文を載せ左の論あり、

按ずるに此の序議論甚だ正、識見甚だ廣し、而かも周伯羽集むる所の三體詩に於て、深く不

滿の意を寓す、書坊刻する所、皆載せず、獨裴季昌の序を取る、近ごろ唐孟高が補寫せる三體詩一帙を見る、此の序を卷首に書す、故に此に全錄して、吟事に篤き者と共に詳かに之に參せん、

明の李賓之は『麓堂詩話』に於て左の言を爲す、

詩を選する誠に難し、必ず識以て諸家を兼るに足る者、乃ち能く諸家を選ぶ、識以て一代を兼るに足る者、乃ち能く一代を選ぶ、一代數人ならず、一人數篇ならず、而して一人を以て之を選ばんと欲す、亦難からずや、唐詩を選ぶ者、唯楊士宏が『唐音』庶幾し、次は則ち周伯弱が三體、但其の分體細碎に過ぎ而して二書皆必ず選ばざるものあり、趙章泉が絕句、少と雖も精『鼓吹』の若きは、多く晚唐卑陋を以てする者を格に入ると爲す、吾は取る無し、鼓吹を罵り、此の三體詩を罵らず、而かも此を軒げて、彼を輕したるにはあらず、一を擧ぐれば、一は自ら倒れんが爲めのみ、周弼を軒げたりと云ふ論者は昧なり、又明の都穆の『南濠詩話』に左の語あり、

長洲陳湖の磧砂寺、元初に僧魁天紀なる者あり之に居る魁高安の僧圓至と友とし善、至嘗て周伯弱選する所の『三體詩』を注す、魁其の資を割き、刻して寺中に寘く、方萬里特に序を

爲る、是に由て『三體詩』盛んに人間に傳ふ、吳人磧砂詩と稱するもの是れなり、此れ等の文を以て畧〻此の書の大體を知るべし、選ぶ所の周弼人品が卑きにあらず、其の識の高からざるに由るのみ、周弼が詩を端平集と云ふ、十二卷あるも日本へは傳來せず、其の詩の如何は評する能はざるも、晚唐に於て特に許丁卯を推賞したりと言へば、其の亦丁卯に似たるものあらん、又此の書が釋氏に依て傳來せし事は不思議と言はざるを得ず、釋氏注を書し、釋氏資を助け、而して日本へは釋氏傳來す、余今釋氏として此の國譯を爲す、佛陀が所謂因緣會遇なるものなるべし、次ぎに季昌が名公に校正を求むる文、闕如する能はず、以て原文と國譯とを載せ其の志を見ん、

求名公校正咨目

庚竊謂文藹昭代之英華。昌符國運。理探先賢之隱祕。學本家傳。是固儒者之當究心。誠體聖主之所加意。蓋美刺形於歌咏。政化有關。然訓釋泝其淵源。刑法無禁。自幼至老之所素願。雖愚不肖之可與知。念唐年幾三百之多。仙李茲謝。仰詩宗垂諸什之富。

汗竹尙香。引物連類之難究。積日成歲之易久。深虞坐井之見謾興測海之謀。臺卿七篇之解甚明。尙慮遺闕。以需改正。晦翁四書之注已備。猶設或問。以辨疑訛。予復何能敢自爲是。迂重負於他境。併力堪扶。示宿恙於通衢。良方乃得。用求王公大人之警欬。寧惜耆舊老成之樞趨。倘臭味式契於芝蘭。庶采掇不遺於葑菲。如曰胷蟠國子監。可讀工部集。玆惟難哉。就使眼空天下書。始答韓公策。蓋亦寡矣。顧責恕輕重之角立。致毀譽榮辱之畦分。覆瓿誣二陸之譏。洛陽愈增於高價。凌雲託九重之薦。司馬爰慊於超遷。幸大道之唯公。喜微言之不泯。行吟向曝。思獻天子之尊。佇俟觀風。願陳民俗之厚。拳拳尺素。耿耿丹心。

庾竊かに謂ふ、文は昭代の英華を藹す、昌は國運に符ふ、理は先賢の隱祕を探る、學は家傳に本づく、是れ固に儒者の當に心を究むべく、誠に體す

聖主の意を加ふる所、蓋し美刺は歌詠に形る、政化關するあり、然して訓釋は其の淵源に泝のぼる、刑法に禁なし、幼より老に至るまで素より願ふ所、愚不肖と雖も與に知る可し、唐の年三百の多きに幾きを念ふ、仙李玆に謝す、詩宗の諸什の富を垂るるを仰ぐ、汗竹尙香ばし、物を引て類を連ぬるの究め難き、日を積み歲を成すの久しかり易し、深く井に坐するの見を虞れ、謾に海を測るの謀を興す、臺卿七篇の解甚だ明なり、尙遺闕を慮んばかり、以て改正を需む、晦翁四書の注已に備はる、猶或問を設け、以て疑訛を辨ず、予復何ぞ能く、敢て自から是と爲ん、重負を他境に迂す、力を併せて扶くるに堪へたり、宿恙を通衢に示す、良方乃ち得たり、用て王公大人の警欬を求む、寧ろ耆舊老成の樞趨を惜まんや、倘し臭味式て芝蘭に契はば、庶くは采掇するに葑菲を遺さじ、胷に國子監を蟠にして、工部集を讀む可しと曰ふが如きは、玆れ惟れ難き哉、就使眼に天下の書を空し

くし、始めて韓公策に答へば、蓋し亦寡なし、責恕輕重の角立を顧み、毀譽榮辱の畦分を致す、覆瓿二陸の譏りを誣ふ、洛陽は愈よ高價を增す、凌雲九重の薦に託す、司馬奚ぞ超遷を慊はん、大道の唯公ならんことを幸とし、微言の泯びざるを喜ぶ、行吟曝に向ひ、天子の尊に獻ぜんと思ふ、佇俟風を觀て、民俗の厚きを陳べんと願ふ、拳拳たる尺素、耿耿たる丹心、

季昌三體詩を注し了り、此の咨目を以て名公大人に校正を乞ひしものなり、咨は問、目は條目、今の世は良とに文明にて儒者は儒者として完全に道を修むべき時なり、而して其の文化を助くるは最も詩に在りと爲し、不佞は幼より詩に志しを抱く、而かも仙李唐は李氏老子の後と云ふ仙李は即ち唐室なり も謝亡なし詩宗も已に去ると雖も、尙其の集あり以て學ぶ可し、而かも不佞は臺卿の才なく、晦翁の學なし、之に加ふるに生來多病、健人の如くならず、是を以て名公の門下に趨拜する能はず、幸に名公は芝蘭の如き臭味を已に具し玉ふ、我が葑菲の如き惡艸も捨て玉はずして高見を垂れよ、晉の陸機陸雲の二兄弟は『三都賦』を作る、人の之を譏るあり、而かも洛陽の紙價は益す高し、覆瓿は覆甕なり『三都賦』を指す 司馬相如は『大人賦』を作りて、等を超えて遷りし事あり、我二陸相如にあらず

と雖も、亦此の類のもの無しとせず、米を賣る人、米を水に濕ほし、晴日に向うて之を曝らし、以て巨利を占む、我は行吟、乃ち辛苦推敲にあらず途上に於て注したる此の拙著も、天子に獻ぜんと思ふなり、尺素を捧持し、寸丹を表して毫も誑むく所なし、諸公幸に是正に咨なる勿れとの意、

國譯三體詩

宋　周弼伯弓著
日本　釋清潭譯並講

卷の一

序言

此の三體詩は宋の淳祐十年（日本後深草天皇建長二年）に周弼字は伯弓の選ぶ所のもの、是より後六十年を經て元の至大二年（日本花園天皇延慶二年）に高安の釋圓至天隱が注を著はし、其の友東嘉の裴庚季昌が增注を著はし以て世に出ししものなり、日本の傳來は建仁寺の中巖圓月が入元して携へ還りしより、禪家宿老の提唱と爲り、熊谷立閑の如きは備考大成二十卷を著はし南禪和尚は和語俗談十二卷を著はすに至る、是の故に釋家に於て盛んに之を用ひたるなり、物徂徠は李于鱗の唐詩選を盛行させんが爲め特に此の本を貶して伯弓は一無名子書賈の輩と詐稱するに至る、此の如き所より儒流は多く唐詩選、緇流は多く三體詩を講じたるなり、三體とは何ぞ、五言律と七言律と七言絶となり、伯弓が宋の世に生れて、宋詩を選ばずして唐詩を選ぶは深く考ふる所あるに由る、宋

の世は南北を論せず大小家數を問はず、勃窣理窟を喜ぶの風ありて、詩の本義たる溫藉典雅は全く認め得ず、例へば黃山谷の如き楊誠齋の如き蘇東坡の如き大家を以てしても、動もすれば俗語俚語油腔滑調、殆んど讀むに堪へざる詩を出す、是の如きものを以て法とせんか、其の弊の及ぶ所、殆んど矯正する能はざるに到る、伯弱の慧眼此に見るあり、此の弊を救ふには唐詩に及く者は無しと、其の意深切なりと謂ふ可し、依て其の名も『唐賢三體詩家法』と稱す、人家子弟の教科書と爲したるの意明明たり、音便の善は『三體詩』の三字にあるを以て普通此の略稱が行なはれしものなり、三體の詩法は左の如し、

- 七言絕
  - 實接
  - 虛接
  - 用事
  - 前對
  - 後對
  - 拗體
  - 仄體
- 七言律
  - 四實
  - 四虛
  - 前虛後實
  - 前實後虛
  - 結句
- 五言律
  - 四實
  - 四虛
  - 前虛後實
  - 前實後虛
  - 一意
  - 起句
  - 結句
  - 詠物

此の如くに分體したるは卽ち周弼の發明にして、前人の未だ曾て言はざる所、明の李東陽は其の分類の細碎に過ぐると云うて之を誹る、然りと雖も此の如き法と合致すとなれば何ぞ亦誹るに及ばん、蓋し唐賢が詩を賦する際に及んで、一一此の細目を土臺にして以て一篇を構成せしやと言はば、決して此の如きことはあらざるなり、後人が唐賢の詩を讀めば自然に此の法に成て居ると見れば可なり、詩の本義、元來行雲流水、向ふ所變化自在、或は屈し或は伸び、有法の極、無法に歸すが詩でも畫でも一致する所なり、其の變化自在なる所を以て、一代の作手と稱し、千古の正宗と爲すなり、小兒學語は小兒に在ては必要なり、大人に在ては、豈に必要あらんや、畢竟此の選は小兒學語の爲めにして、大人の爲にあらざるなり、是を以て唐賢三體家法とは言へ、盛唐諸公は取らずして、中唐晚唐の人のみを取れり、唐二十代、二百九十年間、詩人として名を成したる者屈指に遑まあらず、然るに文宗卽ち十四代の天子の開成年中より哀帝卽ち二十代の天子の天祐年間に至る詩人は大家の稱を受る者幾人も無く、詩品の墮落と共に人品の墮落も亦爭はれざる事實とす、今、宋の嚴羽が唐三百年間を四唐に分つ順序を見るに、

初唐　高祖の武德年中より玄宗の開元年中に至る大凡百二十年間

盛唐　玄宗の開元より代宗の大曆中に至る大凡三十年間

中唐　代宗の大曆中より敬宗の寶曆中に至る大凡五十年間
晚唐　文宗の開成より哀帝の天祐卽ち五季に至る大凡九十年間

此の中初盛を一とし、盛中晚の三唐と稱する事もあり、詩の氣格風調に異なりある所より區別せし名稱なれば、詩の歷史上此の名あり、普通の歷史に於ては三唐の區別は用ゐざるなり、嚴羽は其の時代卽ち宋の世、詩風の墮落せるを救はんと欲して、此の三唐の名目の下に論壇を築きし者、是の故に嚴羽に讚する者と否とする者との二派を生ずるに至る、明の胡元瑞、淸の王漁洋、沈歸愚は贊者の一人なり、明末の錢牧齋、淸初の馮定遠は反對者の一人なり、我邦にも贊否兩派あり、徂徠派の人人は贊にて、近時山本北山の一派は否とするなり、余を以て之を視れば、贊者の論は頗る明白にして、否者の說は頗る愚昧なるものなり、論よりも證據として其の時代の詩を把て之を讀めば直ちに了解すべきなり、了解する力無くして喃喃する狂者にあらずんば鈍徒なり、是の如く余の立場として、此の「三體唐詩」に對すれば、周弱も眼孔甚だ明かなる人なり、而かも此の選盛唐を主とせず中晚唐を主としたる所以は全く大人先生の爲ならず、幼童をして其の詩法の正を失はざらしめんが爲めなり、讀者亦此の意して可なり。

七言絕句

實接

伯弓曰く絕句の法は大抵第三句を以て主と爲す、首尾率直にして婉曲なきものは此れ異時宋元となり唐に及ばざる所以なり、其の法は唯久しく其の傳を失するのみならず、人も亦能く之を知ると鮮し、實事を以て意を寓して接するときは轉換力あり斷ゆるが若くにして接ぐ、外振起して、內平妥に失せず前後相應ず、四句に止まると雖も而かも不盡の意を涵畜す、此れ其の略のみ、詳らかにして之を求め玩味すること久うして自から當に得る所あるべし。

實接とは第三句卽ち轉句を云ふ、所謂一篇の主體となるものなり、有形なる者、有解なる者總て之を實と云ふ、無形なる者、無解なる者總て之を虛と云ふ、故に詩法の上に實を景と稱し、虛を情と稱す、其の景情を具備して、口に誦し易きものを以て詩の根本義とす、此の二者の運用を工にする者を以て大家と呼び作家と稱す、其の微細なる所に至りては詩其のものの條下に於て辨ずべし、反覆する者は自然に神解するに難からず、玆に一言叙して此の書を讀む者の心得と爲すとなり、祇南海曰く「三體詩の一書は全く境の實と趣の虛とをつり合せ

て作る法を示したる書なり、人此の書の主意をばそこそこにして、詩の意を穿鑿し半夜の鐘にばかりも多說紛紛たるは甚だしき心得ちがひなり、本書唯、前虛後實、前實後虛等の法を立る爲め其の格に合たる詩をのみ載せたり、故に七言の內にはことの外宜しからざる詩もあり」初學の爲め大に益ある言とす、記して以て參考に資する所以、

華淸宮　杜常

行盡江南數十程　曉風殘月入華淸
朝元閣上西風急　都入長楊作雨聲

行き盡す江南數十程、曉風殘月華淸に入る、朝元閣上西風急なり、都て長楊に入て雨聲を作す、

【略傳】杜常は新舊の『二唐書』『唐詩紀事』『唐才子傳』悉く傳無し、『談圃』『西淸詩話』『詩藪』『升庵詩話』『洪景盧隨筆』『居易錄』悉く宋人とす、『居易錄』に杜常は北宋の人、華淸宮詩、今唐詩多く誤りて之を收む、周弼の誤收すること疑ふべからず、

【句釋】華淸宮は唐の太宗第二主の建つる所、もと溫泉宮と名く、玄宗唐の第六主が華淸宮と改め、年

年冬季に及ぶと楊太眞と共に避寒したる處、陝西省西安府の驪山に在り、行盡江南數十程此の句は傳來に種種あり『焦氏家乘』に一別家山十六程とある、『鐵網珊瑚』に東望家鄉十六程とある、余の見としては今の句が第一なり、然れども事實としては東望が可なり、華淸と江南とは相隔たる實に數百程、それを數十程と云うては事實に合ぬ、裴季昌の注に「江南ハ蜀江ノ南ヲ指ス、蜀ヨリ長安ヲ望メバ北ト爲ス蜀ハ南爲リ」とあるが、畢竟江南の字を無理に辯護したるに過ぎず、岑嘉州の詩に行盡江南數千里の句あり、千里を十程と改めしものならん、曉風殘月の句も『楊升庵詩話』には曉星殘月に作る、瞿宗吉の『歸田詩話』には曉乘殘月に作る、二家共に風字を除く、三句の西風を以ての故ならん、蓋し同字を除く意味の上からとすれば入の字も二字あり、是も一方除かざるべからず、入の字を除かずとすれば、風の字亦除く必要を認めず、依然として曉風殘月の四字動かす可らず、入華淸杜が華淸の舊址を見んが爲め、曉風殘月に乘じて此に入る、亦側面の解には行盡の七字は玄宗が蜀へ出奔せる事で、曉風の七字は安祿山の兵士が華淸に亂入せる事ともある、朝元閣は華淸宮裏の一閣、老君が天寶七年に此の閣に降下したと云ふより降聖閣と改めた、唐は李氏なるを以て殊に老子を尊崇し、玄宗は尙更仙術を好んで長生せんと欲したり、而かも其の長生を欲したる人は已に死して今唐閣のみな

り、寂寞荒涼の狀を言ふ、上西風急上の字も後人の改めしもの、原作は下の字なり、西風は秋風、急は急遽、西風の驀進する貌を云ふ、是も正面の解は杜が今日朝元閣下にて西風の急なるを見し實況であるが、側面の解は安祿山や史思明が大軍を進めしに比したものと見る、都は悉で今見し所の狀態は都てなり、入長楊此の長楊宮は秦の始皇が建て、漢の武帝が修理して巡幸の用に備へしもの華清とは地理に於て隔絶するが、長楊は咸陽に在りしなり今玄宗の事を咏ずるに秦皇漢武と並べて共に不死の法を求めしも、共に畫餅と爲りし、然らば此の華清もヤガテは長楊宮の如く跡形も無くなり、所謂作雨聲唯雨聲のみ激しく起る寂寞を語るもの但雨聲のみなり、長楊は宮名なれど又楊を多く植ゑたるを以てなり、雨聲の字、是に於て活躍すること知るべし、サテ此に論ずべき事は此の長楊は宮とは關係なく全く楊柳の事と見る、西風が如何に迅速にせよ數百里を隔つる咸陽の朝楊まで行く道理は無く、且宮名を二處に用ふるの愚も名家の爲さざる所、是の故に謂ふ、西風か長楊を吹けば、聞く者は風聲と聞かずして雨聲を聞く如くに覺ゆるを云ふ、從來の訓【雨聲ト作ル。】に作る、今は「雨聲ヲ作ス」と作る、

【評論】此の篇、同字多きを以て古今云云する所なるが、明の都穆の『鐵網珊瑚』の辨頗る要を得たり、曰く歲癸酉に在り、余使事を以て、陝道に至り臨潼を經、驪山の溫泉に浴し石刻を

見る、中に此の詩あり乃ち秦鳳等路提點刑獄公事太常丞杜常云ふ、東望家鄉十六程曉來和月到華清、朝元閣下西風急、都入長楊作雨聲、若し此の石刻を以て原作とせば是を正とせざるべからず、清の沈歸愚曰く末二句荒涼の狀を寫す、甚しく解するを求めず、甚しく解するを求むる者は竟に詩を知るものにあらず、

宮詞

金殿當頭紫閣重　仙人掌上玉芙蓉
太平天子朝元日　五色雲車駕六龍

王建

金殿當頭紫閣重なる、仙人掌上玉芙蓉、太平の天子朝元の日、五色の雲車六龍に駕す、

【略傳】王建字は仲初、潁川の人、大曆十年の進士、工に樂府歌行を作る。

【句釋】宮詞は宮禁中の事を詠ず、本集に百首あり、皆以て後人の奉じて奎臬と爲す所なり、金殿は天子の坐所、當頭は眞正面と云ふ意味、紫閣重金殿の周圍に紫彩を以て色どる閣が幾重ぞ、仙人掌の名は漢の武帝より起る、武帝は承露盤を作りて其の盤上に仙人掌を置き、此の仙

人掌に墜し露を取り玉屑に和して之を飲み、長生を求めたるなり、上玉芙蓉玉の盃を稱して玉芙蓉と言ふ、形芙蓉の花なればなり、太平天子は玄宗を云ふ、武后が嚮きに豫言して玄宗を太平天子と云ふ、朝元日は元日を云ふ、『尚書』に元旦を歳朝、月朝、日朝、之を三朝とも三始とも云ふ、紫閣に於て天子が羣臣の拜賀を受るなり、朝元閣は老子を祀る堂、五色雲車五色の雲を以て彩色する所の車、即ち仙人の乘る車、人間の乘る車にあらず、然るに漢武や玄宗は仙人が不老長生であると云ふ點より之を喜び、宮中の模様も、衣服の工合も、皆仙人の用ふる所の物に象どりしなり、駕六龍馬を假りに龍と稱したるなり、仙人は馬より龍の方が適切である所より、今天子の車を是に譬へて出したるものとす、

【評論】　此の篇、釋天隱は評して曰く、「玄宗を諷する爲め作る、王者は王者の禮がある、奇器は宮中に入れず、君は奇車に乘らず、況や非禮の器を作り、服食を爲し以て、不死を求め、鬼神の車服に御して以て淫祀するをや」此の說頗る可、野口寧齋は「太平天子の好文字を用て、一番の譏刺を試みたるのみ、明皇の事は建の意中にあらず、」此の說は不可なり、驕奢の天子を諷刺したとあれば、玄宗を諷するより外は無し、漢武の如き過去の天子を諷するなりと云ふ鈍劣の事は曾てあらず、仔細に讀むべし、

吳姬

薛能

自是三千第一名　內家叢裏獨分明
芙蓉殿上中元日　水拍銀盤弄化生

自から是れ三千第一の名、內家叢裏獨分明、芙蓉殿上中元の日、水銀盤を拍て化生を弄す、

【略傳】　薛能字は大拙、汾州の人、會昌六年進士に登る、咸通中嘉州刺史と爲り、又許州に徙る、後工部尚書と爲る、後自屠す。

【句釋】　吳姬は美人の代名詞とす。吳は國名、周の太伯が始めて住せし地、姬は周の姓なり、此の吳國の婦人は他國の婦人より美なるを以て、後世、美人を稱するに皆吳姬の名を以てす、廣義に見れば上の如し、蓋し此の詩は狹義の吳姬卽ち宮女を詠じたるなり、自是「モトヨリコレ」と和訓する、三千は多數を云ふ、孔門弟子三千、威儀三千、皆大數を意味す、今宮女の多きを云ふ、第一名第一の名姬なり、今日用ふる一名とは違ふ、內家は妓女の宜春院に入る者を內人と謂ひ、其の家は敎坊に在る、之を內家人と謂ふ一說內家は天子の宮中を禁內と爲す二說今の內

家は宮中の内人と見るなり、叢裏は多數の中の意義、獨分明第一の名姫であるが故に分明なり、芙蓉殿上は曲江池陝西省西安府の東に在る、西に在るは杏園、北は梨園、共に游宴の處とす、隋の文帝より芙蓉園の名を用ふ、唐の天子も此に據る、中元日七月十五日なり、上元正月十五日　中元七月十五日　下元十月十五日の三元は道教より出づ、三元共に此の夜を以て太乙星を祀り、燈を點じ明に達す、然るに七月の望は佛教の盂蘭盆と同時なるが故に混交したままで今日に傳はる、漢土は七月望に道教は無祀會を修す、佛教は盂蘭盆會を修す、日本には無祀會は無し、道教は日本に弘まらざりし爲めなり、劉煦の『舊唐書』に依れは「代宗第八天子内道場に於て盂蘭盆を修し、飾るに金翠を以てし、費す所、百萬」とあり、水拍銀盤銀製の盤に清水を滿滿と入る、勢ひ拍つこととなる、弄化生蠟を以て嬰兒の形を作り、水中に浮て游戯となす、婦人子に宜しき祥事とする、之を化生と稱す、西域傳來の説とあるが、出典は明白ならず、胎生と濕生と卵生と化生とを佛教で四生と云ふ、今の化生は佛教の化生にはあらず、但其の名を假りしのみ、寧齋は「化生は西域の器」と云ふが未詳、

【評論】　此の篇、薛能は初め文官に希望ありしも、事志しと違ひ、却て武官と爲りしが故に其の鬱悶を遣る考へにて此の題の詩八首を賦したるもの、例へば女子が少しく姿色あれば、卽ち

君寵を蒙むり、榮華を專らにするを得、然るに我は才に於て拔羣、猶ほ吳姫の三千人中第一なるが如し、而かも我は甚だ榮達せず、自から憫むに堪へたり、其の不平を訴ふるに此の婉曲の言を以てす、到底我邦人の及ぶ所にあらざるなり、以上三首第三句が主意と爲す、句法字法皆相似たる作法を示せるなり、

歸雁　　錢起

瀟湘何事等閒回　水碧沙明兩岸苔
二十五絃彈夜月　不勝清怨却飛來

瀟湘より何事ぞ等閒に回る、水碧沙明兩岸の苔、二十五絃夜月に彈ぜば、清怨に勝へずして却て飛來らん、

【略傳】　錢起、吳興の人、天寶中進士に擧げらる、考功郎中に終ふ、郎士元と名を齊うす。

【句釋】　●歸雁此の鳥、性寒地を好む、秋に來りて春歸る、來賓、征禽、客鳥、陽鳥の異名がある、一種の哀音を以て古今の詩人に詠せらる、●瀟湘廣東省より出る瀟水と、廣西省より出る湘水が北流して合する所、洞庭湖と爲る、此の合する所から瀟湘と一意に稱したるなり、良とに

雁の棲處に佳き處、然るに何事と雁に向て質問する、等閒回等閒は不用心又は徒らなりと注して平氣に回り去るや、水碧沙明兩岸苔七字瀟湘卽ち洞庭の風景、雁の棲處に宜しきを形容して示す語、二十五絃は卽ち琴なり、『爾雅注疏』に庖犧氏初め五十絃を作り、黃帝素女をして瑟を鼓せしめ、哀み自ら勝へず、之を破りて二十五絃と爲すと、彈は琴を引くなり、夜月は彈琴にも可、雁の往來にも可、不勝清怨は湘君の靈が古の素女の如く、此の二十五絃を彈せば其の音哀切清怨、之を聞くの雁も其の情に勝へずして回らんとはしながらも、却飛來で雁も北方へ飛去を止めて復湘の南、卽ち水碧沙明の處へ來るであらうと、作者が意想を遣る、

【評論】　此の篇、盛唐の氣格、整然として千秋の名篇たるに背かず、瀟湘と云ふ巨景を眼前に髣髴せしむるの力、中晩唐諸家に無き所なり、初學宜しく三復すべし、

逢賈島

張籍

僧房逢著欵冬花　出寺吟行日已斜
十二街中春雪遍　馬蹄今去入誰家

僧房に逢著す欵冬花、寺を出て吟行すれば日已に斜なり、十二の街中春雪遍し、馬蹄今去て誰が家に入ん、

【略傳】　張籍字は文昌、和州烏江の人、國子博士と爲る、國子司業に終ふ。

【句釋】　逢賈島此の人は初め無本と云ふ僧なり、韓退之に勸められ歸俗して賈島字は浪仙と稱し、進士、長江主簿、普州司倉參軍、司戶等の官を經、六十五の時牛肉の中毒で死去す、張が途中で之に逢ひ此の詩を作りしなり、僧房は寺のこと、逢著は逢は値である、著は麗なり、黏なり、著は要するに逢の字の助語、僧房に寓在する意味、欵冬花は欵凍、顆冬、鑽凍、菟奚等の異名あり、和名「フキ」形狀良とに寒寂なる所より之を賈島に譬へしもの、出寺は島が寺を出て吟行路上且吟じ且行く、日已斜殘日に垂んとす、十二街中中の字頭に作る本あり、京城卽ち長安の街衢の區劃が十二條なり、春雪遍俗人輩や小人共を春雪に譬ふ、長安百萬家此の徒輩が遍きなり、馬蹄は島の乘る馬、今去入誰家牡丹とか芙蓉とかなれば誰の家へでも入れるだらうが、寒寂なる欵冬花なぞ俗人輩の目には映ぜざるなり、

【評論】　此の篇、比體を以て之を出し、其の意は詩人と俗人と相容れざる事を咏じたるもの、人口に膾炙して名篇と爲す所以なり、

江南春　　杜牧

千里鶯啼綠映紅　水邨山郭酒旗風
南朝四百八十寺　多少樓臺煙雨中

【略傳】杜牧字は牧之、太和の末、侍御史と爲り、司勳員外郎、中書舍人と爲り、年五十にして卒す、杜甫に別つ爲め小杜と號す、又狂杜醉杜と稱す、樊川の人なるを以て其の集を杜樊川集と云ふ、

【句釋】江南春は杜牧の本集には「江南道中春望」とあり、三字を減じて今の題と爲す、管絃に合する曲名と爲したる故なり、支那で單に「江」と言へば楊子江に限る、水源は同じく青海なるが北帶は黃河に屬し、南帶は楊子江に屬す、宣州へ赴く途中、江南を過ぎて作りしもの、千里は遠方の意味にあらず、處處の意味なり、江南と云ふ茫漠たる題目なるが故に千里と廣大に出す、鶯啼春色を貼するには此の鳥に限る、綠映紅綠は下句の水村に對し、紅は下句の山郭に

對す、「綠水紅花に映ず」と見て可なり、水村山郭は人の地位、前句の景の地位を起す、酒旗風和煦の光景を現出す、春日の道中、人意に可なるを云ふ、南朝は東晉の後、宋、齊、梁、陳の四朝は皆建康に都を定む卽ち今日の江蘇省江寧府なり東晉も南朝なり洛陽卽ち今の河南省河南府に據て覇を稱したる魏や周は之を北朝と云ふ、四百八十寺四朝の中、梁陳は最も佛敎に厚くして、梁武の如きは寺を無數に建て、特に同泰寺に幸して袞龍の服を釋て法衣を服し、淸淨の生活を爲し八十六を以て崩じた偉天子なり、陳の高祖、文帝、宣帝、後主、皆奉佛の人なるを以て寺も無數に建て、四百八十に止まらず、季昌の說には七百餘寺ありしも侯景の亂後四百八十と爲りしなりとあり、余謂ふ杜牧の意は寺の數を寺籍簿的に擧げたるにはあらず、南朝の二字が二十一畫より出來、四百八十寺の五字が亦二十一畫より成る、依て四百八十寺で南朝の寺と爲るなり、後世作者が工夫せる所を知らず、依樣葫蘆で牧之が苦辛を察する者を見ず、洵とに惜む可し、此の如く解釋して以て第一句の千里も活躍するなり、多少は幾許と同義、樓臺は寺樓梵臺卽ち寺を云ふ、煙雨中俗語の「春ガスミ」の中に在るとなり、

【評論】此の篇、人口に膾炙して、黃口小兒も知る、隨て種種の議論あり、明の楊升菴曰く千里は十里の誤寫なり、千里鶯啼誰人か聽き得ん、千里綠紅に映ず、誰人か見るを得ん、若十里

に作らば、鶯啼綠紅の景、村郭樓臺僧寺酒旗皆其の中に在りと、愚説も極まる、漢土の十里は日本の二里未滿なり、題目已に江南と云ふ、彼の大陸的人間が僅かに二里位のものを大袈裟に江南と題する理由なし、千里を處處と意義を解せざるの致す所、終に此の愚説を吐くに至る、亦一説に此の詩は隔句對にて起句と轉句は南朝の盛事を云ひ、承句と結句は牧之が眼前の景を叙すと、是も愚説なり、試みに見よ南朝の盛事には鶯啼き紅は綠に映ずるも、今日の春は鶯も啼かず、綠は紅に映せずとするか、題目の江南の春に少しも合せず、要するに此の詩は卽景卽目を賦したるのみにて、他意毫髮もあらず、十の字の音、長安語の諶「シン」と訓む、白樂天の紅欄三百九十橋と一樣なり、四百八十寺を南朝と字畫の數より解したるは余の獨斷なるが、此の析字法は古來より有る、米の字が八十八と爲り、菜の字が四十八と爲り、分解と結合とは、文字使用上一種の游戯なり、使用法の巧拙に依て雅とも爲り、俗とも爲る、

別李浦之京　　王昌齡

故園今在灞陵西　江畔逢君醉不迷
小弟鄰莊尙漁獵　一封書寄數行啼

故園今灞陵の西に在り、江畔君に逢うて醉て迷はず、小弟鄰莊に尙漁獵すらん、一封の書は數行の啼を寄す、

【略傳】　王昌齡は京兆の人、字は少伯、龍標の尉と爲るに依て王龍標と云ふ、江寧の丞と爲るに依て、其の集を江寧集と曰ふ、玄宗の開元十五年の進士、祕書郎、汜水尉、江寧丞、龍標尉等の諸官を經て卒す、詩名は高適、王渙之と並稱せらる、

【句釋】　李浦は王の友人なり、京は長安、故園王の故園は異説あり、鹽冶の人とも曰ひ、太原の人とも、瑯琊の人とも、江寧の人とも曰ふ、此の詩に依て判ずれば長安の人と定める、而かも證據は外に無し、今在灞陵西灞陵は漢の文帝陵廟の地、陝西省西安府咸寧縣東に在る、王が家は文帝陵の西方に當るものと斷定して可なり、江畔は楊子江畔を言ふ、逢君醉不迷李浦に逢うて其の京に赴く話を聞く、日日忘れざる故園の事なるを以て、醉ふとも迷ふ樣なことは無し東か西か分明に知て居る、小弟は王が自身の弟を云ふ、鄰莊は地名としては湖南省に在るが、其の地名にはあらず、鄰村と見て可なり、尙漁獵無益の事を娛しく思ひ、魚を釣り、兎を獵り、放逸の習に任すこと、小人や愚人の所業を云ふ、弟等は志青雲にあらずして、ツマラヌ事を

爲して居るならん、一封書寄數行啼李浦に托して小弟等に寄する一封書は彼等を誡しむる爲め吾が數行の啼涙が之に入てある、之に包まれてある、

【評論】　此の篇、李浦に就ては何の言ふ所無く、唯封書を依賴するのみ、而かも小弟に就ての情は言ふ可らざるものあり、『全唐詩』に王の詩を評して緒密思清と、此の四字では王詩を評し得たりと言はず頗る不足の感あり、蓋し其の不足は古今諸家が補うて餘り有るゆゑ恨むに足らず、七絶に於ての絶倫超群、李太白と盛唐に肩を摩すべし、中唐の李益聊か之に追隨すべし、他は及ぶ者無し、

題崔處士林亭

王維

綠樹重陰蓋四鄰　青苔日厚自無塵
科頭箕踞長松下　白眼看他世上人

綠樹重陰四鄰を蓋ふ、青苔日に厚うして自ら塵無し、科頭箕踞す長松の下、白眼にして看他す世上の人、

【略傳】　王維字は摩詰、世に王右丞と稱す、太原山西省太原府の人、開元年、年十九にして進士に登る

種種の官を經て、尙書右丞に進む、詩と畫に於て聖域に入る、人物亦一代の師表たり、王維集十卷あり、

【句釋】　●崔は姓名は興宗、處士は仕官せざる在野の人の稱、未婚の女を處女と云ふが如し、●林亭は小なる家構を云ふ、●綠樹●重陰●鬱密なる林陰、●蓋は覆蓋（傘）となる、●四鄰鄰字は俗人多く隣字に作る、阝が左に居る、左に居るものは阜、卽ち土山、右に居るものは邑卽ち四井、鄰は「オホザト」に從はざるべからず、俗本多く隣と爲す、厭ふべし、●青苔●日厚●自●無塵●緣樹上にあり地は青苔を日に厚密にす、夏日林亭の淸淨なる狀、●科頭は崔の頭を指す、結髮なり、處士の頭、官吏の頭とは異なる、科は蝌蚪、卽ち蛙子を云ふ、其の髮の形、科斗の如くなるを以てなり、●箕踞は『史記張耳傳』に、「高祖箕踞嫚罵」とあるが出典なり、其の狀は兩脚を伸し手を以て膝を按ず、箕の貌の如くなるを以てなり、磊落の態度を云ふ、科と箕と頭と踞と對を爲す、●長松下●は字の如し、●白眼晉の隱士阮籍が祖先なり、俗徒に對すれば白眼にて之を迎へ、友人に對すれば青眼にて之を迎ふ、處士も亦之を學ぶ、看●他●世●上人從來多く「他ノ世上ノ人ヲ看ル」と訓む、今は「看他ス世上ノ人」と訓む、大典禪師や東條琴臺などの讀方は正しきなり、崔處士其の人を全く阮籍に比したるにはあらざるが、其の人、志を高尙にして俗人等と交はらざるを以て此の

事を用ひしなり、

【評論】　此の篇、淸の沈歸愚は評して粗派と云ふ、王右丞としては品格高からざるも、他人に在ては上乘の作なり、維の長は七律に在りて、七絕にあらず、此を以て右丞悉くせりと云ふ者は謬まりなり、

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼霜滿天　江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船

月落烏啼て霜天に滿つ、江楓の漁火愁眠に對す、姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る、

【略傳】　張繼字は懿孫、襄州の人、天寶の進士、官は檢校祠部員外郎、又鎭戎軍軫轄と爲る、

【句釋】　此の詩は字字句句の解釋は何等の興味も無し、全首を一括して提唱するを可とす、此の詩は何人も知る如く種種議論のある詩、容易に解決せず、初學の士は、往往迷はさるる所、宋の歐陽修が夜半は鐘を打つ時にあらずと、宋人一流の議論を吐きしより、東西南北に是と非

との說が湧き來る、宋人が詩の旨趣を沒却して徒らに皮相に拘泥するは憫むべきもので、歐が此の詩を評したるも亦其の一端なり、「詩は情致を重んじ、事實を重んぜず」の意は何人にも解し易きが、是れを解せざるが宋人の憫むべき所なり、抑も此の詩は字面の如く正直に解して以て其の旨趣を味ふことを得、一二の起承は、卽ち曉景にて、三四の轉結は卽ち昨夜の景なり、宋人の如く議論するならば、夜半の結句を第一句に移し、月落の起句を第四句に移して見よ、何の支障も無く通ずるなり、其の言ふべきことを前後したるを以て沒分曉漢が彼れ此れと論ずるなり、作者の本意は客と爲て偶ま楓橋に泊したり、而かも一夜熟眠する能はず、ウツラウツラと所謂愁眠して江楓の漁火卽ち漁村の燈火に對しつつ終に月落烏啼の曉天に及んだり、其の熟眠せざる證據には姑蘇城外の寺より響き出したる夜半の鐘聲も聞て知り居ると云ふが大體なり、文字の使用法も亦甚だ分明なり、月字あるを以て夜字あり、對愁眠に對して到客船がある江楓漁に對して姑蘇城が出る、唐賢用意の周到なる察知するに難からず、淸の余紗山なる者云ふ「鐘聲が寒山寺より來る、天已に曉けんとす、張繼猛然として醒む、猶疑うて夜半と爲す」と、不當の說も甚だしい、若し此の說の如くならば、對愁眠の三字は死字と爲る、愚說一顧の價値も有せず、全唐詩を讀む張繼が「再泊楓橋」の詩より、「白髮重ねて來る一夢の中、靑山改めず舊

時の容、烏啼月落江村の寺、枕を欹て猶聽く半夜の鐘」と此の詩を證據として半夜鐘は鐘の名で、撞くのは曉天なりと云ふ論者が出づ、沒分曉漢の一人なり、曾て愁眠中に夜半の鐘を聞きしが、再泊の時も彷髴と之を聽く、依て「猶聽」の二字を下す、唐賢が詩に於る、疎略の如くにして而かも緻密なる驚くべきものあり、宋人や清初の人は細を細に求めて畢竟草間の小蟲が鳴聲のみ、

贈殷亮

日日河邊見水流　傷春未已復悲秋
山中舊宅無人住　來往風塵共白頭

戴叔倫

日日河邊に水流を見る、春を傷むこと未だ已まず復秋を悲しむ、山中の舊宅人の住する無く、風塵に來往して共に白頭、

【略傳】戴叔倫字は幼公潤州金壇の人、建中年德宗に杭州の刺史と爲る、五十八にして卒す、三體詩には蕭穎士に師事して門人の冠と爲ると記載あり、全唐詩には此の事記しあらず。

【句釋】●●●贈殷亮殷亮は陳都の人、刺史の官に到りし人、●●●●●●●日日河邊見水流孔夫子が水の流を見て

逝者如斯と嘆息して以來、詩人も文人も皆哀愁を遣る道具の第一と爲したるものなり、傷●●●●未已復悲秋水の流は晝夜を捨てず、晝夜を捨てずに奔下するが故に九春も九秋も亦速かに過ぎ去る、以上二語の要は歲華の迅速なるを嘆じたるなり、●●●●●●●山中舊宅戴叔倫の舊宅は饒州の薦福寺と云ふ寺なり、●●●●無人住今日は其の寺を守る人も無きを言ふ、叔倫自身の還らざるは勿論なり、●●●●●●●來往風塵共白頭君も僕も官吏生活の爲め、山中清淨の生活は一向に能はず、共に老人と化し去ると嘆息するの意なり、風塵の義頗る廣し、兵亂(一)人寰(二)宦途(三)俗吏の職(四)妓坊(五)要するに汚れたる意は共通と爲す、今の詩宦途と見ても、世間の事と見ても何等の害なし、

湘南卽事

盧橘華開楓葉衰　出門何處望京師
沅湘日夜東流去　不爲愁人住少時

【句釋】●●湘南は湖南の長沙郡を言ふ、旅寓中の作とす、盧橘は一名、金橘、一名金柑、一名山流し去る、愁人の爲め住まること少時もせず、

橘、一名給客橙、『廣州記』に盧橘皮厚うして黄色なり、大さ柑の如く酢し夏熟す、土人呼で壺橘と爲す、俗に「花タチバナ」なり、枇杷の異名との説もある是れは謬まりならん、此の華が開きて楓葉衰ふる時、卽ち晩秋なり、出門寄寓所の門を出づ、何處望京師帝王所居の地を京師と爲す、京は大なり師は衆なり、群民の輻湊する所なればなり、長安は望むも見るを得ざるなり、沅湘沅水も湘水も日夜滔滔として止まず、東流去長安の方卽ち東方に向て奔流し去る、不爲愁人愁人は戴自身を云ふ、流水も愁人の情を察して吳れれば住まること少時位は爲ても可なり、如何せん無情の物、片時も住まらずに衰衰と流れ去ると嘆息するなり、

【評論】　此の篇、其の眞情流露して一誦三嘆の價値がある、戴は禪宗口調を以て評して見ると所謂水より悟入したる人にして『全唐詩』に收むる二卷の集、水を借て詩に入るもの頗る多し、水字を離れて詩無しと云うて可なり、宋人は許丁卯の詩を評して許渾千首濕と嘲笑せるが、許渾の詩も事實水字が多い、然れども戴の水字多きには到底及ばず、從て其の名篇も少なからず、余は「京口懷古」の詩を愛誦する「大江は萬里に横たはり、古渡千秋渺たり、詰詰波聲險に、蒼蒼天色愁ふ、三方漢鼎に歸し、一水吳州を限る、覇國今何くに在る、清泉長く自から流る、」

送齊山人

韓翃

舊事仙人白兎公　掉頭歸去又乘風
柴門流水依然在　一路寒山萬木中

舊と事ふ仙人白兎公に、頭を掉て歸り去て又風に乘ず、柴門流水依然として在、一路寒山萬木の中、

【略傳】　韓翃字は君平、南陽の人、天寶十三年の進士、幕府從事、駕部郎中知制誥、中書舍人等の官を經て卒す、

【句釋】　送齊山人、山人の山へ歸るを送る、山人は齊に對する稱號、舊事と言へば面前の人の如くであるが、但是れ仙法を學んだと云ふに過ぎず、仙人白兎公は漢代の人、常に白兎に乘て來往したるより此の名あり、其の門人に赤松子があり、其の師に彭祖あり、『抱朴子』掉頭は決意を示す形なり、人間に住まらぬを云ふ、歸去世間と別れて山中に歸る、又乘風其の歸去は得意の歸去にて、失意の歸去にあらず、故に微塵も人間に戀戀せず、迅速に歸り去る、列子に御風とある此の意も半面に含む、柴門流水依然在山中の物物は人間の盛衰とは異なる、柴門も流水も山人が仙法を學んで白兎公に師事したる舊時と同じからん、一路寒山萬木中是れ山人の歸

住する所、寒山萬木の文字は柴門流水を承けて殊に味多し、

【評論】　此の篇、閒淡清淨、一塵氣を住めず、韓翃は大曆十才子の一人、絶句の巧妙李益に次ぐと稱せらる、李將なる人あり其の愛する妓、柳氏を韓に與へ、韓は柳氏の持參金よりして貧人忽ち富者と爲りし歷史を有する人なり、孟啓の『本事詩』に詳悉なり、

送元史君自楚移越　劉商

露冕行春向若耶　野人懷惠欲移家
東風二月淮陰郡　唯見棠梨一樹華

露冕春に行て若耶に向ふ、野人惠を懷うて家を移さんと欲す、東風二月淮陰郡、唯見る棠梨一樹の華、

【略傳】　劉商は彭城の人、檢校禮部郎中、觀察判官、比部郎中の官を經て終る、山水を畫くに工、詩も亦工なり、

【句釋】　元は姓史君は官名、自楚移越楚は郢都今の湖北省荊州府、越は會稽、今の浙江省紹興府、楚の太守たりし元が越の太守と爲り其の行を送る、露冕は冕を露はして行く、冕は冠のこ

と板にて之を作る、天子より以下諸公皆之を用ふ、周冕、又は漢冕、種種形狀が違ふ、後漢の郭賀が荊州の刺史と爲る、百姓歌うて曰く、厥の德仁明郭喬卿と、帝三公の服を賜ふ、且行くと襜を去ぞけ、冕を露はさしむ、今其の故事を用ゐて賢太守を送る、行春卽ち二月、向若耶此の若耶は溪の名、越州に存在する名勝、日本にて禪宗の人が若耶の名を永平寺に用ゐし詩がある、永平寺は越前に在るが故なり、野人は農民の事を云ふ、懷惠今日まで楚を治めし恩惠を懷ふなり、欲移家農民が史君と別るるに忍びず、乃ち共に越へ家を移さんとまで其の德を慕ふなり、東風二月淮陰郡此の淮陰郡は楚地なり、今日まで元が治めし處、唯見棠梨一樹花は『詩經』召公の故事なり、召公が民の訟を棠樹の下に聞く、民其の德を慕ひ、其の棠を伐らず詩を歌うて曰く、蔽芾たる甘棠、剪ること勿れ伐ること勿れ、召伯の茇りし所、蔽芾たる甘棠、剪ること勿れ、召伯の憩し所、蔽芾たる甘棠、剪ること勿れ拜むること勿れ、召伯の說りし所とある是れなり、

【評論】　此の篇、別に奇巧を弄せず、單に其の人を賞するのみにして其の人の面目高風自から現はる、

竹枝詞

李　渉

十二峯頭月欲低　空零灘上子規啼
孤舟一夜東歸客　泣向東風憶建溪

十二峯頭月低んと欲す、空零灘上子規啼、孤舟一夜東歸の客、泣て東風に向て建溪を憶ふ、

【略傳】李渉は洛陽の人、初め弟の李渤と共に廬山に讀書す、憲宗の朝、出て太子通事舍人と爲る、後、峽州司倉參軍に謫せられ、文宗の太和中に大學博士と爲り、復康州に流さる、其の途中、船賊が詩を請ふに依て賦して與へし事『雲溪友議』に出づ、

【句釋】竹枝詞此の題目は李渉より聊か前なる劉禹錫が始めて作りしもの、俗に流行歌と云ふものを美化して出したるもの卽ち竹枝の本領とす、竹節を以て歌ふなり柳枝又は柘枝なぞもある、是れはハヤリ歌にはあらず、李渉が峽州より故郷の洛陽へ歸る時、作りしものとす、十二峯頭は夔州巫山縣に在り、卽ち蜀地に屬す、月欲低曉天に近づきし時を云ふ、空零灘は三峽に在りとすれば十二峯と遠からざるなり、灘は瀨と同じ、山際の河なり、我邦人は洋と同義に見る、漢人に

は通ぜず、子規啼不如歸と啼くが故に此の鳥を出す、孤舟一夜東歸客峽中よりすれば洛陽は東に當る、子規は歸るに如かずと啼くが、而かも我は十年歸り得ず、偶ま今日初めて東歸の客と爲ることを得た、十年も歲月を經たることなれば自分の情は其の土地を離るるに忍びず、泣向春風泣の一字に詩人無量の味が含まる、憶建溪「啼キノ涙デ故郷ヲ出タガ今ヂヤ故郷ノ水モ厭ヤ」歸らんとする路すがら其の謫地を憶ふの情切なり、建溪は武陵の建寧府卽ち蜀地、

【評論】此の篇、賈浪仙の「渡桑乾」と其の情想を同うす、野口寧齋は『三體詩評釋』に於て「渉の詩卓犖不羣長篇事を叙して行雲流水の牽制すべき無きが如しと云ふ」と辨ずるが渉が長篇は本集に十五六篇のみ、特に稱讚する程のものはあらず、其の長所は七絶に在り、清の王漁洋も取る所は七絶に在りと、其の極めて平易なる文字を以て之を出すに警拔なる才力、樂天の凡俗に比すれば遙かに上乘にある、

香山館聽子規

竇　常

楚塞餘春聽漸稀　斷猿今夕讓沾衣
雲埋老樹空山裏　彷彿千聲一度飛

楚塞餘春には聽くこと漸く稀なり、斷猿今夕衣を沾すことを讓る、雲は老樹を埋む空山の裏、千聲に彷彿として一度飛、

【略傳】竇常字は中行、扶風平陵の人、大曆中に進士と爲りしが、柳楊に隱居して著述に從事し、二十年出ず、後、湖南判官、侍御史、水部員外郎、朗州刺史、國子祭酒等の官を經て卒す牟羣庠鞏の四弟皆詩を能す、天下稀なる所とす、

【句釋】香山館は香山の旅館ならん、詩中楚塞の字より推して之を見れば湘中ならん、裴庾の增注は深く信ずるに足らず、何故なれば、『湘中別記』を引て曰く「香山は縣、郭西に在り、其水甚だ香ばし」と、然るに竇常が本集を讀む杏山館とあり。杏山是なりや香山非なるや判然せず、要するに杏山でも香山でも詩に於て害なし、コンナ事を彼此論ずるは村夫子の所爲と知るべし、楚塞は南地の意味で見て可なり、楚國全體全く南方に屬す、南方は北方に比較すれば暖が非常に早し、是の故に十二月頃より子規が啼く、餘春は晩春初夏の候を云ふ、聽漸稀三月より四月に至る間に啼き止むなり、斷猿は斷腸の猿を云ふ、今夕は正しく啼聲を聞く時を云ふ、讓沾衣聽くこと稀なる時に於て之を聽く、詩人の情泣かざるを得んや、實は杏山館では猿を聞て衣を沾すが普通なり、峽中の名物は猿公なり、恆公が斷腸猿を見たのも峽中なり、然るに今夕は

子規の啼聲を聽て以て吾か衣を沾す、卽ち斷猿が子規に其の特權を讓りて人を泣かしめしものと解釋するが、此の句の正解とす、石川鴻齋は斷猿に讓ると見るに依て、「實は作者が子規を聽きしにはあらず、猿聲を聽きしなり、猿聲を鵑聲となして作れる所に味がある」と辨ずるが、是れは作者の意を得ず、題目、明白に「聽子規」とある、子規にあらずして何ぞや、唐人は謎の如き詩は決して作らず、日本の俳人と唐の詩人と混合すべからず、雲埋老樹暗雲が茫茫としたるを云ふ、空山裏人も無き空山の裏、彷彿は髣髴と同義、恰似と同樣に用ひ場處に依て異なる、「サモニタリ」と和讀して差支無し、千聲一度飛其の一聲を聞く時、寂寂たる空山、物の障礙するなければ、一聲の啼も、千聲の響も、少しも異ならずと云ふに在り、

【評論】此の篇、其の思想少しく奇警に涉るを以て種種議論を生ずるが、蓋し想は奇なるも文字恠にあらず、且小細工所謂纖巧を弄せざる所、正しく唐賢の面目を具備して宋人と列を同うせず、宋人をして此の調を學ばしむれば實に讀むに堪へざるなり、

長慶春

山頭水色薄籠煙　遠客新愁長慶年

徐凝

身上五勞仍病酒　天桃窗下背花眠

山頭の水色薄く煙を籠む、遠客新たに愁ふ長慶の年、身上の五勞仍酒を病む、天桃窗下花に背て眠る、

【略傳】　徐凝は睦州の人、詳傳は世に傳はらず、韓退之、白樂天、施肩吾と往來したる事は明白なり、廬山瀑布の詩を作り東坡の爲め罵倒せられて有名になりしことは三尺童も知る所、然れども坡が罵しる如く全集悉く劣なるにはあらざるなり、

【句釋】　長慶春は唐の十二主則天を除く穆宗の年號、年號を以て直ちに題と爲す、類例は少なし、此の詩は徐凝が始めて京師へ來て非常に感じたことありて以て作りしなり、山頭水色薄籠煙薄煙の色、水の如きを謂ふ、「山頭ノ薄煙ハ水色ノ如シ」と見るなり、卽目卽景、然るに山頭水色は山上水有るの象、卽ち周易の蹇の卦を以て取ると曲解する者あり、此の一句のみソンナ理窟を以て作る理由無し、昔時五山の詩僧が誤て此の如く見たるならん、信ずるに足らず、遠客作者自身なり、睦州から京師へ來たるに依て遠客なり、新愁愁は憂と異なりて些細なるウレへを愁と云ふ、今作者が游ばんと思へども意の如くならざれば自分の身上を愁ふるなり、長慶年は憲

宗の元和より穆宗の紀元に移りし時、所謂長慶第一年の新春なり、此の詩は年號を以て題と爲す如き奇詩なるが故に詩も深く國家を憂へて作りしものならんと疑うた注家もある、其の疑の起りし理由は、穆宗と父の憲宗との二天子は非常の迷信家にて、方士卽ち道士の言を聞くを喜び、故に病氣にあらざるに平生、變な藥を服用して居りしなり、處士張皐なる者上疏して之を諫む、其の文中に「藥以て疾を攻む、疾無きに餌すべからず、昔孫思邈言ふあり、藥勢偏助する所あり、人をして臟氣平ならざらしむ、疾あらば藥を用ゐしむ、猶愼重なるべし、況や疾無きか、庶人尙爾り、況や天子をや、先帝方士の妄言を信じ、藥を餌し疾を致す、豈更に其の覆轍に循ふを得ん」と、穆宗は其の言を善とし、而かも其の言を用ひず、疾あらざるに服用して遂に死に至る、此の如き事ありしを以て徐凝も自分の事を咏じたるにはあらず、天子の事を想うて作りしならんと想像が生じたるなり、下句の意も、張皐の上疏文を以て之を解して見れば、上の如くにも見える、然りと雖も、愁の字、酒の字、皆自身に屬して他に屬せず、他の詩は要するに自家の思を叙したるに過ぎず、身上五勞、五勞は卽ち五臟なり、愁を忘れん爲め酒を飲む、酒を飲むに依て、病は一層重くなると見た人ある、余の考は違ふ、病の爲め酒を飲むことを禁ぜられて居ることなり、仍病酒は愁を忘れん爲め飲酒せんと思へども、身上の五勞は仍酒を引き受

る能はず、是に於て酒は飲むを得ず、『史記』信陵君傳の多近二婦女一竟病レ酒卒とは違ふこととす、天桃は少女を譬ふ、窗下背花眠色を禁じて身を慎しみ以て自ら病を養ふ。

【評論】此の篇、率易に自家の身上を叙する所に味を見る、此の人は廬山に登り、「虛空泉を落し千仞直く、雷奔江に入て暫らくも息ず、今古長く白練の飛ぶ如く、一條界破す青山の色、」の詩を作る、宋の東坡詩を作りて曰く「帝は銀河一派を垂れ遣む、古來唯謫仙が詞あり、飛流濺沫知ぬ多少、徐凝が爲めに惡詩を洗はず」と、前に西施あり、後に無鹽を置くべからず、隨園は却て東坡を罵る、隨園の輕薄は論ずるに足らざるなり、

宮詞

金吾除夜進儺名　畫袴朱衣四隊行
院院燒燈如白日　沉香火底坐吹笙

王建

金吾除夜儺名を進むれば、畫袴朱衣四隊行く、院院の燒燈白日の如く、沉香火底に坐して笙を吹く、

【句釋】王建の傳と宮詞の解は前已に辨じ置けり、金吾は此の詩にては官人を言ふなるが、二

說あり、一は金銅を以て爲る物、卽ち金棒、漢の執金吾は是れなりと、一は鳥の名にて不祥を避けるを主とする說、執金吾と稱する官は漢代に置き、所謂金棒を以て禁中の周圍を巡行する者なれば、我邦今日の警視と云ふ官に當る、我邦中古に左衞門とか右衞門とか云ふもの是に當るとの說もあり、除夜は節分の夜を指す、進は奏進、申し述るなり、儺名は鬼掃を行ふ人名簿を天子へ奏進する、隋の煬帝始めて之を行うて唐代に及びしもの、我邦では文武天皇の時、行基菩薩が奏して之を宮中に行ひ、近年に至るまで儀式の一と爲て居りしなり、印度の佛敎で鬼に對する種種の觀念がありしことは經典中非常に多くある、此の思想が移りしものと余は斷定する、畫袴朱衣鬼掃を爲す役人の裝束を示す、奇麗な袴と朱の衣を著用する、四隊行二百四十人の者が鬼に扮して逐はれる者もある、之を逐ふ者もある、東西南北の四門に向ふから四隊と爲る、天子は此の時殿に御して之を見る、院院は禁中內の宮人宮女の居室を云ふ、燒燈如白日此の時代の燈は油燈と蠟燭となり、沈香火沈香を燒く火、底は下と大差無し、坐吹笙吹く者は誰ぞ、是は樂人なり、『續世說』に太宗が除夜に此の狀態を隋の煬帝の后蕭氏に見せしめて問ふ、隋主は何如と、曰く除夜每に殿前に火山數十を設け、一山每に沈香數車を燒き、香は數十里に聞ゆと。太宗曰には其の奢を刺れども心には其の盛んに服すと、圓至の注に載てあり、可否

は信じ難きも、太宗は明天子で蝗を食うて民の苦を救はんと欲した天子なり、然るに前朝の皇后たる蕭氏を宮中に入れて、此の狀態を示したと云ふは、信じ難し、然れども「帝範」の中に女戒を加へないと云うて後世より批難を受る失體あれば婦女に對する道は亦格別なりしならんか、『月令』に方相氏と云ふ者、十二神の名を唱へて以て惡鬼を驅逐し而して吹笙の者、之を扶くとある、此の十二神は、佛敎の十二天か、道敎の十二支の神か分明ならず、

二

銀燭秋光冷畫屏　輕羅小扇撲流螢
玉階夜色涼如水　臥看牽牛織女星

【句釋】銀燭は美麗なるもの、秋光は凄涼なるもの、畫屏も亦美麗なるもの、冷の一字、唯其の秋光の感を深うする、輕羅小扇絹製の團扇、貴家の女の手にする物、宮女の持つ物、貧家の物にあらず、撲流螢宮女が怨意を遣るに所無きを以て、飄然として飛び來りし螢を撲つ、玉階

玉のきざはし、夜色涼如水秋色の凄涼と宮女自身の凄涼とを含んで居る、玉階は起句の銀燭と字を對し、夜色は秋光を承け、涼は冷を承け、如水は畫屏を承けて居る、巧妙の作驚くべし、臥看は仰臥して看る、牽牛は男星、織女は女星、七月七日には此の二星相會すと云ふ、宮女が失寵して後、之を看る、其の怨意の生ずる亦人情の自然ならん、

【評論】前首は王建の作たるに相違なきも、後首は杜牧の作たる疑ふ所無し、『全唐詩』にも『杜樊川集』にも載せあり、周少隱が誤て王建の詩として此の選に入れしなり、前首は盛觀、後首は凄觀、互に情味あり、余は前首を捨て、後首を取る、

城西訪友人別墅　雍陶

灃水橋西小路斜　日高猶未到君家
村園門巷多相似　處處春風枳殼華

【略傳】雍陶字は國鈞、太中八年宣宗年號に國子毛詩博士と爲り、後、簡州の刺史と爲りて卒す、

晩唐の人、

【句釋】 澧水は季昌云ふ澧州澧陽縣の南より出づ、卽ち今日の湖南省岳州府を流るる川なり、雍陶は南方人なること判然たり、橋西小路斜一路と言はずして小路と言ふ、味此に在り、日高日高うして、と讀まずして日高きまで、と讀む、猶未到君家曉天より訪問したとすれば、亭午まで猶到らずと見て、村園門巷多相似始めて訪問するが故に、一度位其の友から路程を敎へられしとて、實際に行て見て、容易に分らず、邨落の狀態、何處も同じ、處處春風枳殼花甲の村、乙の園、丙の門、丁の巷、大底一樣、皆枳殼の垣で恰かも春風、花は開きて居るが一向に其の家は分らない、己の家へ來る時は枳殼を見て尋ねよと言うたが、來て見れば處處カラタチバラの花ばかりなり、

【評論】 此の篇、晩唐の佳絕として、頗る情致に富む、賴山陽が南禪寺に游ぶ詩は此の詩を粉本と爲したるもの、

貴池縣亭子

勢比凌歊宋武臺　分明百里遠帆開

杜牧

蜀江雪浪西江滿　强半春寒去却來

勢は凌歊宋武の臺に比す、分明に百里遠帆開く、蜀江の雪浪西江に滿つ、强半春寒去て却て來る、

【句釋】 貴池縣池州の望江亭は貴池縣の南齊山に在り、一名貴池亭、望江亭は俗呼なり、大江を見、淮南を望み、九華諸峰を見ればなり、梁の昭明太子、其の魚の美なるを以て貴池に封せらる、子の字は助字、勢比凌歊宋武臺『太平寰宇記』に太平州當塗縣黃山は縣の西北五里に在り、上に宋の凌歊臺あり、週廻五里、一百步、高さ四十丈と、『入蜀記』に黃山に游び、凌歊臺に登る、臺は正に鳳凰雨華臺等の如し、特に山顚に因て之に名く、宋の高祖、營む所、面勢虛曠、高く氛埃の表に出づ、南に青龍山九井諸峯を望む、几席に在るが如し、分明百里遠帆開亭子が高處に在ること、此の句にて知るべし、『祖沖之傳』に千里の船を新亭江に造る、之を試みる日行くこと百餘里、蜀江峽州夷陵に蜀江あり、雪浪西江滿『岳陽志』に荆江五六月の間、其の水暴漲、則ち洞庭瀟湘に逆泛す、淸流之が爲め色を改む、南至靑草甸日乃ち復亦之を西水と謂ふ、其の水極冷、皆云ふ岷峨雪消するの致す所と、岳人之を翻流水と謂ふ、雪が融けて

西江も蜀江も水が滿滿と一と爲るを謂ふ、强半算數家は有餘を以て强と言ふ、春中を指す、春寒は一月なり、然るに春中に此の寒を覺ゆるは、水滿滿の景色を見ればなり、去卻來は去て復來ると同意なり、

【評論】此の篇、七絶の粉本として童蒙に示すに極めて善、起承轉合の整正して見易き此の首の如きは希なり、承句の百里、起句の凌歊を承け、而して轉句の蜀江西江の文字、承句の遠帆を承け、而して結句は前三句を結束して高處の意味を十分に出す、句法の分明、且一氣呵成、他人の及ばざる所、思ふに筆を把て直ちに寫狀したるものならん、豪邁の氣象、言外に表はる、

送隱者

無媒逕路艸蕭蕭　自古雲林遠市朝
公道世間唯白髮　貴人頭上不曾饒

無媒の逕路艸蕭蕭、古より雲林市朝に遠ざかる、世間に公道唯白髮、貴人頭上曾て饒さず、

【句釋】送隱者『宋書隱逸傳序』に身隱るる故に隱者と稱す、道隱るる故に賢人と曰ふ、是れ普通の解釋とす、道を修め、俗士と遠ざかる人を總て隱者と稱す、惠遠法師の如き、寒山子の如き、皆隱と稱せらる、無媒は女無媒にして嫁する者、君子行なはず、士は中道に相見ず、卽ち生れて知己に遇はざるの意なり、高人を雲林に埋めて之を要路に登すべき媒介者が無なり、逕路は「小ミチ」なり、『晉書』阮籍傳』に獨駕徑路に由らずとあり、草蕭蕭隱者は人間に意を待ず、其の向ふ所、草蕭蕭の逕路なり、自古古來から、雲林は隱者の棲處、遠市朝俗士の棲處を志朝と言ふ、人と人と對すれば、俗念が起る、人と山水と對すれば道念が生ず、以上の二句は隱者の歸臥する所を云ふ、公道世間世の中に公平なる道はなり、雲林の隱者も、市朝の俗人も其の住處は異にするも、獨異ならざる物がある、それは唯白髮隱者の白髮は恠しむに足らず、俗人が如何に白髮を嫌へばとて到底免る能はざるもの、公道なる所以、貴人の名は『史記秦始皇紀』に先帝の大臣皆天下累世の名貴人なり、とあるが根本なり、頭上不曾饒人生れて隱者と爲る莫れなどと悲しむ莫れ、亦貴人と爲るも樂しむに足らず、歲月匆匆、電光石火、彼も此も同一に白髮と爲る、饒は「アマサ」と訓むも、「ユルサ」と訓むも自由なり、

【評論】此の篇、許渾の名を書する本あり、大に誤る、杜牧の作を以て正とす、趣旨は隱者に

同情して、貴人を冷罵したるもの、杜牧が一種奇警な想を持し尋常詩人の及ばざること、此等の詩にて明白なり、葉茵が此の詩を翻案して、「半世竿を持す笠澤の濱、鬢邊留め得たり幾莖の春、近來白髮公道無く、暗に黑頭を把て貴人を饒す、」意は到るも杜詩には及ばざるなり、余は「世間に公道唯一死貴人身上も曾て饒さず」理路に渉りて興趣無し、到底杜詩には敵せず、

送宋處士歸山

許渾

賣藥修琴歸去遲　山風吹盡桂華枝
世間甲子須臾事　逢著仙人莫看碁

藥を賣り琴を修め歸り去ること遲し、山風吹き盡す桂華の枝、世間の甲子須臾の事、仙人に逢著して碁を看ること莫れ、

【略傳】許渾字は用晦、園師の後裔、潤州京口に居、太中三年、監察御史に在り、疾を以て乞て歸る、陸郢二州の刺史に終る、

【句釋】送宋處士歸山宋は姓、處士は前に辨せり、賣藥普通の賣藥にはあらず、人間の精を增す藥なり、修琴は卽ち彈琴、處士の活計とする職業は此の藥と琴とにある、歸去遲城中へ行て賣

藥修琴して山へ歸ること遂に遲れたるなり、山風吹盡桂華枝早早に山中へ歸去せねば、秋も盡き桂花も散ずることならん、世間甲子須臾事光陰は甚だ迅速、歲月は人を待ず、處士は「歸去遲」で悠悠として甲子を過す樣子であるが、甲子の須臾なるを知らば、早く歸去するが可、逢者は「ブヂャク」と訓む、仙人莫看碁『述異記』に晉の王質木を伐て信安郡の石室に至る、數童子の碁を圍むを見る、質に一物を與ふ、棗核の如し、之を含んで飢ず、局未だ終らざるに斧柯爛れ盡く、既に歸りて復時の人無し、

【評論】此の篇、歸去遲が一篇の主意にして他は其の注脚なり、

秋思

琪樹西風枕簟秋　楚雲湘水憶同游
高歌一曲掩明鏡　昨日少年今白頭

琪樹西風枕簟の秋、楚雲湘水同游を憶ふ、高歌一曲明鏡を掩ふ、昨日は少年今は白頭、

【句釋】此の詩一本杜牧に作る、杜集を檢するに此の詩無し、許渾の詩たる疑ひ無し、秋思秋

に逢うて思を叙す、琪樹は卽ち玉樹、人間の物にあらず、美麗なるを言はんが爲めに云ふ、西風枕簟秋琪樹も西風に晒されて色衰へ、枕簟も夏を過ぎ秋に逢うては用を爲さず、楚雲湘水憶同游少年の時神女楚雲や湘妃（湘水の女神）の如き美人と豪游を爲したることを憶起する、高歌一曲胸中の感慨は訴ふるに所無く、高歌一曲せざるを得ず、掩明鏡秋風に扇を捨て、白頭に鏡を掩ふ、千古萬古同一なり、昨日少年今白頭何十年の歳月も過ぎ去れば昨日なり、豈前日のみの謂ならん、

【評釋】此の篇、白頭の二字を一篇の骨子と爲す、宋の陳后山、明の楊升庵は、共に許渾を重んぜず、后山云ふ「近世高學無く、舉俗許渾を愛す」と、升庵云ふ「唐詩中最も淺陋なる者」と、共に酷に過ぎる感はあるが、大體に於て當る、此の詩の如きも、太白の「秋浦歌」と張九齡の「照鏡見白髮」の二絕を粉本として成りしもの、特に清新を見ず、要するに渾は晚唐に於る小家數にして大家にはあらず、

黃陵廟　李遠

黃陵廟前莎艸春　黃陵女兒茜裙新

輕舟短棹唱歌去　水遠山長愁殺人

黃陵廟前莎艸の春、黃陵の女兒茜裙新たなり、輕舟短棹唱歌し去、水遠く山長うして人を愁殺す、

【略傳】李遠字は求古、蜀の人、太中年に建州の刺史と爲る、『唐語林』に丞相、令狐綯が李遠を杭州の刺史と爲さんとして上書したり、宣宗曰く遠が詩「青山厭はず三杯の酒、長日唯消す一局の碁」安んぞ人を理めんや、『御史中丞集』一卷あり、

【句釋】黃陵廟は舜の妃、卽ち娥皇と女英を祀る、漢人の理想に適合したる女神なり、湘南の岳州府に其の廟あり、韓愈の碑文を樹つ、莎草春二妃が死んだ處へ生じたる草を莎と言ふ、春風に此の草が生長する、女兒は娥皇と女英との二神の塑像なりと解する說（一）李が今現在此の廟前にて游戲する女兒を指す說（二）の二說あるが、余は後說を取りて游戲する女兒と見る、茜は「アカネ」あかねの裙を著けて游戲する女兒、女兒なるが故に女神に適す、輕舟短棹唱歌去、是も李が唱歌すると解する說、女兒が唱歌すと解する說との二ある、輕の字、短の字女兒に屬することを知るべし、女兒にあらざれば詩想無し、水遠山長は輕舟短棹の四字を承ける、愁殺人

女兒の唱歌を聞き、且二妃を思ふ、詩人たる者、豈愁殺せられざるあらんや、

【評論】　此の篇、拗體を以て成り、絶句として神品に入る、王漁洋が稱して神韻宗と唱ふる所此等の詩に本原する、後世の竹枝は亦此等の詩が粉本なり、情景を高尚に出したるか、情景を俗に出したるかの相違を見れば、愈よ此の詩の名篇たるを知る、白樂天は俗なりと東坡の罵るは情景を流俗に適合せしめたるに由る、近時太宰春臺が白樂天の詩は唐詩の極惡道なりと、白氏文集が我國に行はれて菅丞相甚これを好み玉ひけるとかや、夫より公家の人人皆樂天が詩を面白きことと思ひて其の風調を和歌に移す」と『獨語』にあるは樂天の爲めには寃ならんが、學詩者の爲めには金針なり、

贈彈箏人

天寶年中事玉皇　　曾將新曲教寧王
鈿蟬金雁皆零落　　一曲伊州淚萬行

温庭筠

天寶年中玉皇に事へ、曾て新曲を將て寧王に教ふ、鈿蟬金雁皆零落す、一曲の伊州淚萬行、

【略傳】　温庭筠字は飛卿、晩唐に於る一名家とす、李商隱と並稱して温李と呼ばる、詩才超脱八叉手して八韻の詩成るが故に、時に温八叉と稱す、詩多く温柔鄉の事を言ふ、道學先生より輕薄詩人と見らるるが、淫艶猥褻のものは無い、香奩に比較すれば上品なること論勿し、但柔詞曼調の多きことは事實、從て俗人に好まるることとなる、

【句釋】　贈彈箏人箏は瑟の一種、五絃築身なり、此の箏を彈ずる人は婦人なり、天寶年中玄宗の年號、十四年間繼續せしなり、此の婦人が宮中に入り、彈箏を以て事玉皇玄宗に事へて居りしなり、曾將新曲自家の發明せる新曲なり、敎寧王寧王は玄宗の兄なり、音律を好む所より、此の人を宮に入れ學びし者、鈿蟬は箏の飾具、金雁は箏の柱、皆零落玄宗は天寶十四年に蜀に出奔し、安祿山は城下を荒し廻る、此の宮人も亦宮を出、箏と共に零落したるものならん、一曲伊州「伊州曲」と云ふ曲名なり、伊州は隴西の地名、北地の哀音を傳ふる曲なり、今零落したるに依て、自家の境遇上、此の哀音を唱ふ、淚萬行自ら彈じ自ら泣く、伊州は燉煌郡大磧の外に在り、漢の明帝の時、始めて伊吾盧の地を取て未だ郡縣と爲さず、貞觀の初、内附して乃ち州を置く、『開元傳信記』に西涼州の俗、音樂を好む、新曲を製して涼州と曰ふ、開元中、列士獻す、玄宗諸王を召して便殿に同じく觀せしむ、曲終て諸王賀す、舞蹈善と稱す、獨寧王拜せ

ず、玄宗之を問ふ、曰く此の曲嘉と雖も臣聞くことあり、夫音は宮に始まり商に散じ角徵羽に成る、宮商に根柢せざること無し、斯曲や、宮離れ微を少く、商亂れて暴を加ふ、臣聞く宮は君なり、商は臣なり、宮勝ざるときは君勢卑し、商餘りありときは臣僭を事とす、卑きときは下に逼り、僭するときは上を犯す、忽微に發して、音聲に形る、臣恐く播遷の禍、悖逼の患斯の曲に兆ん、玄宗默然たり、祿山が亂に及んで、乃ち寧王、音を審にするの妙を見る、

【評論】　此の篇、溫一代を通じて七絕の代表作と見て可なり、新曲と一曲と同字聊か病を爲すも此の如き作法は妨げざるものの如し、

韋曲　唐彥謙

欲寫愁腸愧不才　多情練漉已低摧
窮郊二月初離別　獨倚寒村鷗野梅

愁腸を寫さんと欲して不才を愧づ、多情練漉已に低摧、窮郊二月初めて離別、獨寒村に倚て野梅を鷗ぐ、

【略傳】　唐彥謙字は茂業、懿宗の咸通年中より僖宗の中和年中に涉りて種種の官を歷て卒す、

自ら鹿門先生と稱す、所謂晚唐に屬する人、

【句釋】　韋曲は杜曲と同じく長安に在る、韋姓の人が自分の游地と爲したるもの、唐時の人に此の題目頗る多し、作者も此に游び己が懷抱を叙す、欲寫愁腸乾符の末年僖宗の暗愚に乘じて、盜賊四方に起る、黃巢なる者、衝天大將軍と稱し頻りに戰亂を釀す、是の時、漢南に王重榮あり彥謙が其の國に來ると聞て之を己が參佐、所謂參謀として用ふ、後王重榮は賊徒の爲に殺さる、自分の恩人が死して、己も亦亂世に徬徨ふ、愁腸を寫さんと欲する意の起るは是が爲めなり、愧不才巧妙の詩、成らざるは不才の致す所、多情は自分を思ふのみならず、死せし王を思ふ情も切なり、練漉は竭くすの意味、練は「ネル」漉は「コス」情を十分に竭くしたと云ふ意味、張環が「秋河賦」の映二東吳一而寫練より著想し來るなり、已低摧は俗語で言へば近來腦が馬鹿に成て居ると云ふ意味、一字一字に泥んでは解し得ず、十分に情を言はんと欲するも、腦が馬鹿に成て居るが故に巧妙の詩は出來ぬと云ふなり、窮郊は荒涼たる野外と云ふ意、窮の一字、國に對する窮と、身に對する窮と二意を含む、韋曲卽ち窮郊なり、二月作者が韋曲へ游びし時初離別王重榮が事を思ひ出せば殆んど今日離別したかの感があり、獨倚寒村鷗野梅獨の字王重榮が今亡きを言ふ、且王重榮と晉の王羲之とは同姓なるが故に羲之の故事を用ひしもの、羲之

が晉世亂るるに當り、終日華を撚て香を齎ぎ人と語らず、羲之も愁腸を花に依て慰めて居りしものなり、

【評論】此の篇、王重榮を以て王羲之に譬し所、頗る才力を發揮す、此の詩は愁人と共に讀むべし、金殿玉樓に住する人と讀むべからず、

曲江春望

杏艶桃嬌奪晩霞　樂游無廟有年華
漢朝冠蓋皆陵墓　十里宜春下苑花

杏艶桃嬌晩霞を奪ふ、樂游廟無うして年華あり、漢朝の冠蓋皆陵墓、十里の宜春下苑の花、

【句釋】曲江春望『西京雜記』に京城の龍華寺の南、流水屈曲せるあり之を曲江と謂ふ、秦の時、宜春苑と爲し、漢に樂游苑と爲す、唐の開元中、玄宗池を鑿り水を引て華木を植ゑ、勝賞の地と爲す、『長安志』に城の東南昇道坊に在り、『三輔黄圖』に宜春下苑と名くと、杏艶桃嬌杏の艶色、桃の嬌態、奪晩霞杏も桃も霞より美麗であると云ふ意味で奪ふの一字に於て工夫を凝し、凡調を去て警調と爲す、樂游無廟漢代の樂游廟卽ち宣帝を祀りし廟は已に亡びて今や亡し、有年華人間界の事は變じ易く、自然界の事は變せず、漢朝冠蓋此の冠蓋は獨天子のみならず、大臣宰相皆此の中に在る、皆陵墓曲江に陵墓が多しと云ふ意味か、通漫に漢代の人間は皆死して墓と化してあると云ふ意味か分明ならざるが、皆死して無きものと見れば可、十里宜春下苑花春色は古往今來變せず年年二月は宜春下苑十里悉く花なり、

【評論】此の篇、漢代の事に托して、其の當時を諷するなり、古人唐彥謙の詩を評して、絶句用事隱僻、諷諭悠遠、李義山に似たりと、李も亦一歩を讓る所あり、此の篇の如きは初學宜しく精讀すべし、

鄴宮　陸龜蒙

華飛蝶駭不愁人　水殿雲廊別置春
曉日靚粧千騎女　白櫻桃下紫綸巾

華飛び蝶駭て人を愁しめず、水殿雲廊別に春を置く、曉日靚粧す千騎の女、白櫻桃下の紫綸巾、

【略傳】　陸龜蒙字は魯望、又字は鴻漸、江湖散人、又天隨子と號す、松江甫里に居して、藏書萬卷、出ては釣魚、入ては煎茶、世推して高潔の人と爲す、盧同と併稱して茶神に祀らる、又皮日休と友とし善、費袞の『梁谿漫志』に「陸鴻漸茶の爲めに累せらる」と題して人は偏に好む所あるべからずと論す、鴻漸茶の爲めに累せられ人其の文人達士たるを知らず、著書『君臣契』三卷『源解』三十卷『江表四姓譜』十卷『南北人物志』十卷『吳興歷官記』三卷『潮州刺史記』一卷『占夢』三卷『茶經』三卷、今傳ふる所茶經のみ、他は皆傳はらず、嗜好の弊此に至る惜むべしと、

【句釋】　鄴宮鄴都に建てたるが故に宮名とす、魏武の創設にて後趙の石勒や燕王や北齊の高羊など皆此に居りしなり、今の直隸省順德府邢臺縣に當る、此の詩は石勒の從弟季龍の事を詠じたるもの、石氏は羯族卽ち蒙古人種、王としての存續年間僅かに三十三年なり華飛蝶駭不愁人世の濁慾に沈沒せる季龍などの輩は自然界の變化なぞ微塵も感愁せず、駭の字特に妙、水殿雲廊水と雲とは殿廊を飾る彩色の畫を云ふ、別置春前の華飛蝶駭は無語の春、此の水殿雲廊には解語の春を置く、無語の春過ぐるも、解語の春猶ほ在り、愁へざる所以なり、曉日靚粧靚は「アキラカ」粉白黛黑を謂ふ、美人の盛裝を云ふ、千騎女『鄴中記』に石季龍常に女騎千人を

以て鹵簿と爲すと、白櫻桃下紫綸巾季龍の嬖人を鄭櫻桃と云ふ、鄭の字は味無きを以て白の字を下したるなり、櫻桃は「ユスラ」白色にして肥たるものを上とす、紫綸巾紫色の手巾にて頭を裹み、女騎千人が游ぶ狀態を言ふ、

【評論】　此の篇、石季龍の驕奢を叙して諷諭したるもの、從兄石勒は磊磊落落の語を發して快男兒と稱せらるるが從弟季龍は漢人一流の華奢を極めて其の劣想を遂げしもの、本集に二題あり、一は曹操を咏じたるもの、此の詩に比すれば遜色あり、

閿鄉卜居

吳融

六載抽毫侍禁闈　可堪衰病決然歸
五陵年少如相問　阿對泉頭一布衣

六載毫を抽で禁闈に侍す、衰病に堪ふ可んや決然として歸る、五陵の年少如し相問はば、阿對泉頭の一布衣、

【略傳】　吳融字は子華、越州山陰の人、昭宗龍紀の年に進士と爲り、侍御史、左輔闕、禮部郎中、翰林學士、中書舍人、翰林承旨等の官を歷て卒す、方外に禪月大師、廣利大師、晉光上

人、知方上人等の友を得て來往す、其の人亦俗塵に染著せざる人、其の詩は晩唐の衰弱を免れざるも、佳麗と稱する事は公論なり、

【句釋】　閿鄉卜居本集に此の題十首あり此の詩は「阿對泉」と題して其の一首なり、閿音「ブン」或は閾に作る作者が極めて晩年挂冠後寓居せし地、吳は本傳に越州山陰の人、今日の浙江省紹興府山陰縣に當る、而して閿鄉縣は古鼎湖の地にて周に至り閾と稱す、明末淸初まで河南省に屬したるも雍正二年直隸省に屬したり、然らば吳の故鄉にあらざること明白なり、野口寧齋は閿鄉に歸隱すと、歸隱にはあらず、卜居なり、六載抽毫侍禁闈吳が翰林承旨と爲て宮裏に出入すると六載間も無く哀帝の世と爲り、天祐の年號も、天祐を得ずして竟に亡ぶに至る、可堪の可を一本不に作る、不を以て可とす、衰病決然歸官吏が官を辭す病と稱するは古往今來定まり文句、歸は罷る退くの意味に見よ、必ずしも故鄉へ歸ると云ふにあらざるなり、五陵は圓至和尙の如く漢の五陵と見るは愚も亦極まる、長安の意味に見なくてはならぬ、年少如相問年少と云うても普通の年少にはあらず、少壯の官吏を云ふ、少年の官吏共が余が退官後の事を問ふ者あらば、阿對泉は吳が自注にて能く知れる、阿對泉は晉の楊伯起の童子が蔬菜に水を灌ぎ入れる爲に作りし泉なり、彼の盜泉と異なり、高潔なる泉なるを以て之を出す、一布衣一平

民と爲て阿對泉頭に靜養すると答へるなり、

【評論】　此の篇、齋藤拙堂の評に「氣格渾厚晩唐詩所希」と良とに確當の評言とす、序でに詩法を辨じて置かん、不堪衰病仄平平仄の法を用ふ、若し不堪老病仄平仄仄と作らば法にあらず、我邦の先輩は多く此の法を知らす、古人を學んで正法を守るべきなり、

尤溪道中　韓偓

水自潺湲日自斜　盡無雞犬有鳴鴉
千村萬落如寒食　不見人煙空見華

水自から潺湲日自から斜なり、盡く雞犬無く鳴鴉あり、千村萬落寒食の如く、人煙を見ず空しく華を見る、

【略傳】　韓偓字は致光、一字は致堯、京兆の人、進士なり、河中幕府、左拾遺、左諫議大夫、翰林學士、中書舍人、濮州司馬、鄧州司馬の諸官を經て後、王審知なる者の家に卒す、詩集を『香奩集』と名く、後人艶詩を作る者の祖と爲す、

【句釋】　尤溪は南劍州と圓至の注に在り、今日の地理を詳しくせず、水自潺湲日自斜自然の景

色は如何に戰亂を經るも其の狀態は變化せず、水聲も日影も荒涼寂寞たり、盡無雞犬雞犬の無きは卽ち人家の無きことなり、有鳴鴉日斜に及んで鴉が冬の樹林に歸宿する、千村萬落は甲地も乙地もと云ふ意味、人の住する千村萬落には、如寒食火を斷ち冷食するを寒食と云ふ、介子推が仕を欲せず逃げ去る、晉文公山を焚き之を求む、子推焚死す、文公之が爲め寒食すと云ふ傳說の外に、冬至後一百五日疾風あり故に火を焚ずとの二說あり、共に明白ならず、唯火を禁ずるのみは事實なり、不見人煙空見華見の字二字重用して起句の自の二字に對す、是亦詩の一格とす、雞犬無ければ人煙も亦無き所以、

【評論】　此の篇、韓致堯の作として淸調に近きものなり、世に韓を『香奩集』の祖として傳ふるものなるが、香奩は讀で字の如く、重きを兒女の嬌態に置き、柔艶の詞を爲る、然れども仔細に其の集を檢するに決して柔艶の詩のみ作りし人にあらざるを知る、晩唐亂離の時に生れたるを以て頗る悲哀凄調のものもある、世の韓を云云するもの大底目論耳食の徒のみ、論ずるに足らず、余韓の爲め之を惜む、

已上二十四首共に第三句を以て主とし四句を喚び出すと爲すもの蓋し伯弓は何の說をも立てず單に第三句主意なりと云ふ、圓至は云ふ觀者を自得せしめんと欲すと、眞に然り天下功の多き

もの自得に過ぎたるは無きなり、

丹陽送韋參軍　　嚴維

丹陽郭裏送行舟　一別心知兩地秋
日晩江南望江北　寒鴉飛盡水悠悠

丹陽郭裏行舟を送る、一別心知兩地の秋、日晩て江南より江北を望めば、寒鴉飛盡て水悠悠、

【略傳】　嚴維字は正文、越州山陰の人、至德二年の進士、河南尉、校書郎の官を經て卒す、詩家の所謂中唐の人、韓致堯などよりは餘程以前の人に屬す、

【句釋】　丹陽は西漢の初めに置く、今の江蘇省鎭江府丹陽縣是れなり、韋は姓參軍は所謂參謀官のことなり、丹陽郭裏送行舟丹陽は楊子江に沿うてある地なるが故に此處より直ちに乘舟して長沙でも、零陵でも、武陵でも、廣陵でも自由に行ける、極めて便宜の地とす、一別心知兩地秋此の兩地は一方の丹陽は言はずとも判然たるが、嚴の行地は判然せず、兎に角南方に向て九江へ發するならん、心知は「心デ知ル」にはあらず、隔心の無き知友を指すなり、交情密な

る知友が南北、地を異にして居らなければならぬ意味なり、日晩江南望江北江の南北、何處を見ても、唯是れ夕陽の影寒鴉飛盡は日晩なるが故なり、水悠悠は送二行舟一なるが故なり、

【評論】　此の篇、神味悠然、言盡きて意盡きざる概あり、余特に此種の詩を喜ぶ、

寒食

韓翃

春城無二處不一飛花一　寒食東風御柳斜

日暮漢宮傳二蠟燭一　青煙散入二五侯家一

春城處として飛花ならざるは無し、寒食東風御柳斜なり、日暮漢宮蠟燭を傳へ、青煙は散じて五侯の家に入る、

【句釋】　韓翃の傳は已に出せり、寒食も已に辨せり、春城無處不飛花長安城中清明の時節、即ち今西暦の三月末に當る、梅櫻桃李皆飛散する期、寒食東風御柳斜此の句中へ東風の文字を挾入して以て前句の飛花と此の句の御柳斜の雙方を活動する、頗る巧妙の手段を弄す、御柳は御溝の柳、日暮漢宮傳蠟燭漢宮は宮廷の事を云ふ通例語と爲てあるなり、唐宮も宋宮も字に響きが無い、且漢の世に永續して種種の故事がある、種種の歷史がある、城中に火種が盡ると宮廷

より賜はる、青煙蠟燭の青煙は先づ近臣の所よりする、散入五侯家五侯は後漢桓帝の代新豐侯(單超)と武原侯(徐璜)と東武陽侯(貝瑗)と上蔡侯(左悺)と汝陽侯(唐衡)との五人を同日に封じて侯と爲す、世に五侯と云ふもの是れなり、悉く同日に封じたるもの、

【評論】　此の篇、五侯の徒が君寵に狎て、萬事自由にすることを刺りしものなり、德宗が嘗て詩人韓翃を召致す、有司奏して二人の韓翃ありと言ふ、德宗曰く青煙散入五侯家の韓翃なりと、作者は遂に知制誥の官を得、寒食の絶句此の篇の如きは古今見ること罕なる作とす、諷刺して作りしこと明白なるも、語露骨ならざる所、天下一品の觀あり、近時石川鴻齋は曰く「季昌の注に德宗の時となし、德宗を譏る詩となせども、翃は玄宗の天寶十三載の進士にして德宗とは少しく時代異なり、」是れは孟啓の『本事詩』を讀まざる說なり、孟啓は翃より、少しく後の人にて翃が此の詩を評して『本事詩』に辨じたる所、信を置くべし、況んや天寶十三載より德宗の代に至る二十六年間、翃が二十歲で進士及第とすれば、德宗の世に四十六歲の人なり、時代異なると辨ずるは非常な誤謬とす、

上陽宮

太掖勾陳處處疑　　寶庠

愁雲漠漠草離離

薄暮毀垣春雨裏　殘華猶發萬年枝

愁雲漠漠草離離たり、太掖勾陳處處疑ふ、薄暮毀垣春雨の裏、殘華猶發す萬年の枝、

【略傳】　竇庠　字は胄卿、婺州刺史と爲り、竇常、竇牟、竇羣の三兄、竇鞏の一弟と共に詞章を工にす、五兄弟の合集を『聯珠集』と名け時に行はれしと云ふ、

【句釋】　上陽宮は季昌の説に東都禁苑の東に在り、上元中に置く、高宗の末に常に居て以て政を聽く、高宗調露元年に東都に幸す、司農卿、韋弘機、上陽宮を作る、洛水に臨み、長廊を爲る、一里に亙る、宮成て上移りて之に御す、御史狄仁傑劾奏して弘機、上を導き奢泰を爲すと、官を免ず、神龍の初、武后位を失し、亦徙て焉に居る、則天が唐の宗室を殺し盡くして自から天冊金輪皇帝と稱し住居したるも此の宮なり、詩人好題目の一とす、愁雲の愁は、闇又は黑を意味する、氣が陰なるを以て愁の字を以てする、漠漠は雲の散せずして四邊の黑きを云ふ、草離離は艸が得意に發生する、上陽の宮址、此の七字にて先づ道破する、太掖は池の名、上の草離離と線を通ず、勾陳は星の名、上の愁雲漠漠と線を通ず、太掖池の清潔も勾陳閣の高層も處

處疑で一目瞭然、此の處でありしと言ふこと出來ず、探索せなければ判然せず、血を見ることを畏れざる漢人種の性質として、直ぐ鬪爭、昨日は帝政、今は民政、命を奉せぬ徒は斬られて、家は燒かれる、弱肉强食　彼の理想なり、漢土で一番貴き者は學者と詩人のみ、其の他は獸類と異ならず、薄暮は陽と陰と交代する時、凄愴の氣を增す、毀垣春雨裏春雨は前の雲と草とに線を通じ、以て下の殘華を引き出す、殘華は古へ殘華と云ふにあらず、暮春なれば殘華なり、猶發萬年枝此の萬年枝は一名冬青樹、和名「ヒメツバキ」「イヌツバメ」「マサキ」と云ふ、晩春初夏に花發く、野口寧齋曰く「花卉に萬年の名ありて滄桑已に幾變す嗟すべきの至りなり」と頗る當る、五山の僧や石川鴻齋は「唐代の血脈連續して萬年に至らんと云ふを祝して初は上陽宮の衰態を云ひ後には唐の萬世に傳はらんことを以て結べるなり」とは滑稽の極とす、

【評論】　此の篇、盛唐の面目存し、雄渾の體を備ふ、一誦三嘆の妙あり、

贈楊錬師

紫煙衣上繡春雲　　清隱山書小篆文
明月在天將鳳管　　夜深吹向玉晨君

鮑溶

紫煙衣上春雲を繡ふ、　清隱山書小篆の文、明月天に在り鳳管を將て、夜深て吹て向ふ玉晨君、

【略傳】　鮑溶字は德源、元和四年の進士、韓退之、孟郊の友人なり、

【句釋】　楊は姓、鍊師は道士に對する尊稱語なり、佛敎にて禪師又は律師と稱するが如し、紫煙衣上繡春雲道士が服する衣を形容する語、唐の代宗の時、李泌が官を罷め道士と爲る、代宗之に紫衣を賜ふ、僧の紫衣は是より先き則天武后が法朗が『大雲經』を譯した功を勤し紫衣を賜ひしなり、煙や雲は繡うてある模樣を云ふ、清隱は道家、山書は道書、小篆文は字體を云ふ、佛敎にて梵文を貴ぶが如し、道士と云ふ人間は俗人と僧の混合兒にて、漢土の特有、其の經文など多くは佛敎を拔き取り以て製したるものなり、小篆は秦の李斯が造作せしもの、老子は李姓なるが故に之を用ふ、明月在天は明月が天に在るの夜、將は持なり、鳳管律曆志に黃帝卽ち道敎の開祖、竹を解谷に取て吹て以て鳳鳴を聞く、雄鳴が六、雌鳴が亦六なり、夜深吹向玉晨君此の句意は佛敎に供養如來と云ふことあり、一華も一香も、一鼓を叩つも、一笛を吹くも、悉く如來に供養せんが爲めなり、自身の耳目を娛しむ爲にはあらず、今鍊師が鳳管を吹くも、是れ自身の慰みにあらず、是を以て太上大道玉晨君、卽ち天の神に之を捧ぐる爲めなり、『黃庭

經』と云ふ道士の經典に玉晨君の事出づ、

【評論】　此の篇、紫煙、春雲、清隱、明月、鳳管、玉晨君、壯麗の文字を以て全篇を構成す、唐人にあらざるより、斷じて此の詩あるべからず、

和孫明府懷舊山　雍陶

五柳先生本在山　偶然爲客落人間
秋來見月多歸思　自起開籠放白鵰

五柳先生本山に在り、偶然客と爲て人間に落つ、秋來月を見て歸思多し、自から起て籠を開て白鵰を放つ、

【句釋】　雍陶の傳は前に出せり、孫は姓、明府は縣令、又は知事を尊稱して云ふ、舊山は必ずしも山と見るにはあらず、故園又は故鄕の類、五柳先生は晉の陶淵明が自稱せし號、借て以て孫に譬ふ、淵明も彭澤の令尹、孫と同等の官、而して人物も甚だ高き所、相似たるを以て之に譬ふ、本在山此の山も深山や高山にはあらず、唯故園の塵なき事を云ふ、偶然爲客此の四字頗る味多し、客なればこそ歸る、主なれば歸らず、縣令と爲るに意なくして、偶然縣令と爲りしなり、

獵官などとは大に異なる、落人間普通人間、凡俗等と相手になつて居りし事を云ふ、本在山と一線を通ずること詩法として見るべし、在山は清淨、人間は汚濁を意味する、秋來見月元來は塵中の物にあらざれば、清澄なる月を見るに當りては、何ぞ勝ふる所ならん、多歸思濁界にて月を見る、猶清涼、況んや山中に於て之を見る益す清涼ならんと思へば、官を罷め歸思を催す所以、五柳先生に「歸去來賦」あり、自起開籠放白鵰此の事は唯文字の上で言うたるのみか、又事實を叙べたるのか、分明ならざるが、詩の本義たる溫柔淳厚の旨は露れて居る、詩人の眞情も亦此に在る、白鵰も亦縱横飛翔するもの、然るに籠と云ふ小さき物の中へ入れられて禁獄せらるるは、憫むべきなり、放たざるべからず、と自ら起て籠を開く、人情の美、比するに物無し、白鵰は和名「シラサギ」衆禽に交るを嫌ふ性を有すと云ふ、

【評論】　此の篇、唐の蕭穎士が「白鵰賦」に依て作りしもの、「白鵰は羽族の奇、雕籠に處して、致に馹騎を以てす、將に長楊に集まり、太掖に游ばんとす、予東陽に旅として、適偖に傳舍に至る、感じて之を賦す、其の畧に曰く越水清うして鏡色あり、吳山遠くして天碧なり、心賞と暎き違く、歸飛を念ふ、其れ何の極まらん、圓至和尚云ふ、穎士は物に因て己れを感ず、此の詩己を推して以て物に及ぶ異にして同じ、

贈日東鑒禪師

故國無心渡海潮　老禪方丈倚中條

夜深雨絶松堂靜　一點山螢照寂寥

鄭谷

故國無心にして海潮を渡る、老禪の方丈中條に倚る、夜深け雨絶て松堂靜なり、一點の山螢寂寥を照す、

【略傳】　鄭谷字は守愚、袁州の人、官、左拾遺と爲り、後、都官郎中と爲り以て卒す、後世、尊稱して鄭都官と云ふ、宋の歐陽修云ふ鄭谷の詩は小兒に讀しむるに適すとて、一時の教科書に爲せしものなりと、鄭谷の名が高くなりしは、是れが原因なりと、

【句釋】　日東は日本、鑒禪師は未詳、『元亨釋書』にも其人の傳を缺く、兎に角、入唐せし人たるは疑ひ無し、故國は日本、無心は何の求むるもの無うして漢土へ渡る、渡海潮浙江の寧波に著せしものならん、老禪は猶ほ老僧と言ふが如し、方丈は僧房を云ふ、唐の顯慶中、王玄策、西域印度を指すに使し毘耶城維摩の室に至る、手板を以て縱横量りて十笏を得、故に方丈と名く、倚中條山を中條と云ふ、禪師が寓院を指す、夜深雨絶雨が深夜に至りて歇む、松堂靜方丈中の別

堂ならん、一點山螢照寂寥雨が歇んだ後へ、山螢飛來僅かに一點なるが是れが堂の寂寥を照して姿致限り無し、

【評論】此の篇、山房の夜趣を寫して、清絶幽絶窮まり無し、谷が方外の友人に白蓮大師齊己あり、九華上人に贈る詩、一法傳聞す老能に繼ぐと、九華に閒臥す最高峯、秋鐘盡る後殘陽暗し、門は掩ふ松邊雨夜の燈、此の詩と幷稱すべきものなり、

旅懷　杜荀鶴

月華星彩坐來收　嶽色江聲暗結愁
半夜燈前十年事　一時和雨到心頭

【略傳】杜荀鶴字は彥之、杜牧之が妾の生む所のもの、翰林學士、主容員外郎と爲り知制誥と爲り、天祐の初、卒す、州に九華山あり、故に自から九華山人と稱す、

【句釋】旅懷は旅中に懷を叙るなり、月華は雲色より形容したる月を稱す、星彩は羣列する星を形容して稱す、坐來收動作を用ひずして致すを坐來の義とす、卽ち自然に收まる、收は收藏、見えなくなるを云ふ、嶽色江聲暗結愁嶽色は蒼茫と爲り、江聲は喧豗す、暗然と客愁を結ぶ所以半夜燈前十年事愁を結ぶが故に眠る能はず、眠る能はざるが故に種種の感想が浮んで來る、十年は一昔、此の一昔の事が湧き出る、一時和雨到心頭雨と云ふ外物が霏霏として降り來り、以て我が十年來の感想を敲き出す、雨の一字、一篇の骨子とす、

【評論】此の篇、杜集に在て、佳絶の中に收むべきものなり、明の楊升菴は杜荀鶴の詩を評して晚唐の最下と云ふ、學力無く、唯詩才のみあればなり、我邦文化年間新潟の館柳灣は『晚唐十二家絶句』を選して杜を一家に入る、徂徠派の僞唐に反對せんが爲めなり、杜が「夏日悟空上人の院に題す」の詩「三伏門を閉て一衲を披す、兼て松竹の房廊を蔭する無し、安禪必ずしも山水を須ゐず。心中を滅し得ば火も自から涼し」と日本甲州の快川和尙は此の詩を朗吟して以て火中に投じたりと云ふ、杜も亦瞑す可きなり、已上共に七首天象や時節や明月や秋來や夜深等の類同じきを選みし意、

寄別朱拾遺　劉長卿

天書遠召滄浪客　幾度臨岐病未能

江海茫茫春欲遍　行人一騎發金陵

天書遠く召す滄浪の客、幾度か岐に臨んで病て未だ能はず、江海茫茫春遍からんと欲す、行人一騎金陵を發す、

【略傳】劉長卿字は文房、至德監察御史、檢校祠部員外郎、轉運使判官と爲る、吳仲孺の爲め誣告せられ、潘州南邑の尉に貶せらる、隨州の刺史に終ふ、詩家の所謂、中唐の人に屬す、

【句釋】寄別は送別と同義、朱は姓、拾遺は官名、天書は詔書を云ふ、遠召は朱の遠方に居りしを召す、滄浪客は天竺浪人を指す、滄浪は靈均が漁父に遇うた所、沔水卽ち漢水なり、幾度臨岐朱も劉も共に天竺浪人なるが、天子の召さるるに因て都へ幾度か赴むかんと欲したるも、病未能劉は病臥して劇かに發する能はず、江海茫茫滄浪は潺潺たるが、之に異なりて江海は茫茫たり、一は小、一は大を言ふ、春欲遍天地の春も遍からんとする時節、亦我等二人も一身の春來らんとす、行人一騎二人召されたるに一人行く、此の一人は朱か劉かの說がある、寧齋は劉が行くなりと言ふ、余は朱が行くなりと定むる、病は劉で朱にあらざればなり、行人一騎の四字は幾度臨岐と線脈を通じて居る、發金陵江蘇省の江寧府が古の金陵なり、朱が此を發して

洛陽に向ふなり、

【評論】此の篇、他人に在ては名篇なるも劉に在ては名篇と稱するに足らず、中唐猶ほ渾厚の氣、晚唐人の及ばざる所を知らば可なり、

題張道士山居　秦系

盤石垂蘿只是家　回頭猶看五枝華
松間寂寂無煙火　應服朝來一片霞

盤石垂蘿只是家、頭を回らして猶ほ看る五枝華、松間寂寂として煙火無く、應に服すべし朝來一片の霞、

【略傳】秦系字は光緒、會稽の人、天寶年間に兵亂を避けて、剡溪に居、自から東海釣客と稱す、天子種種の官を以て之を招けども皆就かず、年八十を以て死す、穴居して老子を注す、其の人、仙風道骨ありしこと知るべし、系を一本至に作る誤りならん、

【句釋】張道士山居仙道を修習する張姓の人の山居に此の詩を題す、盤石は巨石、垂蘿は老樹に挂るもの、只是家別に堂堂たる邸宅は無し、只此の石と蘿とが我が家なり、道士は沙門と同

じく、身を清淨に處して、人慾を去ることに勤む、無用の長物は家に置くを許さぬ、盤石垂蘿は佛道の樹下石上と同一なり、回頭は凡人の如く種種慾想の爲め頭を回らさずと雖も、猶看五枝華仙家に限り生ずる五枝華のみは看る、『山海經』に「王室山に木あり、其の華五衢」と是れなり、松間寂寂道士が修道する適當なる處は松間の寂寂たる所に限る、人間は修道の處にあらず、無煙火人間は煙火あり、松間は煙火なし煙火食の者は慾念起る、煙火食せざる者は慾念起らず、應服朝來一片霞仙人でも道士でも何か食物を取らなくては身を保つ能はず、然れども人間の煙火食は法の禁ずる所、是に於て「アサノカスミ」を食うて僅かに身を持つ、が此の霞も蟬の食ふ「カスミ」にはあらず、一種の藥なり、此の藥を製し、自から食ひ、亦人に賣與するのが道士の職業とす、此の事を知らずして仙を論ずる者は、仙の爲めに翻弄せらるる事あるべし、

【評論】此の篇、秦が道士の山居を訪問したるも不在なるを以て此の詩を壁に題して去りしもの、山中深く入て處を知らざるを歌ふ、

寄李渤

五渡溪頭躑躅紅　嵩陽寺裏講時鐘　張籍

春山處處行應好　一月看花到幾峯

五渡溪頭躑躅紅なり、嵩陽寺裏講時の鐘、春山處處行て應に好かるべし、一月花を看て幾峯に到る、

【句釋】傳は前に在り、李渤は李涉の弟とす、嵩山の少室山に隱居して自から少室山人と稱す、朝廷之を用ひんと欲し召せども至らず、處士を以て終ふ、五渡溪は嵩山に在る溪の名、躑躅紅此の花は和名「ツツヂ」植物なるに足扁の字に從ふは、動物殊に羊が此の葉を食へば非常に惱むと云ふ說を以て「テキチョク」を名としたりと云ふ、人間の行かんと欲して行く能はざる形容を元來「テキチョク」と云ふなり、轉化したるものと知るべし、一名、山石榴、春晩夏初に花開く、嵩陽寺は嵩山に在る、一寺なり、講時鐘此の寺の大和尙が經を講ずる時の鐘なり、春山處處行應好五渡溪頭も好、嵩陽寺裏も好、處處皆好からん、張が李渤の住する嵩山に對し、想像する、春山は前に花あり、春の字出さざるべからず、一月は日本語の一ケ月三十日の間にと云ふ氣味、看花到幾峯此の嵩山は五嶽の一、一に崧山と書す、河南省河南府に在り、山東を大室と曰ひ、山西を少室と曰ふ、相去る十七里、嵩は其の總名なり、漢の武帝親しく嵩に登り、高く萬歲を

呼ぶもの三たびなるを聞く、祠官をして山下に戶三百を加增せしむ、此の中に少林寺あり、達磨面壁の跡なりと云ふ、三十六峯各の異觀を呈すと云ふ、

【評論】　此の篇、別に大奇無しと雖も、情致藹然掬すべきものあり、『全唐詩』の評に「詩樂府に長じ警句多し」と「築城詞」「猛虎行」「傷歌行」「吳宮怨」「北邙行」「關山月」「隴頭行」「塞下曲」「少年行」「烏夜啼」の如き太白も亦讓るべし、同門の孟郊、賈島は皆其の膝下に在り、

南莊春晚

李羣玉

草暖沙長望去舟　微茫煙浪向巴丘
沅湘寂寂春歸盡　水綠蘋香人自愁

草暖に沙長うして去舟を望めば、微茫たる煙浪巴丘に向ふ、沅湘寂寂として春歸り盡く、水綠に蘋香うして人自ら愁ふ、

【略傳】　李羣玉字は文山澧州の人、太中中に宰相崔鐫其の詩を進む、處士を以て弘文館校書郎に除す、又一說に裴休、湖南に觀察して厚く之を延致す、相に入て詩を以て朝に薦む、遂に校書郎を授くと、

【句釋】　南莊春望は『全唐詩』には澧浦春曉とあり、澧浦に李が別莊を云ふなれば「南莊春晚」も亦通ず、草暖は春日の狀を言ふ、沙長は江邊に水無きを言ふ、望去舟何人の舟と限るにはあらず、去舟が巴丘方面へ向て行く、微茫は「カスカ」の貌を言ふ、煙浪は舟に隨て行く浪を言ふ、向巴丘巴丘は巴陵縣なり、沅湘は今の湖南省岳州府なり、澧州と接近する處、寂寂は「サビシ」沅湘の景色を言ふ、春歸盡舟は去、春は歸る、主觀も客觀も共に寂寂寥寥たり、水綠蘋香蘋は水草、夏日香を發するもの、人自愁水綠も自然蘋香も自然、得意の人、之を見れば何の愁かあらん、失意の人、亦感慨の人之を見れば、豈愁へざるを得ん、起句の草暖沙長の四字は舟に屬し、結句の水綠蘋香は人に屬す、

【評論】　此の詩は深意ありて作りしものと先輩評するが、余は卽景卽目を叙したるものと爲す、『三體集』中名篇の部へ收めて可なり、

長溪秋思

唐彥謙

柳短莎長溪水流　雨微煙暝立溪頭
寒鴉閃閃前山去　杜曲黃昏獨自愁

柳短く莎長うして溪水流る、雨微に煙暝うして溪頭に立、寒鴉閃閃として前山に去る、杜曲黄昏獨自ら愁ふ、

【略傳】唐彥謙字は茂陵、咸通中に進士と爲り、後、判官、禮部尚書を經て卒す、鹿門先生の別號あり、

【句釋】長溪は長安に杜曲と云ふ游園あり、其の游園の一部を長溪と云ふ、秋思は秋に感ずる思を叙す、柳短は柳の衰へたるなり、莎長は莎「ミクサ」の盛んなるなり、溪水長莎は水艸、卽ち水頭の景を叙す、雨微は細雨なり、煙暝は深煙なり、立溪頭秋思に堪へずして來り溪頭に立ち秋色を撫す、前の溪水流は光陰の迅速なるを云ふ、柳短は自ら比し、莎長は他人に比す、雨は天恩に比し、暝は恩澤を蒙むる薄き人に比す、寒鴉閃閃鴉の閃閃は「ヒラメク」忽ち有、忽ち無を閃閃と云ふ、前山去夕照に影を閃かして前山に向て去る、杜曲に立て黄昏は落日、獨自愁他人の伴ふ無し、寂寞として愁へざるを得ず、

【評論】此の篇、卽景卽目を叙したるなりと言はば然りと答へんが、又比體を以て出したりと見れば、自から比體の妙ある、劉長卿より此に至る五首、江海茫茫、松間寂寂、春山處處、沅湘寂寂、寒鴉閃閃、等の疊字法を同うしたる作法を知るべし、

隋宮

鮑溶

柳塘煙起日西斜　竹浦風回雁弄沙
煬帝春游古城在　壞宮芳艸滿人家

柳塘煙起りて日西に斜なり、竹浦風回りて雁沙を弄す、煬帝の春游古城あり、壞宮芳艸人家に滿つ、

【略傳】鮑溶字は德元、元和四年の進士、孟郊と友とし善、

【句釋】隋宮は隋の文帝、煬帝の宮址を見て作る、隋の都は今日の江蘇省江寧府卽ち金陵なり、柳塘煙起日西斜文帝は未だ柳を種ゑずして煬帝の爲め弑されたり、煬帝に至りて盛んに柳を種ゑ塘を築きしもの今此に游ぶ日已に斜の時を叙す、竹浦風回雁弄沙竹と柳、塘と浦、煙と風、起と回、日と雁と一一字を對す、一方は無情、一方は有情、煬帝春游古城在煬帝其の人は李淵の爲め亡ぼされ其の豪游せる人は已に亡し、但游跡たる古城のみ後人追弔の物存在す、壞宮は今朝卽ち唐の爲め壞破されし宮址なり、芳艸滿人家昔日は宮に近づき人家の存する理無し、今日は人家も滿ち、亦芳艸も滿つ、

【評論】此の篇、隋宮に對して懷古の情を發せしもの、語語平穩、亦唐人の面目を失なはず、

綺岫宮

王建

玉樓傾側粉牆空　重疊青山遶故宮
武帝去來紅袖盡　野華黃蝶領春風

玉樓傾側して粉牆空し、重疊たる青山故宮を繞る、武帝去て來た紅袖盡、野華黃蝶春風を領ず、

【句釋】綺岫宮は天隱の注に「東都永寧縣の西五里に在り、顯慶三年置」と、季昌の說に「綺岫は唐の後宮なり、一に云ふ驪山に在り、漢の武帝立つ、玄宗嘗て行幸す、山光圍繞す、因て綺岫と名く、」後說是ならん、玉樓傾側側は傾「カタフク」傾は側なり、共に倒れたるなり、粉牆空樓已に傾ぶく、粉牆空は勿論なり、土屏を粉牆と云ふ、重疊青山遶故宮西安府の地たる、四面皆山、是の故に溫湯湧き、四時游に適す、宮を置き娛樂する所以、武帝は漢武にあらず、玄宗を指す、華蕚樓又は華淸宮、玄宗が楊太眞と共に游樂したる所とす、去來去てより以來を云ふ紅袖盡は美人盡る意味なり、東洋婦女の病氣として紅色を好む、少女や少婦は紅にあらざれば

美とするに足らず、紅裙、紅袖、以て女の代名詞と爲す所以なり、玄宗が多勢の後宮、特に太眞なぞ今日は已に見えざるなり、野華は古の宮華に反對、黃蝶は古の紅袖に反對、領春風依然たる春風を領ずる者は今日唯野華と黃蝶のみ、

【評論】王建の宮詞に於る唐三百年間第一の評あるは古今皆許す所なり、此の篇は、最上乘にあらざるも、亦懈の擊つべき所無し、後人以て準據と爲すに足る、綺と岫との二字を等閒にせず、句中巧妙に之を用ふ、用意の周到、察するに餘あり、曰く玉樓、曰く粉牆、曰く黃蝶、曰く紅袖、皆綺字に反映し、岫を云ふに重疊青山の四字を以てして足る、良とに名手の名に背かざるを知る、

送三藏歸西域

李洞

十萬里程多少難　沙中彈舌授降龍
五天到日應頭白　月落長安半夜鐘

十萬里程多少の難、沙中彈舌して降龍に授く、五天到ん日應に頭白かるべし、月は落つ長安半夜の鐘、

【略傳】李洞字は才江雍州の人、朱泚の亂を避け蜀に入て普州の大雲山に於て石を鑿て洞を爲り、易を其の中に讀む、賈島に師事し、其の詩を慕ふ、『北夢瑣言』に洞賈島が像を鑄、頂戴して常に賈島佛と念ずと、

【句釋】送三藏歸西域單に三藏では何人なるやを知らず、僧の三藏卽ち經、律、論の三に通ずる人に對する敬語、羅什三藏、玄奘三藏等の如し、三藏法師と四字の敬語は恰かも「仁兄大人」又は「師父大人」と稱すると同樣、敬語を層用するなり、然るに今「三藏」の題は「僧」の意味で見るべし、印度僧の歸るを送るならん、今日では印度と西域とは全く別なれども、唐代の詩人は印度をも西域の中へ收む、玄奘三藏の『大唐西域記』なぞも亦然り、其の意を以て此の詩を讀むべし、十萬里程『漢書地理志』の上に西域としては「大宛」一萬二千五百五十里を最とし、「月氏」の一萬一千六百里之に次ぐ、然るに今十萬里と出だす、大宛も月氏も安息も通過して其より遠からざるを得ず、多少難は水路も陸路も容易ならざるを云ふ、天山南北の二路共に困難なり、沙中は流沙を云ふ、彈舌は三藏が口に佛敎の咒文を唱へる事を云ふ、授降龍此の龍と稱する者も、沙漠中に棲息して居る蠻族の酋長を云ふ、玄奘が沙漠にて龍に食はれんとして深沙大王に救はれたと稱することも、此の酋長に救はれたるなり、今此の僧も沙中に於て此の酋長や此の

蠻族に佛敎を授け其の猛性を矯めるものなり、五天は印度を東西南北中の五つに分て云ふ、今一僧が歸るにあれば、西天とか南天とか改めるを可とす、一僧が五天に歸る事は出來ざるなり、到日應頭白玄奘は七生して以て始めて五天に周游するを經たりと云ふ、一生の中に到るにも多少難を經、頭の白を催す固より其の所なり、月落長安半夜鐘は三藏を送る時を云ふ、送別の爲め淨齋を設け、夜半に及びしものならん、依て、五天を西天と改むれば、此の月落の字に反映する、中天と改むれば此の半夜の字に反映する、古人と雖も、注意の足らざる所、亦字の誤寫もあるなり、半夜に鐘を擊つ、寒山寺も然り、長安の寺も亦然り、然るに半夜に鐘は擊つ擊たぬと議論する者がある、詩を知らず唯字を知るが故なり、重野成齋と云ふ人が日蓮上人時代に僧を斬る刑法が無いと論じて龍口法難は虛語なりと斷じたるは、半夜鐘を議する者と其の愚を同うするものなり、日蓮の法力は無い刑法を設けさする、大詩人は規則の無い鐘を擊せると自由自在なり、智者より見れば尋常茶飯事、驚く可きものにあらず、亦議すべきものにあらざるなり、

【評論】此の篇、西天へ歸る法師を送るとして大奇無しと雖も、亦大拙にもあらず、平平なるものとす、二冬の韻は百有餘字あり、起句、十四寒の難字を假らざるも別に作法ありしならん惜むべし、鮑溶より此に至る三首は第三句、卽ち煬帝春游、武帝去來、五天到日、と其の句法

を同うし以て結句を生ずるなり、

長信秋詞

王昌齡

奉帚平明金殿開　且將團扇共徘徊
玉顏不及寒鴉色　猶帶昭陽日影來

帚を奉じて平明金殿開く、且く團扇を將て共に徘徊す、玉顏は寒鴉の色、猶ほ昭陽の日影を帶び來るに及かず、

【略傳】王昌齡字は少伯、江寧の人、詩を工にす、時に王江寧と謂ふ、開元の間に進士に第す、祕書郎に補し、又博學宏詞に中らる、汜水の尉に遷る、細行を護らず、龍標の尉に貶せらる、世亂を以て鄉里に還る、刺史閭丘曉が爲に殺さる、

【句釋】●●長信は宮名、漢の成帝の皇太后の住所、班婕妤成帝に幸せられ、後寵を趙飛燕に奪はれ、其の上、飛燕の譖言に逢ひ、自から求めて太后に長信に供養せんとし、此に來り、秋●詞●即ち其の思を後世の詩人代て之を叙す、奉●帚●は「ハハキ」卽ち婦の夫に事へる道、今は太后の爲め班婕妤が洒掃を爲す、平●●は早曉なり、金殿開長信宮を云ふ、且●●●團扇公事の洒掃が已に終

りたるを以て今度は私事の爲め團扇を將て、共●●徘徊●太后の徘徊に婕妤も侍するゆゑ共の字が通ず、婕妤が作る團扇の歌に曰く「常に恐る秋節の至て、涼飈炎熱を奪はんことを、篋笥の中に棄捐せられて、恩情中道に絕つ、」●●玉顏●●は美顏を云ふ、婕妤の美を云ふ、●●●●不及寒鴉色●●●●寒鴉は黑顏にて玉顏にはあらず、然るに婕妤の玉顏は寒鴉の黑顏に及ばず、及ばざる所以は、●●●●猶帶昭陽日●●影來寒鴉は君王の行幸する趙飛燕の昭陽宮の日影を帶て來る、婕妤は長信に在て、昭陽の日影を帶て來ること能はず、玉顏も黑顏に及かざる所以なり、

【評論】此の篇、明の胡元瑞が評に優柔艶麗、意味無窮、風骨內含、精芒外隱、如二清廟朱絃一、一唱三嘆とあり、實に絕句三昧、唐以前此の詩無く、唐以後、亦此の詩無し、

吳城覽古

陳羽

吳王舊國水煙空　香徑無人蘭葉紅
春色似憐歌舞地　年年先發館娃宮

吳王の舊國水煙空し、香徑人無して蘭葉紅なり、春色は歌舞の地を憐むに似たり、年年先發く館娃宮、

【略傳】　陳羽は貞元八年に韓退之、王涯と共に及第したる進士、詳傳は逸す、

【句釋】　吳城覽古吳王の城址を弔して作る、江蘇省江寧府、是れ即ち古の吳城なり、周の太伯より夫差に至る二十五世にして亡ぶ、吳王は夫差、舊國水煙空夫差が西施と共に淫樂せし姑蘇臺も水の如く煙の如く消滅して空しきなり、香徑は採香徑の略なり、吳王が西施と稱する亡國蟲の爲め採香徑を作り、香木や香花を種ゑ游樂したる處、無人蘭葉紅當年の人は已に無く、唯蘭葉のみ衰殺してある、蘭葉は青を以て生く、紅は已に死なり、春色似憐歌舞地無情の春色も當時歌舞の地を特別に憐むが如く我は感ず、其の感ずる所以は、年年先發此の先の字は余は花の誤寫ならんと思ふ、千年來疑ふ者無きが、前句の春色の文字より見て花の字ならざるべからず、先の字、何等の姿致を有せず、館娃宮は西施亡國蟲の居住したる所、此の處を憐むに依て他處より先きに花が發くなりと解して居る者多きが、花の字無くして先の字のみにては妥當ならず、館娃宮も唐時代は靈巖寺と云ふ法師の住坊と化す、亡國蟲の菩提を弔する爲めならん、

【評論】　此の篇、吳國の衰亡を憐んで作る、極言せずして其の憐を春色に托す、唐賢の面目を保つと謂ふ可し、

江南意　于鵠

閒向江邊採白蘋　還隨女伴賽江神
衆中不敢分明語　暗擲金錢卜遠人

閒に江邊に向て白蘋を採る、還た女伴に隨て江神に賽す、衆中敢て分明に語らず、暗に金錢を擲て遠人を卜す、

【略傳】　于鵠は大歷貞元の間に詩名を揚げし人、諸府の從事と爲て卒す、

【句釋】　江南意此の題は樂府題なり、兒女が各自の癡情を叙べ、己が夫なり或は情人などが遠征して未だ還らず、其の間、春なり秋なり時節に應じて意を寫出するものなり、閒向江邊採白蘋題に江南とあり、句には江邊とあり、題は泛なり句は切なり、蘋は水草、其の大なるを蘋、小なるを萍と謂ふ、而して白蘋は水中に生じ、青蘋は陸地に生ず、春晩に始めて開く、是を採るは單に游戲の爲にはあらず、祭祀の供物にする爲めなり、「毛詩」に于以采蘋と、周の文王の化を蒙むつて大夫の妻が愼んで祭祀する狀を云うたもの、女子の禮を能くする事を言ふ、采蘋は女兒に限ることと知る可し、還隨女伴賽江神家祭が了れば他の神へ往賽する、順序整然と

して句句分明なり、衆中不敢分明語意中の人の事は顯露に人に話す事能はず、自分の念頭は唯神へのみ言ふ、他人は何を念願するや判然せぬ、此の判然せぬ處に女兒の妙味がある、暗擲金錢卜遠人賽錢を神祠へ擲ち意中の人が何日還るやと卜するなり、支那では寺門の前に賣卜者が多く居るを以て此の句も卜人に問ふと考ふる者もあらん、通せざるにもあらざるが、此の句には適切ならず、

【評論】此の篇、中唐の詩として頗る情趣あり、閒字と還字と暗字が作者工夫の存ずる所とす巧妙の機關は此の三字に在り、近時野口寧齋は王漁洋の閨中若問二金錢卜一、秋雨秋風過二霸橋一の句は此の詩を學んで神韻更に超と辨じて居るが、秋雨とか、秋風とかの文字を使用すれば神韻と心得て居るは大誤謬なり、漁洋は神韻を主張する結果、句に於て力の强弱を忘却して居る癖あり、未沸湯の水を飲むが如き感あり、神韻宗の本尊たる、王江寧や李庶子の詩は力の强處に此の神韻を認む、漁洋の神韻は力頗る弱し、作詩者は知らざるべからず、

閒情　孟遲

山上有山歸不得　湘江暮雨鷓鴣飛

蘼蕪亦是王孫草　莫送春香入客衣

山上山あり歸るを得ず、湘江の暮雨鷓鴣飛、蘼蕪も亦是れ王孫草ならば、春香を送て客衣に入ること莫れ、

【略傳】孟遲字は遲之、會昌五年の進士、

【句釋】閒情は細君が外君の不在中、外君を懷うて情を叙す、山上有山は出の字を云ふ、山と山と結合して出となる、外君が嘗て家を出しなり、而して其の正面は山上に山あれば路が困難なる意味を持す、歸不得「家を出づれば歸るを忘る」「山上又山であれば歸るに容易ならず」此の二意あり、湘江暮雨は寂寞たる景色を出して、以て前句の山上に對するなり、鷓鴣飛此の鷓鴣と云ふ鳥は其の啼聲を行不得と云ふ、細君が如何に外君を思ふも山上又山を行くこと到底能はざるの意味を此の句に持つ、且南に向うて北には向はざる鳥なればなり、蘼蕪は一名を芎藭葉「ヲンナグサ」又當歸草と云ふ、亦是王孫草此の王孫草は一名、白功草、又黃昏草、又海孫と云ふ、其れを古詩に「王孫去不歸」とあるに依て、不歸草の名を帶せたるなり、當に歸る草も若し不歸草の如くならば、莫送春香入客衣當歸草の春香が外君卽ち客の衣に入れば、外君は速か

に歸國するならんが、不歸草の香が入りては到底歸る能はず、

【評論】此の篇、隱語を以て之を出し、出と行不得と當歸と不歸との文字に細心工夫して成るもの、西域の劉氏は此の詩を評して「詩に宮商金石の聲あり」と、中唐の佳境、晩唐人の及ばざる所、一唱三嘆すべし、

曲江春草　　鄭谷

花落江隄簇暖煙　雨餘草色遠相連
香輪莫輾青青破　留與游人一醉眠

花落て江隄暖煙簇がらす、雨餘の草色遠く相連なる、香輪青青を輾り破ること莫れ、游人に留與して一醉眠らしめよ、

【句釋】曲江は長安に在る、衆人の游園地なり、此に游びて春草を咏せしもの、華落江隄簇暖煙春晩の卽目を叙す、東都の向島又荒川堤、又利根沿岸を知る者は此の句直ちに了ずべし、雨餘草色遠相連華落ちて之に代るものは卽ち草色なり、香輪は貴族共の馬車を云ふ、莫輾青青破折角青青と生て來る草色も車輪で輾られては如何ともすべからず、請ふ輾破する莫れ、留與游

人一醉眠青青たる草上に眠る、此の愉快は譬ふるに物なし、

【評論】此の篇、鄭谷が七歳の時作りしとの說あり、七歳已に此の詩を作るとせば、實に天授と言はざるべからず、淸の洪北江は「織巧且俗」と評し、王漁洋は「未レ免二陋俗一」と此の二家の評極めて當れり、野口寧齋は「草色遙看近却無」韓退之と並行して可なりと、年五十の學者の詩と七歳童子の詩と並行して可なりとは韓昌黎先生地下に之を何と謂ふや、日本の詩人の眼孔無きこと多くは此の如し、歐陽修の『詩話』に戸戸鄭谷の集を置き以て小兒に讀しめたりと、宋人は鄭谷の俗なる處を喜びしもの、我黨の士は知らざるべからず、

山路見花　　崔魯

曉紅輕拆露香新　獨立空山冷笑春
春意自知無主惜　恣風吹逐馬蹄塵

曉紅輕く拆て露香新なり、獨空山に立て春を冷笑す、春意は自から主の惜む無きことを知て、恣風吹て馬蹄の塵を逐ふ、

【略傳】崔魯は宣宗の大中年の進士、

【句釋】　山路見レ花は一本、在華山作に作る、孰れにても可なり、曉紅は卽ち曉花、輕拆は「カロクヒラク」と古訓にあり、單瓣の花が拆くと見るを可とす、露香新曉花なれば猶露を帶ぶ、獨立は崔魯自身なり、空山は靜寂なる山の形容、冷笑春山路に發く花は如何に美なりと雖も觀賞する人無し、而かも開く、冷笑せらるる所以なり、春意自知無主惜知らざるを知と爲す、詩趣茲に存す、冷笑する所以なり、恣風は「勝手ニ吹ク風」吹逐馬蹄塵主人の在るならば、何ぞ馬蹄に之を委んや、花も人も世に合はずんば空しく生じ、空しく死す、感慨窮まり無し、

【評論】　此の篇、前の鄭谷の詩と伯仲の間に在り、冷笑の二字工夫の存する所とす、王より此に至る六首、玉顏不レ及、春色似レ憐、衆中不レ敢、蘼蕪亦是、香輪莫レ輾、春意自知、虛字斡旋の格を見るべきなり、

逢二入京使一

故園東望路漫漫　雙袖龍鍾淚不レ乾
馬上相逢無二紙筆一　憑レ君傳語報二平安一

岑參

故園東に望めば路漫漫、雙袖龍鍾として淚乾かず、馬上に相逢て紙筆無し、

君に憑て傳語す平安を報ぜよ、

【略傳】　岑參は南陽の人、天寶中に進士と爲る、安西節度判官、祠神二外郎、庫車二正郎、嘉州刺史、副元帥、侍御史、等の官を經て蜀に卒す、其の詩を岑嘉州集と云ふ、所說盛唐の大家なり、

【句釋】　逢二入京使一岑參が安西州の節度使と爲り赴く時、途中にて長安卽ち京に入る使者に逢て作りしものなり、故園は岑參の故園卽ち南陽を指して云ふ、東望路漫漫南陽は東方に當る幾百里隔つか漫漫、遠くして見る能はず、雙袖は字の如し、龍鍾は種種の字義あり、淚の垂るる形容、行不レ進の貌、俗語で之を言へば「ヨワツタ」に當る、淚不乾丈夫も亦淚の乾くあらず、馬上相逢無紙筆途中で使者に逢ひ、何の用意もあらざりしゆゑ、紙も筆も持たず、憑君使者に賴む、傳語報平安書簡を托すること能はず、幸に君が岑參は無事なりしと傳語して呉れよとなり、

【評論】　此の篇、語語自然、毫も精工を弄せず、淸風竹を吹く、何の巧を爲すにあらず、而かも韻致人に可なり、此の詩を讀む者。宜しく是の觀を爲すべし、

送客之二上黨一

官柳青青匹馬嘶　回風暮雨入二銅鞮一

韓翃

佳期別在春山裏　應是人參五葉齊

官柳青青として匹馬嘶く、回風暮雨銅鞮に入る、佳期別に春山の裏に在り
應に是れ人參五葉齊しかるべし、

【句釋】送客之上黨上黨は郡、今の山西省潞安府長子縣西是れなり、官柳晉の陶侃が傳に都尉西門の官柳を盜む、官柳の名此に始まる、官にて種たる柳なり、青青春半なればなり、匹馬嘶一騎征途に就く、回風暮雨は疾風迅雨と意味を同うすと見よ、入銅鞮上黨郡に銅鞮縣あり、起承二句客の迅速に上黨に入るを云ふ、佳期別在春山裏世上に花已に散じたるも春山には猶別に吾が快心のもの在る、其れは何ぞや、應是人參五葉齊春山我が心を引くものは卽ち此の人參なり上黨郡は人參の名所にて、之を含んで走る者は喘がずと稱す、『本草』に人參は潞州の太行山上に生ず、初め生じて小なる者、一莖兩葉、深く四椏を生ず、各の五葉なり、狀人に類せり、兩莖土に入て脚の如く、兩の小莖は下に垂れて手の如く、中に一身あり、首に五葉あり、人の髮あるに象たり、高麗人の詩に三椏五葉、背レ陽向レ陰と服する者陽氣を增すが其の効なり、

【評論】此の篇、尋常の平語、而かも送別の意は了了たり、

病中遣妓　司空曙

萬事傷心在目前　一身憔悴對レ花眠
黃金用盡教歌舞　留與他人樂少年

萬事傷心目前に在り、一身憔悴して花に對して眠る、黃金用ひ盡くして歌舞を教へ、他人に留與して少年を樂しめん、

【略傳】司空曙字は文明、一の字は文初、廣平の人、進士の第に上る、韋皐に劍南に從ふ、貞元中に水部郎中たり、虞部郎中に終る、大曆十才子の一人とす、

【句釋】病中遣妓、人、仙人王江に問ふ房中の事如何と、王江答へず、强て問ふ、房中の事、猶强兵術の如し、長壽を欲する者は、百戰百勝、戰はざるに若かず、病中に妓を去らしむ、已に遲し、遲しと雖も、去らざるに及かず、妓は卽ち愛妾なり、萬事傷心在目前傷心する所以は一身憔悴せるが爲めなり、一身憔悴せる所以は萬事傷心せるが爲めなり、對花眠花は妓を言ふ、別に際し情を遣る、黃金用盡教歌舞我が愛妾なるが故に惜むべき黃金を惜まずして、之に歌舞音曲を習はしむ、如何せん而かも主人其の人は年老、一方は年弱、互に滿足する所以のも

の無し、留與他人樂少年女も亦老年を嫌うて少年を求む、是れ自然の愛なり、我か如き老人に侍せんより、及かず他人に與て其の情を滿足せしめんには、詩人の本旨此に在り、

【評論】　季昌の說に『漁隱叢話』に云ふ、富貴の人に於る、造物の靳む所、人、晚景に至りて富貴を得、宅第を置き、妓妾を售て以て平生の不足を償ふことを免れず、白樂天が「多少の朱門空宅を鎖し、主人老に到りて曾て歸らず」司空曙が「黃金用ひ盡くして歌舞を敎へ、他人に留與して少年を樂しましめん、」人をして愴然たらしむ、

華清宮

酒幔高樓一百家　宮前楊柳寺前華
內園分得溫湯水　二月中旬已進瓜

王建

酒幔高樓一百家、宮前の楊柳寺前の華、內園溫湯の水を分ち得て、二月中旬已に瓜を進む、

【句釋】　華清宮は驪山に在り、陝西省西安府酒幔酒宴を開く時、四方を覆ふ幔なり、高樓一百家一百人の家と言ふにあらず、高樓の數を言ふ、宮前楊柳寺前華宮は知り易し、寺は何ぞ、曰く太常寺、

曰く太僕寺、曰く光祿寺、日本今日の文部省、內務省の省に當るなり、各の大臣ありて祭祀の儀を掌る、天寶四年、百司を湯所に置く故に寺あり、柳と花と宮寺を覆ふ、內園は屋內の溫泉と見れば可、分得溫湯水湯の湧出する元は一なれども各の之を引て分ち浴便に供す、溫泉の實況を知る者は說明の要なきなり、二月中旬已進瓜瓜は夏日の物にして、春日の物にあらず、然るに華淸には二月に之を進む、溫湯の爲めなり、玄宗の時に違うて口體奇巧の奉を求めて以て婦人を悅ばしむと譏る意なりと、此の詩を解する者もあり、蓋し玄宗の驕奢は他に種種あり、何ぞ之れのみならん、此の詩は唯暖地を言ふと解して可ならん、

【評論】　此の篇、王建の傑作にして千秋傳ふべきもの、余は此の詩を以て神品と稱す、

宣州開元寺

杜牧

松寺曾同一鶴棲　夜深臺殿月高低
何人爲倚東樓柱　正是千山雪漲溪

松寺曾て一鶴と同じく棲む、夜深て臺殿月高低、何人か爲に東樓の柱に倚ん、正に是れ千山雪溪に漲る、

【句釋】　宣州は江南道、宣城郡、開元寺は東晉の時は景德寺と稱し、西晉には永安寺、唐に開元寺と改む、此の開元寺は、玄宗が諸郡に立し寺、日本の國分寺の如きものなり、而して宣州の開元寺を以て總本山と爲したるなり、杜牧は度度此の寺に游び、五古八十字の詩が別にあり、松寺は開元寺に松多きを以て杜が名けしなり、曾同一鶴棲此の一鶴を杜の愛人なりと解したる者もあり、鑿に過ぐ、字の如く鶴と見て置くべし、夜深臺殿月高低月の高低は臺殿の高低に由てなり、何人杜自身は曾て月夜に一鶴と同じく棲で月の高低を見たるが、今日は何人かと疑問を發するなり、爲倚東樓杜杜が五古に「廊は環る四百柱」の句あり、大坊たること知るべし、誰が今日は寺の柱に倚て居るや、正是千山雪漲溪開元寺の月夜の景も可なるが、雪景も亦可なり、然るに今日自分は他に在て寺の狀を知らず、知らず雪の溪に漲るを見る者は何人ぞや、

【評論】　此の篇、諸家の注大抵は誤る、石川鴻齋の如きは、「今夜再ビ來テ宿ス、時ニ千山雪解テ溪ニ漲ル、スサマジキ景ノミ、何人カ東樓ノ柱ニヨラン」何人の意を得ざるなり、『本集』に宣州の上に「寄題」の二字あり、他に在て曾棲の事を憶ひ起し、此の詩を作る、故に今日は何人かと謂ひしなり、自分が再游せしにはあらず、野口寧齋なぞも「今日再游鶴已にあらず」と說く、悉く三體詩編輯人の爲め誤まらる、嗚呼詩を說く難い哉、

山行

遠上寒山石徑斜　白雲生處有人家
停車坐愛楓林晚　霜葉紅於二月花

遠く寒山に上れば石徑斜なり、白雲生ずる處人家あり、車を停め坐ろに愛す楓林の晚、霜葉は二月の花よりも紅なり、

【句釋】　山行は字の如く山行なり、呂居仁曰く此の詩三四、曾て約する所の小女二雛ありと雖も猶容色新なるの心を謂ふ、杜の一言一句、悉く女子を以て解す笑ふべき事なり、杜知るあらば大笑を發すべし、遠上寒山石徑斜遠の字は寒山の高きを言ふ、白雲生處有人家白雲生は山の高ければなり、人家の有るに依て、我の車を停むる所以なり、正に是晃嶺中禪寺に登る景なり、坐愛楓林晚坐を古來「ソゾロニ」と訓す、何の意なるを知らずと雖も、緩の意味に解したるならん、亦妨げず、霜葉紅於二月花夕陽に照映するが故に一層の紅を現ず、

【評論】　此の篇、天隱も季昌も一言一句の注を加へず、注の無用を知ればなり、元の瞿宗吉の『歸田詩話』に紅葉を見る每に、此の寫景の妙を思ふと、

寄山僧

張喬

大道本來無所染　白雲那得有心期
遠公獨刻蓮華漏　猶向山中禮六時

大道本來所染無し、白雲那ぞ心期あるを得ん、遠公獨刻む蓮華漏、猶山中に向て六時を禮す、

【略傳】張喬は池州の人、咸通中に京兆府の解試首薦たり、黄巣の亂に遭うて伍喬が徒と九華山に隱る、

【句釋】寄山僧山中の僧に寄呈せしもの、大道は釋迦説く所の道、孔子の道にはあらず、本來は「モトヨリ」なり、無所染佛敎は染を淨の反對とす、故に惡は染、善は淨とす、故に言ふ道は本來清淨なりと、白雲那得有心期大道は本來白雲の如し、東するの西するの、南又北などと心期は無し、遠公は惠遠、東晉の世、廬山に蓮社を設け道を修せし高僧、獨刻蓮華漏遠公は持律堅固なれば中を過ぎ食はず、然るに時刻が分明ならざれば、或は中を過ぎて食ひ破戒を免れず、依て弟子の惠要に命じて、十二瓣の蓮を作り、一時を經れば一瓣落る、其の暑景差ふ無ければ

中を過ぎて食ふの患ひ無し、又行道看經も是に由て正す、猶向山中禮六時佛敎にて初時と中時と後時、此の三時を以て晝と夜に分つ、卽ち六時なり、漏なぞを刻むは畢竟本來の大道を知らざる者と嘲りたるなり、

【評論】此の篇、佛敎の大本より見て、區區たる時刻なぞに執著する僧は、白雲の無心なるに及ばずと嘲笑したるもの、實に達見と謂ふ可し、蓋し山僧を罵倒し、遠公を嘲笑したるにはあらず、唯道は更に大、要するに白雲無心なるが如きを貴しと爲すに在り、佛學者か、或は禪を了解したる人にあらずんば、此の詩を得ず、又此の詩を解せざるなり、我邦人の注脚、盡く妄斷妄解、張喬其の人に笑はるるを知らず、

寄人

張侹

酷憐風月爲多情　還到春時別恨生
倚柱尋思倍惆悵　一場春夢不分明

酷だ憐む風月の爲めに多情なることを、還て春時に到りて別恨生ず、柱に倚て尋思して倍す惆悵す、一場の春夢分明ならず、

【句釋】張俔は唐書に傳を闕く、寄人は自分の妻に與へしならん、酷憐は非常に憐むなり、風月爲多情風月は多情にあらず、我が多情よりして風月も亦多情なり、卽ち主觀的に之を言ふ、還到春時別恨生還は「カヘル」の義を持つ字なれば、前に一度、別恨を生じ、今や春時に到りてマタ別恨生ずることとなる、二度も三度も別恨の生ずるは風月が多情なるに由る、倚柱尋思別時の事をドウしたカウしたと思ひ出すを尋思と云ふ、倍惆悵モダエル事を惆悵と云ふ、一場春夢不分明一場は少間又暫時と同じ、愚にも付かぬ事を兎や角思ふが故に夢中に感情が起れども前も後も無く、眞も幻も無く、要するに分明ならざるなり、

【評論】此の篇、夫の婦に對する至情發露して酷だしく淫語ならずと雖も、蓋し溫柔鄕の語、深く論ずるに足らず、春二字あり、亦疵と謂可し、岑參より此に至る八首皆、起句に大要を叙し、第三句直ちに其の事を指し、以て四句を引き出すの格、聊か議論ありと雖も、伯弱の定むる意は上の如きなり、

過南鄰花園　　雍陶

莫怪頻過有酒家　　多情長是惜年華
春風堪賞還堪恨　　纔見開花又落花

怪む莫かれ頻りに酒ある家に過るを、多情長く是れ年華を惜む、春風は賞するに堪へ還恨むに堪たり、纔かに開花を見れば又落花、

【句釋】過南鄰花園句中に酒家とある、南鄰の花園卽ち是れなり、莫怪頻過有酒家吾が頻頻と酒家に入るを變に思ふことを休よとなり、其の酒家に入る意は酒にあらずして、多情長是惜年華花を見んが爲め酒家に入る、多情の文字は我邦俗の考ふる意味とは違ふ、熱情の事なり、俗語の「浮氣」にはあらず、時時刻刻靑春の去るを惜む、春風堪賞還堪恨開花は賞するに堪ふるが落花は恨むに堪へたり、昨賞し今恨む、多情なる所以なり、纔見開花又落花開落共に心に關す、多情年華を惜む所此に在り、

【評論】此の篇、晩唐の佳作、宋人の法門、多く此等に出づ、

宮詞　　杜牧

監宮引出暫開門　　隨例須朝不是恩
銀鑰卻收金鎖合　　月明華落又黃昏

監宮より引て出暫らく門を開く、例に隨て須らく朝すべし是れ恩にあらず、

銀鑰卻て收めて金鎖合す、月明華落て又黃昏、

【句釋】宮詞は前に辨せり、監宮は宮の阿監、妃嬪の老たる者、所謂女官長なり、引出暫開門女官の出入を監督して門を開く、隨例は毎日の例、出も入も同じ、須朝不是恩千も二千も宮女輩が朝勤するが、君寵を蒙むる者は一人、餘は夜幸を得ずして退朝す、恩ならざる所以なり、銀鑰は銀の鍵なり、卻收金鎖合鎖は錠なり、宮女輩が一一己が室へ歸れば宛かも囚人同樣、其の室は錠を以て出入するを得ざらしむ、月明華落又黃昏此の七字を種種に曲解する者あるが、要するに恩を蒙むらずして去年今年又來年と過ぎ去ると云ふの意なり、此の意を月と花と黃昏の字を以て美麗に爲したるのみ、

【評論】此の篇、宮詞として晩唐の最上乘に屬するもの、小杜にあらざるより此の詩を得ざるなり、

漢江

溶溶漾漾白鷗飛　綠淨春深好染衣
南去北來人自老　夕陽長送釣船歸

溶溶漾漾として白鷗飛、綠淨く春深うして好し衣を染むるに、南去北來人自から老、夕陽は長く釣船の歸るを送る、

【句釋】漢江秦州の天水縣に出るを西漢水と謂ひ、大安郡三泉縣に出るを東漢水と謂ふ、今日の湖北武昌は漢江の中間とす、溶溶は水の盛貌、漾漾は水の動貌、白鷗飛此の時を得意と爲すは此の白鷗なり、綠淨水綠の如く淨し、春深好染衣衣が水色に映じて染る如きなり、南去北來名を求め利を求め、南北に去來忙がしうして、人自老奔走中に紅顏は白頭に化す、夕陽長送釣船歸此の江の有らん限り夕陽は長く所謂永久に釣船の歸るを送る、此の景は長く人は短きなり、

【評論】此の篇、小杜の至るものにあらざるも、其の外面に表はれざる所に其の悲惋の存する所あり、亦以て誦すべし、

寄維揚故人　張喬

離別河邊綰柳條　千山萬水玉人遙
月明記得相尋處　城鎖東風十五橋

離別河邊に柳條を綰ぬ、千山萬水玉人遙かなり、月明にして記得す相尋ぬる處、城は東風を鎖す十五橋、

【句釋】維揚は所謂揚州なり、故人は許棠なり、離別河は河の名ならん「河邊に離別」にはあらず、綰げ枝を環の形にワガネるなり、環は還なり、早く還られよとの意を寓す、柳條條は條枝「エダ」なり、千山萬水は故人の遠游を云ふ、玉人遙張は池州に在り、許は揚州に在り、東西相遙かなり、『南史』に謝晦、謝混、風流、江左第一と爲す、宋の武曰く一時頓に兩玉人有りと、其の人高潔玉の如くなればなり、月明記得曾て離別せし時月明に會ふ、然るに今夜又月明に會うてフト曾游の事を憶ひ起すなり、相尋處曾て相尋ねし處なり、城鎖東風十五橋揚州は昔十五橋あり、後、二十四橋となる、東風を鎖すとは城中に東風が滿ることなり、「別後十五橋邊定めて戸を春風に鎖し」と解したる古人の說は大なる誤なり、揚州は繁華の地、女子美麗多く而して擧止婉慧、諸州無き所、何ぞ戸を春風に鎖すが如き寂寥の時あらん、

【評論】此の篇、揚州なるが故に、特に其の人を玉人と稱して而して結句に十五橋を出す、巧妙の手段を隱約の中に表はす、好絕句と謂つ可し、

逢友人之上都

僧法振

玉帛徵賢楚客稀　猿啼相送武陵歸
潮頭望入桃花去　一片春帆帶雨飛

玉帛賢を徵して楚客稀なり、猿啼相送りて武陵より歸る、潮頭の望は桃花に入り去る、一片の春帆雨を帶て飛、

【句釋】法振は姚合同時の人、傳は未詳逢友人之上都友人が京兆へ赴くに逢うて作る、玉帛は朝廷より人を徵す所の招狀なり、「ツカヒ物」にはあらず、徵賢野に遺賢なきは上に明天子あればなり、楚客稀暗愚の天子懷王は賢を用ひず、卽ち屈原が楚客と爲て流離し、遂に身を投ずるに至る、今日は此の如き事なし、野に楚客稀なる所以なり、猿啼は友人を送る時聞く、相送武陵歸湖南の武陵より陝西の京兆へ歸る、題の之とは卽ち歸るなり、路として二百里程なり、潮頭望楊子江頭に立て其の歸影を望む、入桃花去其の人の影は冉冉桃花の影に藏る、必ず桃花ならず、武陵の文字前にあればなり、一片春帆帶雨飛其の迅速に帆を揚げ去るを言ふ、喜心の甚だしき意味を含む、

【評論】此の篇、釋氏の詩として穩にして妥、平にして澹、澹にして腴、筆墨の修羅たらず、大乘の法門に適ふものなり、此に至る五首、第二句を以て第三句を出し、第三句一呼すれば、第四句之に應ず、一呼一應の格と古來云ふ、伯弱の意如何を知らず、

山中　　顧況

野人自愛山中宿　況是葛洪丹井西
庭前有箇長松樹　夜半子規來上啼

野人自から愛す山中の宿、況や是れ葛洪が丹井の西、庭前箇の長松樹あり、夜半子規上に來て啼く、

【略傳】顧況字は逋翁、姑蘇の人、至德の進士、性恢諧にして柳渾、李泌と友たり、德宗の時渾、政を輔けて秘書郎を以て召す、泌が相と爲るに及んで自から謂ふ當に達官を得べしと、久うして著作郎に遷る、詩語調謔に坐して饒州の司戸に貶せらる、茅山に居し壽を以て卒す、

【句釋】山中は越の山中、卽ち耶溪の雲門寺、野人自愛山中宿讀で字の如し、況是葛洪丹井西耶溪の雲門寺は天下の名藍として名高し、晉の葛洪が仙丹を練て其の用に供せし水も此の山中

に在り、庭前有箇長松樹仙人の長壽なるが故に特に松を言ふにばあらず、雲門寺實に此の長松多きなり、夜半子規來上啼是れ顧況が宿泊せし夜の實事ならん、鴻齋老人の說に元の時、日本を攻めん爲め天下の良材を斫て船を造らんとす、既に雲門寺の松を斫んとす、僧斷江、詩を作て曰く斧斤若到耶溪上留箇長松聽子規と終に斧斤の厄を免るるを得と、

【評論】此の篇、山中の實況、目前に宛然たり、晁嶺に住する者は、大抵此の實狀を知る、沈歸愚の『別裁』に顧況の「宿昭應詩」を載す、武帝祈靈太乙壇、新豐樹色繞千官那知今夜長生殿、獨閉空山月影寒山中の詩の及ばざる所とす、

酬曹侍御過象縣見寄　　柳宗元

破額山前碧玉流　騷人遙駐木蘭舟
春風無限瀟湘意　欲採蘋華不自由

破額山前碧玉流る、騷人遙に駐む木蘭の舟、春風限り無き瀟湘の意、蘋華を採んと欲するに自由ならず、

【略傳】柳宗元字は子厚、河東の人、博學宏詞科に擧げられ、貞元間に王叔文、政を得て內禁

に引て與に事を計る、俄かにして叔文敗す、坐して永州の司馬に貶せらる、元和十年柳州の刺史に徙る、十四年卒す、年四十七、文章韓愈と二大家と稱す、詩は王、孟、韋、柳、の四大家と稱せらる、

【句釋】酬は和なり、曹は姓、侍御は官名、象縣は柳州縣の名、曹が湘南に移さるる時、象縣を過ぎ其の消息を柳に傳ふ、柳依て之に酬ゆるなり、破額山は五祖禪師が寺を立し處にて柳州に在るとの說なり、余は未だ其の證を見ず、蓋し子厚の言ふ所、誤なけん、碧玉流は水を形容して言ふ、騷人は曹侍御、遙駐木蘭舟江中に舟を駐むる所以は、破額山を前面に仰ぎ瞻れば なり、木蘭樹を以て造る舟は沈溺の患なしと信ぜらる、春風無限瀟湘意瀟湘の地は曹が此に住して暫らく象縣を過ぐ、此の間に於て何か微意を表せんと欲すれども自分は流寓の身にて如何ともすべからず、春風に對して種種限り無き意の起る所以、欲採蘋華不自由瀟湘と云ふ水を前句に出すを以て此に蘋華の字を以て之を起す、蘋華を採らんと欲するは曹に獻せんが爲めなるも、如何せん流寓の罪ある身、自由ならざる所以なり、『左傳』隱公三年に蘋蘩薀藻の菜、鬼神に薦むべく、王侯に羞むべしと、

【評論】此の篇、流寓して其の不平を彼の屈原に比する意あり、離騷の意を以て構成したること

と明白なり、沈歸愚曰く詞特微婉と、良とに然り、

宿武關

李涉

遠別秦城萬里游　亂山高下入商州
關門不鎖寒溪水　一夜潺湲送客愁

遠く秦城を別れて萬里に游ぶ、亂山高下商州に入る、關門鎖さず寒溪の水、一夜潺湲として客愁を送る、

【略傳】李涉は李渤が兄なり、初め廬山に隱る、憲宗の時、太子通事舍人と爲る、太和中に大學博士と爲る、自から清溪子と號す、

【句釋】武關は今日の陝西省商州、楚の懷王の會合したる有名の地、遠別秦城此の秦城は長安なり、萬里游秦城と商州正確の里程としては萬里は大に過ぐと雖も、亂山高下の難を超ゆるとせば萬里と稱するも不可無し、入商州商州は嘗て商鞅食邑の地なり、四面皆山、所謂七盤十一繞の險あるなり、關門不鎖春秋の世、秦の昭王詐りて一將軍をして秦王と爲し、楚の懷王を此の關に招致し、以て關門を鎖し出る能はざらしむ、今日は太平にして之を鎖さずとなり、

寒溪水商州は山國なり、水亦從て多し、一夜宿するは以て夜の字に切なり、潺湲は水聲を形容す、送客愁旅愁も懷王の當時を憂へたることも此の客愁の中に含む、

【評論】　此の篇、實に絶句の上乘として、千古名篇の中に數ふ、精練の極、流暢となる、李涉より少し後輩の范攄の『雲溪友議』に曰く李博士嘗て九江を過ぎ皖の西に至る、忽ち大盜の其の征帆に鼓するに逢ふ、數十人皆、兵仗を持して闌入す、從者曰く李博士の船なり、其の中豪首曰く若し是れ李博士ならば、吾輩金帛を須ひず、但一詩を乞ふ、李乃ち一絶を贈る、豪首餞賂且厚く、李亦敢て却ぞけずと、詩に云ふ「春雨蕭蕭江上の村、綠林の豪客夜知聞す、相逢て用ひず相廻避するを、世上如今半は是れ君、」

題開聖寺

宿雨初收草木濃　羣鴉飛散下堂鐘
長廊無事僧歸院　盡日門前獨看松

宿雨初めて收まり草木濃なり、羣鴉飛び散ず下堂の鐘、長廊無事僧院に歸る、盡日門前獨松を看る、

【句釋】　開聖寺は未詳、宿雨初收連日の雨を宿雨と云ふ、今日は漸く晴天と爲る、草木濃綠滴らんとするの景、群鴉飛散下堂鐘上堂の鐘は、齋前の報、下堂の鐘は齋後の報、此の鐘聲に驚て群鴉が四散する、長廊無事齋後は亦日課なければ無事なり、僧歸院各の其の房に歸る、盡日門前獨看松松を看る者は誰ぞや、卽ち作者李涉なり、余昔し僧が無事にして松を看ると解したり、今其の誤を知る、

【評論】　此の篇、清絶淡絶、以て後世、寺觀詩の法と爲すべし、李涉博士は寺に游ぶ詩、集中頗る多し、鶴林寺の「竹院を過ぎ僧に逢て話するに因て、又得たり浮生半日の閒」は特に有名とす、

宿虛白堂

李郢

秋月斜明虛白堂　寒蛩唧唧樹蒼蒼
江風徹曉不得寐　二十五聲秋點長

秋月斜明なり虛白堂、寒蛩唧唧として樹蒼蒼、江風曉に徹して寐るを得ず、二十五聲秋點長し。

【略傳】 李郢字は楚望、長安の人、大中の進士、藩鎮從事と爲り、侍御史に終ふ、

【句釋】 虛白堂は浙江の杭州に在り、虛白亭とも稱す、唐時建つ、錢氏後に都會堂と改たむ、唐の諸家皆詩あり、秋月斜明は正に曉ならんとする時、虛白堂此の三字秋月斜明を承けて、頗る適確なり、寒蛩の啼聲は唧唧たり、林樹の曉色は蒼蒼たり、江風徹曉堂は飛來峯下に在りて以て西湖に對す、湖風卽ち江風なり、不得寐景色の爲め、詩情の爲め寐るを得ざるなり、二十五聲は時計の數なり、秋點は秋漏卽ち時計、長は長夜なり、到當一夜寐られずして曉天に及ぶ、

【評論】 此の篇、『唐詩語林』に其の淸思月を帶び、其の高調雲に入ると、二色三聲詩の語あり、月色と樹色、蛩聲と風聲と漏聲となり、『湖山便覽』に樂天と羅隱の詩を出し、此の詩を出さざるは杜撰なり、

晴景

雨前初見華間葉　雨後兼無葉底花
蛺蝶飛來過墻去　應疑春色在鄰家

王駕

雨前には初めて見る華間の葉、雨後には兼て葉底の花無し、蛺蝶飛び來て

墻を過ぎ去る、應に疑ふべし春色の鄰家に在るかと、

【句釋】 王駕字は大用、蒲中の人、自から守素先生と號す、官、尙書禮部員外郎に至る、司空圖、鄭谷と相友とし善、詩家の所謂晚唐に屬す、晴景は晚春の晴景、雨前初見華間葉穀雨の前卽ち淸明後十六日には初めて華間の葉を見る、此の句は葉を主として言ふ、雨後兼無葉底花穀雨後には兼葉の裏に華を見る無し、此の句は華を主として言ふ、蛺蝶飛來過墻去蛺蝶も香を求めて飛で來るも香已に無きを以て我家の墻を過ぎ去る、應疑は應に思ふなるべきの意、蝶の疑ふにて、人が疑ふにはあらず、春色在鄰家飛去て鄰家に向ふも、何ぞ知らん、鄰家も亦春色は已に無きなり、

【評論】 此の篇、格は高からざるも、韻は甚だ佳、晚唐の正調として、其の面目を見る、王半山は初を不と、兼を全と、飛來を紛紛と、應を却と改たむ、半山の人品遺憾なく發揮すと謂ふべし、王駕の意は得ざるなり、

社日

鵝湖山下稻粱肥　豚窀雞塒半掩扉

桑柘影斜秋社散　家家扶得醉人歸

鵝湖山下稻粱肥たり、豚窄雞塒半扉を掩ふ、桑柘影斜にして秋社散ず、家家醉人を扶け得て歸る、

【句釋】社日は土地神を祭る日なり、二十五家ある地、必ず一社あり、立春後第五の戊日を春社と稱す、立秋後第五の戊日を秋社と稱す、共に五穀成熟を祈るが爲めとす、漢以前よりの習慣なり、鵝湖山下信州鉛山縣の西南十五里に鵝湖山あり、昔、龔氏山下に住し多く鵝を養ふ故に此の名あり、稻粱肥晩秋の豐熟を言ふ、豚窄豚は多く窄卽ち坑に養ふ、雞塒雞は塒卽ち垣を作りて養ふ、半掩扉全家不在の證據を言ふ、桑柘桑「クハ」柘も「クハ」なり、村舍の景、稻粱も肥、桑柘も盛、豐年たる景象宛然たり、影斜日影が桑柘を照して斜なり、秋社散祭罷んで各自に退散す、家家扶得醉人歸近時我邦の六如上人が、醉人醉人を扶け得て歸るは、此の家家の二字を醉人と改め以て我句と爲す、是も亦實況なり、

【評論】此の篇、『孟子』の意を用ひて一篇を構成し、聊かも頭巾氣無く、晩唐の佳境此に超ゆるは無し、歸愚の『別裁』に此の詩あり、而して「晴景」は採らず、

自河西歸山　司空圖

水闊風驚去路危　孤舟欲上更遲遲
鶴羣長遶三珠樹　不借閒人一隻騎

水闊く風驚て去路危ふし、孤舟上らんと欲して更に遲遲、鶴羣は長く遶る三珠樹、閒人に一隻を借して騎らしめず、

【略傳】司空圖字は表聖、河中虞鄉の人、或は云ふ洞州の人、咸通の末、進士に擢んでらる、王疑辟して幕府に置く、召して殿中侍御史と爲る、後、禮部員外郎と爲り郎中に遷る、僖宗の朝、知制誥より中書舍人に遷る、諫議大夫に拜す、昭宗の朝、兵部侍郎と爲る、足疾を以て辭して中條山に歸る、先人の故居なり、哀帝弑せらると聞て食はずして卒す、年七十二、

【句釋】河西は今日の甘肅省涼州、歸山山は卽ち中條山なり、水闊は大水、風驚は大風、去路危李茂貞が叛亂の爲め、哀帝は朱全忠に弑せらる、國家の危亂此より甚だしき時無し、孤舟欲上中條山は山西省の蒲州府、涼州より蒲州に至る、山間の江を舟にて下る、更遲遲氣は盛ん

なるも身は盛んならざるを言ふ、足疾を憂ふる意、國家を憂ふる意もある、鶴羣長遠三珠樹蓬萊の仙境には鶴多く羣を爲し以て三珠樹を遶る、三珠樹は理想の木にて、實在の樹にあらず、赤水の上に此の樹あり、葉皆珠を爲すと、而して此の鶴は仙人を乘て四方へ飛ぶが其の用と爲ず、不借閒人一雙騎閒人は司空圖自身を言ふ、羣鶴の中で一隻だも借りて我が歸る用に供せば必ず早早歸れるならんが、其れは能はずと嘆息するなり、

【評論】此の篇、司空表聖が極めて意義のある詩、尤も稱せらるる所以なり、詩は其の人の高格と共に傳ふべし、

野塘

韓偓

侵曉乘涼偶獨來　不因魚躍見萍開
捲荷忽被微風觸　瀉下清香露一盃

曉を侵し涼に乘じて偶獨來、魚の躍るに因らざれども萍の開くを見る、捲荷忽ち微風に觸れられ、瀉下す清香露一盃、

【句釋】野塘の曉景を詠ず、侵曉乘涼偶獨來夏日游歩すべきは曉天に在り、曉天は涼氣尙ほ在

ればなり、不因魚躍見萍開萍は「ウキグサ」なり、自然に生氣あれば開く、魚の生氣を借り始めて開くにあらず、捲荷は「マキハチス」忽被微風觸自から生氣あるもの、況や微風の之を吹くあり、露を落さざるを得ず、瀉下清香露一盃微風の爲め荷より瀉下する露は清香が一盃なるの意なり、

【評論】此の篇、李義山を學んで其の髓を得たるものなり、顧況の山中より此に至る九首、三四の句に力强くして以て一二の句を破る法なり、破るとは卽ち應ずることなり、

歲初喜皇甫侍御至

嚴維

湖上新正逢故人　情深應不笑家貧
明朝別後門還掩　修竹千竿一老身

湖上の新正故人に逢ふ、情深うして應に家貧を笑はざるべし、明朝別後門還て掩ふ、修竹千竿一老身、

【略傳】嚴維字は正文、越州の人、越の諸暨及び河南尉と爲る、又河南嚴中丞が幕府に充らる校書郎に終ふ、

【句釋】歳初は正月、皇甫は皇甫曾字は常冉、侍御は官名、湖上は西湖、嚴が餘姚の令尹たりし時、新正逢故人題に喜ぶとあり、一句先づ喜意を言ふ、情深故人の友情深きなり、應不笑家貧故人の爲め厚く饗應せんと欲するも、家貧にして意の如くならず、一汁一菜、而かも故人は竟に笑はざるなり、「衣を曝して多く笑ふ阮家の貧」の句あり、晉の阮籍の貧を人が笑ふ事より出づ、鴻齋は南史の劉伯寵の鬼笑を引く、斷じて此の詩意にあらず、明朝別後門還掩故人去て後、復他に故人なければ門掩はざるべからず、修竹千竿一老身故人去て後の故人は卽ち修竹千竿なり、且是れ貧家としての富なり、我が一老身を此の修竹千竿中に養ふなり、

【評論】此の篇、清絶俗塵に染す、嚴維其の人の高尙知るべきなり、

送魏十六　皇甫冉

清夜沈沈此送君　陰蛩切切不堪聞
歸舟明日毘陵道　回首姑蘇是白雲
清夜沈沈として此に君を送る、陰蛩切切として聞くに堪へず、歸舟明日毘陵の道、首を回せば姑蘇是れ白雲ならん、

【略傳】皇甫冉字は茂政、潤州丹陽の人、弟の曾と同しく進士と爲り、無錫尉を授けらる、難を避て陽羨に居る、後左金吾衞兵曹參軍左補闕と爲る、十歳文を爲り、張九齡稱して淸才と曰ふ、

【句釋】送魏十六魏氏、十六は其の排行、淸夜沈沈は情の盡きざるなり、此送君此處に於て君を送る、陰蛩切切は思の限り無きなり、不堪聞人を送る、蛩も亦哀聲あり、聞くに堪へざるなり、歸舟明日毘陵道今日の江蘇省常州府武進縣は卽ち毘陵なり、回身姑蘇是白雲姑蘇は蘇州府毘陵の鄰地とす、白雲は天上の白雲を言うて以て是れ慈親が家と爲す、狄仁傑は孝心の厚き人なり、曾て云ふ、白雲の孤飛を見て曰く吾が親其の下に舍せりと、

【評論】此の篇、張が評して淸才と曰ふの面目を見るに足る、唐人の詩の妙處は多く小細工を弄せざる所に在り、

送王永　劉商

君去春山誰共游　鳥啼花落水空流
如今送別臨溪水　他日相思來水頭

君去らば春山誰と共に游ばん、鳥啼き花落ち水空しく流る、如今別を送つて溪水に臨む、他日相思はば水頭に來れ、

【句釋】王永は傳未詳、君去春山誰共游春山好しと雖も、良友去る、以後は誰と共に游賞せん や、鳥啼花落水空流春鳥も春花も春水も遂に皆空しく賞するの心無し、如今は只今と同義、送別臨溪水溪水の邊まで其の行を送るなり、他日は如今と對應す、相思來水頭君も相思はば水頭に來れ、我も亦水頭に來らんとなり、

【評論】此の篇、水字を運用して、語自然に出で毫も不自然の態なし、聞く劉商其の人仙を好み、金丹を練ると、詩仙味ある固より其の所なり、

酹楊八副使赴湖南見寄　劉禹錫

知逐征南冠楚材　遠勞書信到陽臺
明朝若上君山望　一道巴江自此來

知ぬ征南を逐て楚材に冠たることを、遠く書信を勞して陽臺に到る、明朝若君山に上りて望まば、一道の巴江此より來らん、

【略傳】劉禹錫字は夢得、漢の景帝の子、勝中山王の子孫、其の七世の祖亮洛陽に遷る、比部と爲る、都昌の人、進士に第し、博學宏詞科に登る、貞元間、王叔文と交はる、叔文敗るに及んで朗州司馬に貶せらる、會昌の初、禮部尚書を以て卒す年七十二、戸部尚書を贈す、

【句釋】酹は酬なり、楊八副使太宗、招討使の官を設く、副使は次官なり、湖南は卽ち今日の湖南省なり、知逐征南此の征南は招討使を指す、征南將軍の名は晉の杜預に始まる、逐は副使が征討使の行を逐ふなり、冠楚材楚國は才人多し、故に俊才を稱して楚材と云ふ、遠勞書信湖南より楊が信を劉に傳ふ、到陽臺劉は此の時、朗州に在り、陽臺は朗州の尤も名高き地、明朝若上君山望君山に上りて劉の陽臺邊を望めばなり、故に上る者は楊にて、劉にはあらず、寧齋は「行て君山に上るは楊の行を思ふなり」と非常に誤まる、朗州には君山なる山無し、湖南の岳州府に湘山あり、一名を君山と云ふ、一道巴江自此來巴江は陝中より朗州を經て岳州に至る、江道通ずるに依て我が思が君の方に流れ至る必定なり、鯉魚の書を含んで至らんとなり、書信は山には鴻信、水には鯉信と云ふ、

【評論】此の篇、他人に在ては可なり、劉に在ては光采奕奕ならず、

逢鄭三游山　　盧仝

相逢之處草茸茸　　峭壁攢峯千萬重
他日期君何處好　　寒流石上一株松

相逢の處草茸茸、峭壁攢峯千萬重、他日君を期す何れの處か好、寒流石上一株の松、

【略傳】盧仝は玉泉子と號す、東都に居す、韓愈其の詩を愛し、厚く之を禮す、嘗て月蝕詩長短句の古詩を作り以て元和の逆黨を譏る、愈其の工を稱す、甘露中、宦者の爲め殺さる、

【句釋】逢鄭三游山此の山は少室山なりとの説あり、相逢之處草茸茸草の發生して盛んなるを茸茸と云ふ、峭壁は峭しき壁、攢峯は集まる峯、盧仝の住宅は河南省河南府城内にて、其の別墅は韓愈と同じく河南省懷慶府に在り、少室山を隔つる遠からず、千萬重非常に山が重なる、他日期君今は途中にて相逢ふ、而して他日の再會を約す、何處好、三塗山、達磨洞、天壇、佳景隨處に在る、而かも好處は何處ぞ、曰く寒流石上一株松一株の老松、寒流に傍ふ、此の處を期して他日再會せんとなり、

【評論】此の篇、風塵外に超越して、千載の下、其の人の高潔なるを思はしむ、盧仝の茶に於る、陸家の神と亦共に傳ふべきなり、

重贈商玲瓏兼寄樂天　　元稹

休遣玲瓏唱我詞　　我詞多是寄君詩
明朝又向江頭別　　月落潮平是去時

玲瓏をして我が詞を唱へ遣むるを休よ、我が詞多くは是れ君に寄する詩、明朝又江頭に向て別るれば、月落ち潮平ならん是れ去時、

【略傳】元稹字は微之、河南の人、建中元年に生る、十五、明經に擢んでらる、元和の初、制科對策第一に擧げらる、左拾遺と爲る、長慶の初、祠部郎中知制誥に擢んでらる、俄かに中書舍人翰林承旨學士に遷る、太和に尚書左丞、武昌節度使と爲て卒す、年五十三、尚書右僕射を贈す、樂天より少きこと五歳なり、

【句釋】重贈は二度、商玲瓏は餘杭の歌妓、元稹、越州に在りし時、邀へて家に留め、作る所の歌詩を皆傳習して歌はしめたるなり、今詩を作り、之に與へ兼て樂天に寄す、休遣玲瓏唱我

詞玲瓏が歸るに際し、樂天の家に行かん、家に行くとも我が詞同じを唱へしめては不可、若し唱へしむれば、復罪を得る虞あり、我詞多是寄君詩我と君と二人の間に於て歌ふべきもの、他人へ傳唱すべきものにあらず、明朝又向江頭別玲瓏と元稹と別るるなり、月落潮平是去時別る時の早晨なるを云ふ、故に月落と云ふ、玲瓏此の詩を以て樂天に示し且云ふ、三句に明朝あり四句に月落あり、音律に適はずと、樂天此の事を微之に報ず、微之改めて「却て江頭に向て回棹を整へ」とす、樂天絶倒したりと、

【評論】 此の篇、先輩評して宛轉格と云ふ、所謂玲瓏宛轉、玉を盤上に轉ずる如くなればなり、

採松華

姚合

擬服松華無處學　嵩陽道士忽相敎
今朝試上高枝採　不覺傾翻仙鶴巢

松華を服せんと擬し處學なし、嵩陽の道士忽ち相敎ふ、今朝試に高枝に上りて採れば、覺えず傾翻す仙鶴の巢、

【略傳】 姚合は開元の宰相、崇が曾孫なり、元和中に進士と爲り、武功主簿、富平萬年尉、監察御史、戸部員外郎、荆州杭州二刺史、秘書少監諫議大夫等の官を經て卒す、其の選に『極玄集』あり、

【句釋】 擬服松華松華を服する表面は仙ならんと欲するに在る、其の實此の松華は人の陽勢を强からしむる効あればなり、無處學其の法を知らざるなり、嵩陽は嵩山なり、道士嵩山には道士多く住し此の松華を服する法に精し、忽相敎普通敎は仄用なるが、今は平用とす、今朝試上高枝採道士の敎示に依て喬松の上に上りて華を採らんとす、不覺傾翻仙鶴巢鶴は松頂に巢ふ鳥、餘りに忽卒として其の巢を傾翻せしむ、

【評論】 此の篇、松華に托して、其の仙の無功なるを言ふ、松華を以て製したる丹は、効の顯著なる反對に、毒も亦顯著なり、歷代の天子が、此の陽勢を强烈ならしめんが爲め、多く之を服す、憲宗の如きは忽ち中毒して死せり、良とに一笑を發すべし、

哀孟寂

張籍

曲江院裏題名處　十九人中最少年

今日風光君不見　杏花零落寺門前

曲江院裏名を題する處、十九人中最も少年、今日風光君見えず、杏花零落す寺門の前、

【句釋】哀は哭なり、孟寂の傳は未詳、曲江院裏題名處長安曲江の慈恩寺に雁塔あり、唐の韋肇、及第して名を此に題す、之に倣うて遂に例となる、孟寂も亦題名せしなり、十九人中最少年及第者十九人中の孟は最少年なり、進士十七人、博學宏詞二人故に十九人と爲る、今日風光君不見最少年の及第は賀すべきが、才子短命是れ哀しむべし、杏花零落寺門前唐の及第進士宴を杏園に賜ふ、以て孟を杏花に譬へ、其の零落死を痛む、

【評論】此の篇、聊かも奇を弄せず、巧を用ひず、而かも其の哀情言外に在り、

患眼

三年患眼今年較　免與風光便隔生
昨日韓家後園裏　看華猶自未分明

三年眼を患て今年較ゆ、風光と便ち生を隔つることを免がる、昨日韓家後園の裏、華を看て猶自から分明ならず、

【句釋】三年患眼今年較較は「ヤヤ」なり全愈にはあらず、然れども「イユ」と訓讀す、免與風光便隔生若し盲となれば、風光と隔生する、昨日韓家後園裏張は韓門の弟子なれば、常に退之が家に出入す、看華猶自不分明較の字と不分明の字と相響く、

感春

遠客悠悠任病身　誰家池上又逢春
明年各自東西去　此地看花是別人

遠客悠悠として病身に任す、誰が家の池上か又春に逢ん、明年各自に東西し去る、此地に花を看る是れ別人ならん、

【句釋】感春は春日感慨を叙す、遠客悠悠任病身張は目疾あるのみならず、身疾も有りしが如し、誰家池上又逢春春に逢うて春を賞す病身なれば誰が家と定むる能はざるを言ふ、明年各自東西去我も彼もなれば各自と言ふ、此地看花是別人風光は別ならざるも賞する人は我にあらずして他に在らんと、

【評論】此の篇、張戒の評せる籍が詩は思深くして語精なりとの確當なるを覺ゆ、雍陶の「勸行樂」に老去風光不レ屬レ身黃金莫レ惜買二青春一白頭縱作二花園主一醉折二花枝一是別人。は宋人の如く全く次韻にして其の作法も類す、唐人の次韻は他に亦之れ有る無し、

西歸出斜谷　雍陶

行過險棧出斜谷　出盡平川似到家
無限客愁今日散　馬頭初見米囊花

險棧を行過して褒斜を出づ、平川を出で盡せば家に到るに似たり、限り無き客愁今日散ず、馬頭初めて見る米囊花、

【句釋】西歸出斜谷は「西ニ歸リテ斜谷ヲ出ヅ」なり、雍は蜀人、大中に出て簡州の刺史と爲る、故に西歸と曰ふ、行過險棧は「カケハシ」成都の枌里を出で簡州に赴く途中、此の棧道を過ぐ、出褒斜褒谷は南口、斜谷は北口、孔明が郿を攻むる時、此の斜谷より出づ、斜谷より鳳州の界に至る百五十里、棧閣二千九百八十九間、板閣二千八百九十三間、出盡平川似到家險棧を過ぎ盡して平川を出づれば、我が鄉に近づく乃ち家に到るかとの喜心生ずるなり、無限客愁

今日散、俗に「ヤレヤレ」と云ふ、安心を生じ、不安の心漸く滅す、馬頭初見米囊花當時蜀に此の米囊花ありて他國には曾て無し、此の花の異名曰く御米花、曰く米穀花、曰く不移花、曰く瞿粟、俗に「ケシノハナ」と云ふ、

【評論】此の篇、旅中の辛苦と、故鄉の歡喜と兩意共に見るべし、晩唐と稱するも、此の如き詩は捨つべからず、

宿嘉陵驛　卻生愁

離思茫茫正値秋　每因風景卻生愁
今宵難作刀州夢　月色江聲共一樓

離思茫茫として正に秋に値ふ、風景に因る每に卻て愁を生ず、今宵作し難し刀州の夢、月色江聲共に一樓、

【句釋】宿嘉陵驛嘉陵は今の四川省保甯府、元來江の名、陝西の鳳縣に源を發して東南、南部の界に入る、漾水是れなり、離思亂離の憂思、茫茫際限なき離思、正値秋秋は尋常人にも哀し況や離人をや、每因風景下の月色江聲是れ風景なり、卻生愁離人なれば愁を生ず、故に卻と云

ふ、今宵難作刀州夢晉の王濬夢む三刀を屋梁に縣く、須臾にして又一刀を益す、意甚だ之を憎む、李毅賀して曰く三刀は州の字たり、又一刀を益すは、明府王を指す其れ益州に臨むなり、果して益州に遷ると、雍は夢にだも、此の如き善夢は見ずとの意、月色江聲共一樓月色も江聲も共に我が宿樓に入りて滿ち目は明、耳は聰、一宵寐る能はず、何ぞ夢を結ぶの遑あらんや、

【評論】此の篇、余は出斜谷の詩に比すれば優るあるも劣るあらずと信ず、嘉陵驛に宿する詩亦此の右に出るものなし、

醉後題僧院

杜牧

艅船一掉百分空　十歲青春不負公
今日鬢絲禪榻畔　茶煙輕颺落花風

【句釋】醉後題僧院昨日は迷ひ、今日は悟る、僧院に題して、其の事を言ふ、艅船は盃を言ふ角で酒器を爲る、七升を受るなり、一掉百分空は一たび掉うて餘瀝を餘さず、十歲青春十歲は

一掉と對を取る、必ずしも、十年ならず、要するに少年時代にはの意、不負公公は自身を言ふ、「ワレ」なり、春花秋月、血氣に任せて意のままならざるは無し、煩惱を盛んに發揮したる事を言ふ、今日鬢絲鬢が絲の如きは青春を過ぎて白頭と化せしなり、禪榻畔僧の坐禪する榻畔に依る、乃ち平生の煩惱を懺悔する、茶煙は酒の濃に反對、淡なり、酒の醉ふに反對、醒なり、輕颺落花風落花を見て無常を悟る、是れ佛家の理なればなり、

【評論】此の篇、此の三體詩のみならず、諸の選本皆「醉後題僧院」の五字の題とす、然るに馮集梧の『樊川集』には此の詩は「題禪院」の三字の題、「醉後題僧院」の詩は左の如し、「離心忽忽復悽悽、雨晦く瓶を傾ぶけ醉泥を取る、羨む可し高僧心と語り、一如攜稺東西に往く」如何にも醉後の狀あり、此の詩醉後の狀に乏し、余は本集に從て改めんと欲す、

經汾陽舊宅

趙嘏

門前不改舊山河　破虜曾輕馬伏波
今日獨經歌舞地　古槐疎冷夕陽多

門前改めず舊山河、虜を破り曾て輕しとす馬伏波、今日獨歌舞の地を經れ

ば、古槐疎冷にして夕陽多し、

【略傳】趙嘏字は承祐嘗て浙西に家す、會昌二年進士第に擢んず、渭南尉に卒す、

【句釋】經汾陽舊宅汾陽は郭子儀の事なり、張巡、許遠、顏眞卿、李光弼と共に肅宗を扶けたる名臣とす、其の宅、親仁里に在り、其の里の四分の一に居す、八子七壻皆顯官に登る、門前不改舊山河國の功臣は、其の子孫に至るまで、國亦其の子孫を護せざる可らず、漢、功臣を封ずる誓に、黃河をして帶の如く太山をして砥の如くならしめ、國以て永く存し、延て苗裔に及ばんと、今山河は依然、而も此の誓は空しきを言ふ、破虜曾輕馬伏波伏波將軍馬援は光武を扶けて漢の爲め大功を樹つ、汾陽が肅宗を扶けて史思明の亂を平らげし功は伏波以上に重しとなり、今日猶經歌舞地歌舞地は卽ち汾陽の舊宅、此の歌舞は妓女の歌舞にあらずして兒孫輩の歌舞を言ふ、汾陽の宅が寺と爲ると張籍が詩に在り、此れは人の信を措かざる所、然れども、朝廷顧みざるが、子孫守らざるか、憫むべき狀態にありしは事實なるが如し、古槐疎冷夕陽多槐樹の陰、疎冷にして夕陽之に映ず、人をして覺えず感慨を深からしむ、

【評論】此の篇、唐の功臣を遇する薄きを慨して作る、汾陽に托して、以て意義は廣泛に渡る、前二句は汾陽の功、後二句は今日の所見を言ふ、感慨其の中に在り、

十日菊

鄭谷

節去蜂愁蝶不知　曉庭還繞折殘枝
自緣今日人心別　未必秋香一夜衰

節去り蜂愁ふるも蝶知らず、曉庭還て繞る折殘枝、自から今日人心別なるに緣る、未だ必ずしも秋香は一夜に衰へず、

【句釋】十日菊九月九日、菊を賞するの節とす、一日後れて十日に之を詠ず、節去一日でも過ぎ去ては節にあらず、蜂愁蜂は愁ふ、愁ふる蜂は多智なればなり、蝶不知知らざるの蝶は無智なればなり、曉庭還繞折殘枝人にして無智なれば殘肉を爭ふ、蝶にして無智、殘枝を繞つて之に戲むる、自緣今日人心別今日と昨日と人心別なるに緣る、客觀的にあらずして、主觀的なるに在り、未必秋香一夜衰造物は歡を永うする意を言ふ、人情は節と云ふ事に重きを措て、其の他を知らず、節と云ふ觀念を去らば、十日も十一日も亦之を賞すべきなり、文宗の太和九年には十九日を重陽と定め、開成元年には十三日に改ためし事あり、

【評論】此の篇、宋の曾子固の評に、語盡きて意餘り有りと、此の五字以て悉くせり、

老圃堂

薛能

邵平瓜地接吾廬　　穀雨乾時偶自鋤
昨日春風欺不在　　就床吹落讀殘書

邵平が瓜地吾廬に接す、穀雨乾時偶ま自から鋤く、昨日春風不在を欺て、床に就て吹落す讀殘の書、

【句釋】老圃堂薛能官を罷て退居、長安門外に堂を構ふ、名けて老圃堂と云ふ、『語』の吾老圃に如かずを取る、邵平瓜地接吾廬秦の東陵侯、邵平秦破るる後、布衣と爲り、瓜を城東門外に種ゑ以て沽る、瓜甚だ美、人、東陵瓜と謂ふ、今吾も東陵侯を學んとなり、穀雨乾時は三月の下旬を言ふ、偶自鋤此の三字非常に力あり、以て題目に適ふ、以て邵平が故事を追ふべし、昨日春風欺不在圃に出て鋤き畊やす、春風は其の不在を欺むくなり、就床吹落讀殘書床上に讀了せざる本を置きしに歸來之を見れば、風の爲めに吹き落され、散亂せるを言ふ、

【評論】此の篇、作者薛能は一種の思想家にして尋常一樣の詩人にあらず、是を以て其の詩も奇思多し、此の篇の如き全く宋人の喜ぶものにして、大雅の取る所のものにあらず、楊誠齋の

一代の心髄は此の結二句より出たるものなり。

偶興

羅隱

逐隊隨行二十春　　曲江池畔避車塵
如今贏得將衰老　　閒看人間得意人

隊を逐ひ行に隨ふ二十春、曲江池畔に車塵を避く、如今贏ち得たり衰老を將て、閒に看る人間得意の人、

【略傳】羅隱字は昭諫、餘杭の人、池の梅根浦に隱れて、自から江東生と號す、廣明中に池の守、竇潏、墅を營なみ、之に居らしむ、光啓中に錢鏐辟て從事節度判官副使と爲す、梁祖、諫議を以て召ども行かず、開平中、羅紹威推て叔父と爲て表して給事中を授く、年八十餘にして餘杭に終ふ、子あり塞翁と曰ふ、

【句釋】偶興興生じて偶作す、逐隊隨行進士及第を欲する俊才と列を爲す、二十春此の二十年間羅は及第せざるなり、曲江池畔及第したる者は曲江の杏園にて宴を賜ふ、避車塵及第せざる羅は意氣揚揚たる人間の車塵を避けて之を望む、如今贏得功名の念有るときは落第を殘念に思

ひしが、今日功名の念無き時より見れば、却て及第せざるを以て我が贏と爲るを喜ぶ、將衰老無事に衰老と爲るは是れ幸福ならずや、聞看嘲つて看るなり、人間得意人及第して意氣揚揚たりし人は如何、朱溫が哀帝を弑して唐室を簒ふに至りて天下の名士を取て之を白馬津に殺す、曰く此の輩自から謂ふ淸流と、之を濁流に投ずべしと、

【評論】 此の篇、全く自家の實事を叙して心情流露し、人をして覺えず拍手せしむ、一女子あり、常に羅詩を誦す、意其の人を私慕す、一日羅、其の女子の親を訪ふ、女戸隙より之を窺ふ、羅頗る形無し、此れより女子、復羅詩を誦せず、羅は此の女子に於ても及第せざるなり、然れども雲英なる妓、羅の爲めに他に嫁せずと言ふに至りては、亦贏得たるもの、一得一失を妙に收め得たるは羅給事なるかな、

悼亡妓

朱褒

魂歸溟漠魄歸泉　只住人間十五年
昨日施僧裙帶上　斷腸猶繫琵琶絃

魂は溟漠に歸し魄は泉に歸す、只人間に住す十五年、昨日僧に施す裙帶の

上、斷腸は猶ほ繫ぐ琵琶の絃、

【句釋】 朱褒は傳未詳、悼亡妓亡の字は無用に屬す、悼妓の二字にて可なり、誤入ならん、魂歸溟漠陽の魂は溟漠卽ち天に歸る、魄歸泉陰の魄は卽ち地に歸る、『禮記』の說なり、只住人間十五年十五年にして死せりとせば、極めて雛妓なり、昨日施僧唐代の風習、死者一七日を經て平生其の愛好せる物を以て僧に供養す、裙帶上裙帶を以て寺に送る、其の裙帶を日本にて水引と稱する物ありて之を縛る、斷腸猶繫琵琶絃帶を縛るに平生彈奏したる所の琵琶の絃を以て其の上を縛る、之を見て覺えず斷腸すと言ふなり、

【評論】 此の篇、特に奇巧を弄するにあらず、唯一片の悼情を表するのみ、而かも之を讀む、淚痕の猶ほ新なるを覺ゆ、想ふに千載前にも此の泣あり、千載後にも此の泣あらん、嚴維の詩より此に至る十八首、第三句に於て明朝、明日、如今、他日、今日、昨日、明年、今宵、等の字の使用法を示したるものとす、

送元二使安西

王維

渭城朝雨浥輕塵　客舍靑靑柳色新

勸君更盡一盃酒　西出陽關無故人

渭城の朝雨輕塵を浥す、客舍青青として柳色新なり、君に勸む更に一盃の酒を盡せ、西の方陽關を出れば故人無ん。

【句釋】送元二使安西安西は西域龜茲なり、武后の世、此に安西保護府を置く、三萬の兵を以て鎭すと云ふ、渭城漢の高祖の新城、武帝改ためて渭城と爲す、渭水の西北、朝雨浥輕塵雨が浥す故に塵が揚がらざるなり、正しく出發する處、客舍青青柳色新塵も揚がらず、故に柳色も青青として春日の風光を見る、勸君更盡一盃酒今日は十二分に歡を盡くし玉へとの意なり、西出陽關無故人陽關は甘肅の燉煌郡にして長安を去る二千五百里、此の關門を出れば、復故人無し、幸に今日は十二分に交歡せん、

【評論】此の篇、送別の詩として古今獨步、前に古人無く、後に來者無し、世、奉じて陽關三疊曲と稱す、歌ふ者一篇を一度誦し、而して再度三度誦するに客舍の第二句よりして第一句は再誦せず、是を以て三疊曲と云ふ、後世種種異論あるも、此の法を以て正確と爲す、

賈島

三月晦日贈劉評事

三月正當三十日　風光別我苦吟身
共君今夜不須睡　未到曉鐘猶是春

三月正當三十日、風光別る我が苦吟の身、君と共に今夜睡るを須ゐず、未だ曉鐘に到らず猶是れ春、

【句釋】劉は姓評事は官名、裁判評定官の類なり、三月正當三十日は春の終りとす、故に風光別我と云ふ、苦吟身多くの和訓「吟身ヲ苦シマシム」と點す、島の一代苦吟身なり、風光に別るる時のみ吟身を苦しましむるにあらず、共君今夜不須睡晝より夜に至り十分に春の思を爲さんとなり、未到曉鐘猶是春曉鐘を聞かざる中は猶ほ春にて夏にはあらず、無本上人十二時後は翌日なるに頓著せざるなり、曉鐘の二字、一本五更に作る、曉鐘を以て佳とす、

【評論】此の篇、浪仙絕句中の名篇とす、此の詩を賞せざる者は浪仙の知音にあらざるなり、

武昌阻風

方澤

江上春風留客舟　無窮歸思滿東流
與君盡日閒臨水　貪看飛花忘却愁

江上の春風客舟を留む、無窮の歸思東流に滿つ、君と盡日閒に水に臨み、飛花を貪看して愁を忘却せん、

【略傳】方澤字は公悅、宋の神宗の朝、鄂州に太守たり、伯弓誤て唐人と爲す、

【句釋】武昌阻風方が洛陽の召に赴かんとして武昌に到るも、風に阻られて纜を解く能はず、此の詩を作る、江上春風留客舟題意先づ此の七字にて道破す、無窮歸思滿東流東流の水は袞袞と急奔するも、我が歸思を如何ともするなし、水を羨まざるを得ず、與君何人か風の爲め同じく留まる人ありしならん、盡日閒臨水舟中より水に臨む、貪看飛花忘却愁此の愁の字、日本語の「コマツタ」とか「心配」とか位に當る意味なり、阻せられて强て飛花を看て僅かに愁を忘る、

【評論】此の篇、宋人の氣味無く全く唐人の風あり、伯弓の誤て編入する、所以なきにあらず、

己亥歲

澤國江山入戰圖　生民何計樂樵蘇
憑君莫話封侯事　一將功成萬骨枯

曹松

澤國の江山戰圖に入る、生民何の計か樵蘇を樂まん、君に憑て話する莫か

れ封侯の事、一將功成て萬骨枯、

【畧傳】曹松字は夢徵、衡陽の人、詩を賈司倉に學ぶ、天復の初、年七十にして及第す、校書郎を授かる、

【句釋】己亥歲は僖宗の乾符六年、是の歲冬、黃巢自から衝天大將軍と稱して嶺南に在り、十一月に襄陽に趨る、劉巨容、曹全晸と兵を合せて拒ぎ破る、勝に乘じて江陵に至る、或人巨容に勸む窮追して賊盡すべしと、巨容曰く國家は人を負むことを喜ぶ、急あるときは則ち將士を存撫して官賞を愛まず、事寧きときは人を棄つ、或は更に罪を得ん、若かず賊を留めて以て富貴の資と爲んには、衆乃ち止む、是に由て賊勢復振ふ、明年東京を陷れて、遂に長安に入る、車駕蜀に幸すと、澤國は江南一帶の地を稱す、江山入戰圖是の歲に饒州、信州、池州、宣州、歙州、杭州、渾て十五州を掠せらる、生民何計樂樵蘇樵は薪を取るなり、蘇は草を取るなり、生民が活路を求むるに由なし、憑君莫話封侯事日本の秀吉が「天下惑亂」を祈りたる、巨容が賊を留めて富貴の資と爲さんとの類、自己の爲めにして生民の爲にはあらず、一將功成萬骨枯一公爵が出來る反面には、一萬二萬の士卒が血を流す、其の血を見ざれば一公爵は出來ざるなり、

【評論】　此の篇、軍閥主義者を憤慨して作るものなり、千載の前、千載の後も、此の如し、慨せざるべからず、王維の詩より此に至る四首、第三句勸君、共君、與君、憑君、等の字を用ふる格を示す、

虛接

周弼曰く第三の句、虛語を以て前句を接するなり、亦語、實なりと雖も、意、虛なるものあり、承接の間に於て略、轉換を加へて、反と正と相依り、順と逆と相應じ、一呼一喚、宮商自から諧ひ、千鈞の力を用ふるが如くにして形迹を見ず、繹て之を尋ぬれば餘味あり、

伏翼西洞送人　　陳羽

洞裏春情華正開　看華出洞幾時回
慇懃好去武陵客　莫引世人相逐來

洞裏の春情華正に開く、華を看洞を出幾時か回らん、慇懃に好し去れ武陵の客　世人を引て相逐ひ來らしむる莫れ、

【句釋】　陳羽は韓愈同時の及第、詳傳は無し、伏翼西洞は潼川府路の長寧郡の冷水溪に在り、小桃源と稱す、洞裏春情華正開郡の守張公民桃李を此に種る、春日花盛んなり、看花出洞幾時回曾て漁人は洞源へ赴き十年も經て回る、君は幾時か回るぞや、慇懃は丁寧、好去は無事に行

けとの意、武陵客武陵の桃源とは異なれども借りに武陵の名を用ふ、莫引世人相逐來仙境を俗了せしむる憂があるゆゑに世人を引て來るは不可なり、寧齋は此の詩に全圈を施す、何の所以なるを知らず、

題明慧上人房　秦系

簷前朝暮雨添華　八十吳僧飯熟麻
入定幾時還出定　不知巢燕汚袈裟

【句釋】明慧上人房上人は高僧に對する敬稱語、簷前「ノキ」の前、朝暮雨添華、經典に天雨華の語あり、暗に此の意味を用ふ、八十吳僧吳國に生れし人ならざるも、女を吳姬と言ふが如く吳は佛寺多ければ吳僧と言ふ、飯熟麻胡麻飯を食ふ、胡麻、一名は巨勝、之を服すれば身を輕くし老いず、入定は坐禪すること、端坐冥目、息を數へて思惟するを入定又は坐禪と言ふ、幾時還出定入定は自行の爲め出定は化他の爲めなり、不知巢燕汚袈裟定に入て鵲が頭上に巢ふ、

故に若し早く出定せば、鵲が兒を育つる能はざるを知て、又定に入り去りし人あり、今其の事を借りて上人の定心堅固、燕の汚すに依て其の心の動せざるを云ふ、

【評論】此の篇、上人の無我境界を詠じて眞に絶妙の好辭とす、伏翼西洞の詩の及ばざる所なり、

寄許鍊師　戎昱

掃石焚香禮碧空　露華偏濕藥珠宮
如今說得天壇上　萬里無雲月正中

【略傳】戎昱は荆南の人、進士に第せず、乃ち名都に放游して終ふ、

【句釋】許は姓、鍊師は道士の德高き者に對する敬語、佛敎の上人と言ふが如し、掃石焚香禮碧空太乙星を祀り以て道を修するが道士の法、而して淸淨梵行、汚るるを嫌ふ、藥珠宮は天上に在る殿閣、『黃庭經』に出づ、露華の爲め此の宮が濕ふとなり、如何說得道を修せざる門外漢

は如何ぞ天壇上の事を說き得んや、戎自分を云ふ、萬里無雲月正中我が見る所は、唯一輪の月が皎皎として天に中するあるのみ、其の他は我が測知する所にあらず、

【評論】此の篇、格は甚だ高からざるも清淑の氣はあり、眞に道士に贈るに適す、

秋思　張籍

洛陽城裏見秋風　欲作家書意萬重
復恐怱怱說不盡　行人臨發又開封

洛陽城裏秋風を見る、家書を作らんと欲して意萬重、復恐る怱怱說き盡きざることを、行人發するに臨んで又封を開く、

【句釋】秋思秋に逢うて思を叙ぶ、「秋思」の題は廣し、今は家を思ふ狹義なり、洛陽城裏は張が客寓中なり、見秋風古の張翰は秋風起るに依て故郷の鱸魚を憶ふ、今秋風の字面を用ふるも鱸魚の爲めにはあらず、欲作家書意萬重情の起るときは前後孰れとも定め難し、意萬重、孰れを前に書き、孰れを後に書きて可なるや迷ふ、復恐怱怱「ウカウカ」として若しや大切な事を除きはせぬかと說不盡用も爲さざる如きことあるを恐る、行人臨發又開封張が故郷へ歸る人へ

信を托す、其の人の發せんとするとき、又開封して意の足るや足らざるやを見る、

【評論】此の篇、岑參の馬上相逢の詩と共に鄕情溢るる如し、百年千年不朽の詩と謂ふ可し『雲溪友議』に郭奇、書を細君に遣り誤て白紙を封ず、妻詩を賦して曰く、碧紗窗下啓緘封、盡紙從頭徹尾空、應是仙郎懷別恨、懷人全在不言中

懷吳中馮秀才　杜牧

長洲苑外草蕭蕭　却算游程歲月遙
唯有別時今不忘　暮煙秋雨過楓橋

長洲苑外草蕭蕭、却て游程を算ふれば歲月遙かなり、唯別時のみ有て今忘れず、暮煙秋雨に楓橋を過しことを、

【句釋】吳中は江蘇を云ふ、長洲苑は蘇州に在り、吳の長洲苑、江水の洲を以て苑と爲す、却算游程歲月遙此の苑に昔時、杜は馮と共に游ぶ、而かも歲月は遙かにして隔世の如し、唯有別時今不忘今日記憶するは其の別時の狀、暮煙秋雨過楓橋此の狀のみ記憶して忘れず、

【評論】此の篇、地名を起結兩句に用ひ、姿致限り無し、淸の王漁洋の奉じて神韵と爲す所、

此れ等の詩に在り、

念昔游

李白題詩水西寺　古木回巖樓閣風
半醒半醉游三日　紅白花開煙雨中

李白詩を題す水西の寺、古木回巖樓閣の風、半醒半醉游ぶこと三日、紅白花開く煙雨の中、

【句釋】李白題詩水西寺宣州に水西山あり、林壑深邃、李白詩を題して曰く「天宮水西寺、雲脚照東郭、清湍鳴回溪、綠水繞飛閣、寺門、後に「李白題詩寺」の五字の額を掲ぐと云ふ、古木回巖樓閣風『西京雜記』に樓閣臺榭、轉た相連注すと、半醒半醉游三日半醒半醉は杜自身を云ふ、白の事にあらず、紅白花開煙雨中白は醒に屬し、紅は醉に屬す、

【評論】此の篇、昔水西寺に游んで興懷を遣し事を念うて作る、本集に三首あり、「江南寺樓」と「雲門寺」と「水西寺」とあり、詩一氣呵成、其の面目躍如せり、

寄友

李羣玉

野水晴山雪後時　獨行村路更相思
無因一向溪橋醉　處處寒梅映酒旗

野水晴山雪後の時、獨村路に行て更に相思ふ、一たび溪橋に向て醉ふに因無し、處處の寒梅酒旗に映ず、

【句釋】寄友字の如し、起句、承句亦字の如し、無因友無ければ折角の看梅も賞するに因無しとなり、溪橋醉醉を溪橋に求めんと欲するも同心の友なし、寒梅映酒旗酒家も寒梅も人を待つものの如きも、如何せん良友の伴ふ無し、遂に此の詩を寄示する所以、

經賈島墓

鄭谷

水繞荒墳縣路斜　畊人訝我久咨嗟
重來兼恐無尋處　落日風吹鼓子花

水は荒墳を繞て縣路斜なり、畊人訝かる我久しく咨嗟するを、重來兼て恐る尋處無きを、落日風は吹く鼓子花、

【句釋】賈島墓は四川省潼川府、安岳縣南に在り、有名なる兜率寺に鄰る、島は普州卽ち安岳縣の司戸參軍と爲て卒す、故に此に葬る、水繞荒墳縣路斜安岳縣路が斜に通ず、畊人は墓邊の圃を畊やす人、訝は變に思ふこと、我は鄭谷、久咨嗟墓を弔して嘆息する久し、重來は此の次ぎに來るとき、兼恐無尋處墓を保護する者無く、遂に崩壞せらるるや再弔する能はずと恐る、落日風吹鼓子花此の花は和名「ヒルガホ」一名旋花、又旋冨、又筋根、又美艸、又天劍草又纏枝牡丹、等の多名あり、彼の牽牛花に似たるものなり、

【評論】此の篇、賈島が墓の荒涼たるを見て嗟嘆したるなり、然れども天は此の詩人を捨てず今日猶其の墓ありと云ふ、縱ひ墓無きも李洞の如き銅像を鑄て之を祭る、天は才人を捨てざるなり、

修史亭　司空圖

烏紗巾上是青天　檢束酬知四十年
誰料平生臂鷹手　挑燈自送佛前錢

烏紗巾上是れ青天、檢束知に酬ゆ四十年、誰か料らん平生鷹を臂にせし手、

燈を挑げて自から佛前の錢を送らんとは、

【句釋】修史亭は司空圖が自から讀書堂を云ふ、卽ち山西の蒲州府中條山の王官谷に在り、此の亭に觀自在菩薩の像を置き以て老を送る、武宗の時、多く佛像を燒き、寺を毀つ、是の時、表聖は大悲像を我有と爲ししなり、烏紗巾は自分の頭を指す、其の頭上に靑天あるは、君恩を長記して忘れずとの意、檢束は此の身を檢束する、酬知四十年宰相盧公は我が知己、其の知己に酬いんが爲め良政を計る四十年なりしなり、誰料平生臂鷹手必ずしも獵狩の事とせず、世の荒き事を料理せし手と見て可なり、挑燈自送佛前錢當時豪俠の念、遂に施す所無く、灰心以て方外香火の事を修せんとは、

【評論】此の篇、表聖が其境界を叙して毫髮も詐らざるもの、以て人品を概すべし、菅茶山、鞆繪を咏じて佛前今日拈レ香手、馬上當年斬レ將人は此の詩より脫化し來るものなり、

答韋丹　僧靈徹

年老心閒無外事　麻衣草坐亦容身
相逢盡道休官去　林下何曾見一人

年老心閒にして外事無し、麻衣草坐亦身を容る、相逢て盡道ふ官を休め去ると、林下何ぞ曾て一人を見ん、

【略傳】　靈徹姓は陽氏、字は澄源、越州の人、雲門寺に居す、劉長卿、嚴維、皇甫曾、皆友たり、皎然、僧標と名を齊しうす、宣州の開元寺に遷化す、門人塔を山陰の天柱峯に建つ、韋丹字は文明、京兆萬年の人、蚤く孤、外祖顏眞卿に從て學ぶ、明經に擢んでられ、安遠令に調せらる、江南西道觀察御史に至りて卒す、年五十八、

【句釋】　年老心閒無外事徹自身の事を叙して以て答ふ、麻衣草坐亦容身三衣一鉢、樹下石上、麻衣草坐、佛弟子の守る所此に在り、此外に餘長を容るるを許さず、相逢徹と逢ふ人は、盡道は人人道ふなり、休官去官を休め、以て方外の游に隨はんと皆道ふが、林下何曾見一人未だ曾て吾に隨て林下に游ぶ者は一人も無し、韋丹が徹に寄せたる詩に曰く、王事紛紛無二暇日一、浮生冉冉只如レ雲、已爲二平子歸休計一、五老巖前必與レ君と、而して丹遂に歸休の計を爲さず、罪を得て憂死す、此の詩意を重んじ退隱を計れば、此の憂死は無かりしなり、

【評論】　此の篇、丹の爲めに發して而して千古官吏たる者の爲めに益あり、功成身退の戒と同一なり、陳羽より此に至る十一首は、第一句題に歸し、而して第一句に第四句を起し、三句に

二句を承るの格なり、

九日懷山東兄弟

王維

獨在異鄉爲異客　每逢佳節倍思親
遙知兄弟登高處　遍挿茱萸少一人

獨異鄉に在て異客と爲る、佳節に逢ふ毎に倍す親を思ふ、遙かに知る兄弟高きに登る處、遍く茱萸を挿んで一人を少くらん、

【句釋】　九日は九月重陽、山東は一本に山中に作る、東を以て可とす、獨在異鄉爲異客山東太原の人が、官に就て長安に客寓す、異鄉異客たる所以、毎逢佳節倍思親維が一門悉く孝悌にして母に事て至孝なり、弟の縉才名あり、蜀の刺史と爲る、遙知兄弟登高處九月九日高きに登るは費長房が桓景に災を避けしめしに起る、今王が兄弟は太原にて高きに登るならん、遍挿茱萸少一人是の日茱萸を盛て臂上に係て、以て菊花酒を飲む、王家亦其の例を爲すならんか、一人異鄉に在るを以て同うするを得ず、少は「カク」と訓讀す、

【評論】　此の篇、王が十七歳の時の作とす、語語微塵も塗澤なく、實に平平に之を言出して而

して其の至情、言外に溢る、嗚呼千古の大宗なる哉、

葉道士山房　　顧況

水邊楊柳赤欄橋　　洞裏神仙碧玉簫
近得麻姑書信否　　潯陽江上不通潮

水邊の楊柳赤欄の橋、洞裏の神仙碧玉の簫、近ごろ麻姑が書信を得るや否や、潯陽江上潮を通ぜず、

【句釋】葉は音「セツ」入聲に讀む、水邊楊柳赤欄橋道士が山房の景を言ふ、洞裏神仙碧玉簫前句の外景に對して、此句は內景を言ふ、道士の吹て以て自から樂しむ碧玉簫と赤欄橋と字の對を取る、近得麻姑書信否顏魯公が『麻姑壇記』に王方平、蔡經が家に過る、人をして麻姑と相聞せしむ、壇人あり夾で曰く麻姑再拜してより見ざること已に五百年、俄かに麻姑至る、是の年十八九許りの好女子なり、顧が葉に戲れ問ふ、潯陽江上不通潮潯陽より近來潮が通ぜざる故に察する所、麻姑の信は無からん、が試に問ふ如何となり、麻姑は潯陽に限らざるも、水邊と第一句に用ひたるが爲め結句亦潯陽江を出すなり、前半は葉を揚げ後半は葉を抑へる、

【評論】此の篇、暗に葉の女子に對して何事か有りしを諷せしものの如し、潯陽江上は美人の多く住して歌舞する所、此の間に於て何等かの消息なかるべからず、然れども千古の疑問今遽かに解決すべからず、

宿昭應

武帝祈靈太乙壇　　新豐樹色遶千官
那知今夜長生殿　　獨閉空山月影寒

武帝靈を祈る太乙壇、新豐の樹色千官を遶る、那ぞ知ん今夜長生殿、獨空山月影の寒きに閉んとは、

【句釋】宿昭應唐の關內道京兆府昭應縣、今日の陝西省なり、武帝祈靈太乙壇武帝は名を借るのみ、玄宗が事、華淸宮も此に在りて、玄宗が不老不死を祈る、太乙壇は仙人を祭る壇、新豐樹色驪山は古の驪戎國、秦に驪邑と曰ふ、漢の高祖里民を徙して命じて新豐と曰ふ、玄宗分て會昌縣を置く、尋で會昌を改め昭應と爲す、遶千官千官の居を擁す、那知今夜長生殿長生殿上人長生せず、太乙壇に不老不死を祈りし人は殿も長生の名を以てしたるも憐むべし今夜の狀は何

ぞ、獨閉空山月影寒長生殿を弔する者は唯月影のみ、

【評論】此の篇、祈の無益なるを嘲けつて作る、武帝を咏じて玄宗に及び、詩人本旨の存する所此の外有るべからず、千古の絶調、一唱三嘆、

江村卽事　司空曙

罷釣歸來不繫船　江村月落正堪眠
縱然一夜風吹去　只在蘆花淺水邊

【句釋】江村卽事耳目に觸れし景情を直寫するを卽事と云ふ、長沙に流寓せし時の作、罷釣歸來不繫船船を繫がざる所に妙味あり、『莊子』に汎として不繫の船の如しとある、江村月落正堪眠月落は時節に依り夜半もあり曉天もあり、一概ならず、今は二更頃と定めて可、縱然は「タトヒ」一夜風吹去風の字を出さざれば不繫船の三字を活かさず、只在蘆花淺水邊蘆花淺水の邊を離れざるを知るが故に船を繫がざる所以なり、

【評論】此の篇、不繫船の三字を主として而して月や風や水を賓として斡旋す一讀の下、淸氣人に逼る、

宮人斜　雍裕之

幾多紅粉委黃泥　野鳥如歌又似啼
應有春魂化爲燕　年年飛入未央棲

幾多の紅粉ぞ黃泥に委す、野鳥歌ふが如く又啼に似たり、應に春魂は化して燕と爲て、年年飛で未央に入て棲む有るべし、

【畧傳】雍裕之は蜀の人、貞元後、進士に擧げ第せず、四方に流寓して終ふ、

【句釋】宮人斜は宮人を葬むる墓地の名なり、長安城外三里に在り、後宮嬪妃の叢冢を斜と曰ふ、幾多は多少と同義、紅粉は美人の代名詞、委黃泥地は黃色故に黃泥と云ふ、野鳥如歌又似啼俗人聞ば歌ふ如く、詩人聞けば啼に似たり、應有春魂化爲燕魂の不滅は佛敎のみならず詩家も亦認むる所、必ずしも魂は溟漠に歸せざるなり、燕と爲る所以は宮廷を慕ふの念去らざるが爲めなり、年年飛入未央棲未央宮は漢の高祖の七年に蕭何が造る所、

【評論】此の篇、一種の清婉、情致相表はるるものあり、

過春秋峽　劉言史

峭壁蒼蒼苔色新　無風情景自勝春
不知何樹幽崖裏　臘月開華似北人

峭壁蒼蒼として苔色新なり、無風の情景自から春に勝る、知らず何の樹ぞ幽崖の裏、臘月華を開きて北人に似す、

【略傳】劉言史は鄉里を詳にせず、李賀、孟郊と同時、詔して棗强の令を授くるも受けず、世之を重んず、

【句釋】春秋峽は江蘇省徐州府彭城郡に在り、汴水と泗水交流を以て因て峽と名く、峭壁蒼蒼苔色新四時蒼蒼の色を變せず春も秋も無きを以て此の名あり、無風情景自勝春「風無くして」の訓と無風の訓とあり、「何の風情も無きか」と見るか、又風が無しと見るか、雙方共に通ずと雖も風無しと見る方可なり、峽中は風の少なきもの、我甲斐の山水にても知る、不知何樹幽崖裏崖は山の高處、臘月は十二月嚴冬の候、開華何の樹か名は知らざるが華を開く、似は示なり、北

人北方人は南方の事情を知らず、南方人は北方の事情を知らず、劉の北人なるを知て崖上の花が其の艶異を似すとなり、

【評論】此の篇、春秋峽の春秋峽たる特色を叙して全く遺恨なし、無風、臘月、北人が主にして他は其の注脚なり、

初入諫司喜家室至　竇羣

一旦悲歡見孟光　十年辛苦伴滄浪
不知筆硯緣封事　猶問傭書日幾行

一旦の悲歡孟光を見る、十年辛苦して滄浪に伴ふ、知らず筆硯の封事に緣るを、猶問ふ傭書日に幾行ぞ、

【略傳】竇羣字は丹列、京兆金城の人、兄の常、弟の牟、庠、鞏の五人皆郎と爲る、人稱して竇家の五星と云ふ、羣、種種の官を經、開州の刺史と爲て卒す、年五十五、

【句釋】初入諫司德宗の朝、左拾遺と爲て諫院に入る、喜家室至官吏と爲て其の細君が鄉里より來るを喜んで作るなり、一旦悲歡見孟光後漢の孟光、其の容姿醜にして黑、力石臼を擧ぐ、

德行甚だ高し、鄰里之を求む、肯んせず、對を擇んで三十に至る、父母其の故を問ふ、曰く賢なること梁伯鸞の如き者を得ば可なり、梁聞て之を娶る、十年辛苦伴滄浪今日諫司に入るも、昨日までは滄浪なり、山林滄浪は悲にして、諫司は歡、孟光の如き我が妻、我と十年辛苦を共にす、不知妻が知らざるなり、筆硯緣封事今諫司に於て夫が艸する文章は封事、卽ち天子へ上る疏なり、其の封事なるものを知らずして、猶問傭書日幾行人の爲めに筆畊して僅かの日給を取る、それは昔の事なり、然るに日に原藁紙幾枚書くやと妻が問ふ、以前貧なる時を依然たるものと思ふなり、後魏の蔡亮家貧うして傭書して自給す、今其の事を用ひて以て我が事と爲す、

【評論】此の篇、圓至和尙の注に羣處士にして窮通を以て悲歡し僅かに一拾遺を得て則ち妻に對して誇喜す、情辭に見はる豈眞の隱者ならんやと、和尙は人情を解せず、亦詩を解せず、惜哉、

寄襄陽章孝標

青油幕下白雲邊　日日空山夜夜泉
聞說小齋多野意　枳華陰裏麝香眠

雍陶

青油幕下白雲の邊、日日空山夜夜の泉、聞說く小齋野意多し、枳華陰裏麝香眠る、

【句釋】寄襄陽襄水の陽なれば襄陽と云ふ、日本の如く、陽も陰も頓著せず、相陽又武陽と云ふ如きにあらず、章孝標字は道正、錢唐の人、襄陽府の從事たり、青油幕下は將軍幕下なり、青油の縑を以て幕を作る、藩鎭僚屬とす、白雲邊襄陽は高地にて、鹿門山、荊山に傍て白雲常に飛ぶ、日日空山夜夜泉章の高尙なる心は日に山に在り、夜に泉に在り、聞說は雍が章の狀を聞くなり、小齋多野意章の住する小齋は全く俗氣なく、野意が滿つとなり、野意とは何ぞ、枳華陰裏麝香眠枳華は李「スモモ」麝香は一名射父、又香麈「カホリジカ」「クジカ」此の如き獸類が眠る處、其の幽靜察すべきなり、麝は以て章其の人にも比す、

【評論】此の篇、一讀の下、章の人品を察するを得、甚だしい哉、詩の人を移すや、

舊宮人

白髮宮娃不解悲　滿頭猶自挿華枝
曾緣玉貌君王寵　準擬人看似舊時

劉得仁

白髮の宮娃悲を解せず、滿頭猶自から華枝を挿む、曾て玉貌君王の寵せしに緣りて、人の看て舊時に似んことを準擬す、

【略傳】劉得仁は貴王の子、開成より大中に至る、三朝、昆弟皆貴仕を歷て、而して得仁詩に苦しむ、擧場に出入すること三十年、卒に成る無して卒す、

【句釋】舊宮人は先朝に仕へし宮女、白髮宮娃は美「ウルハシ」なり、不解悲眞の人生を解せざるもの、滿頭猶自挿華枝華枝は字の如く華の枝にはあらず、「カンザシ」なり、鴻齋は「少女ハ戲レニ花ヲ笄ニス」と注す、非常に誤る、少女の華枝を挿むは普通なり、老女此の粧を作す、色狂と言はざるを得ず、曾緣玉貌君王寵昔は天子色を好み、此の老女も一度は少女たりし事あり、以て天子の寵を蒙むる、準擬は自定也と注して自から「アテガフ」意、人看似舊時自身で老を知らざるにはあらず、而かも宮禁に棲し時の粧を人に示し、昔と變らぬと稱美を求むるなり、

【評論】此の篇、冷齋和尙の評に水流れ花開く、工力を假らず、之を天趣と曰ふ、是れ癡情眞に逼るを稱するなり、東坡居士の詩、人老て花を簪し自から羞す、花應に老年の頭に上るを羞づべし、以て一笑を發するに足る、

小樓

儲嗣宗

松杉風外亂山青　曲几焚香對石屛
記得去年春雨後　燕泥時汚太玄經

松杉風外亂山青し、曲几香を焚て石屛に對す、記得す去年春雨の後、燕泥時に太玄經を汚すことを、

【略傳】儲嗣宗は宣宗の大中十三年の進士、詩名あり、集一卷今傳ふ、

【句釋】小樓は儲の住宅を云ふ、松杉風外亂山青小樓前の景色、曲几焚香對石屛小樓中の動作、石屛は石崖が屛風の如きなり、記得去年春雨後去年の事を記得せるは印象の極めて强ければなり、燕泥時汚太玄經後漢の揚雄太玄經を著はす、時人曰く玄尙白しと、雄、解嘲文を作りて、時人の嘲を解く、作者が思ふ去年春雨の後、燕が泥を啣んで來り、几上の太玄經へ落し書を汚したり、今年も其期節なりと思うて此の詩が成りしもの、燕を小人に譬へ、太玄を出して以て自身を雄に譬ふ、

【評論】此の篇、情景錯綜して、其の狀、宛然目に在り、一幅の畫圖と爲す亦可ならずや、

宮詞

王建

樹頭樹底覓殘紅　一片西飛一片東
自是桃花貪結子　錯教人恨五更風

樹頭樹底殘紅を覓むれば、一片は西に飛び一片は東、自から是れ桃花子を結ぶことを貪ぼつて、錯て人をして五更の風を恨ましむ、

【句釋】宮詞は晩春宮中の事を叙す、樹頭樹底覓殘紅宮中に殘留する美人を求むればなり、一片西飛一片東三千の宮人皆放逐せらるるなり、自是桃花貪結子宮に入る當初吾獨、專房せんと貪るなり、錯教人恨五更風吾獨、專房せんと欲したる一人も遂に寵を失するなり、又曰く殘紅は色の衰へしなり、東西片飛は天子と已れと背くなり、五更風は君心の飄忽定まらざるなり、種種の解あるが取るに足らず、貪結子は花が早く散らざればなり、五更風強ければ花散て子を結ばず、風を恨むる所以、

【評論】此の篇、比にして興、宮女を諷して其の妙、神に入る、一人は一人の解あり、十人は十人の解あり、王建の意を得る者古今幾人ぞ、王半山曰く此の詩、意味深遠にして悠長、

祇役遇風謝湘中春色

熊孺登

水生風熟布帆新　只見公程不見春
應被百花撩亂笑　比來天地一閒人

水生じ風熟して布帆新なり、只公程を見て春を見ず、應に百花の撩亂たるに笑はるべし、比來天地の一閒人、

【略傳】熊孺登は鍾陵の人、進士第に登り、藩鎭從事に終ふ、白樂天、劉賓客と善、

【句釋】祇役は役に出で、公事を敬しむなり、遇風謝湘中春色春色に謝す、猶人に謝する如くす、水生風熟風の熟するは順風なり、布帆新は舟を發する新なるを云ふ、舟の帆が新なりと見る勿れ、只見公程不見春公私を混交せざるなり、春を見るは私なり、役を祇しむは公なり、應被百花撩亂笑折角に此の好春に逢ふも、公程を見るの人、春風に開く花などを見ず、是の故に花の爲めには笑はるるならん、撩亂は爛漫と意味同じ、比來は從來又由來「モトヨリ」と同じ、天地一閒人此の一の字、『讀書樂趣』に少に作る、少は缺なり、天地少閒人にて意味始めて通ず、一閒人なれば、春を賞する道理なり、少にして始めて不見春の意を現はすものとす、

【評論】　此の篇、結句寧齋解して曰く、「從來自ら閒人を以て居る、而して今日公程相促がす、春に笑はるるも亦以て言の答ふべきなきなり」と、一は少の誤なるを知らざればなり、然れども其の解、通せざるにはあらず、通せざるにあらざるも少の妥當なるに及ばず、

過勤政樓

杜牧

千秋佳節名空在　承露絲囊世已無
唯有紫苔偏稱意　年年因雨上金鋪

千秋の佳節名空しく在り、承露の絲囊世已に無し、唯紫苔のみ有て偏に意に稱ふ、年年雨に因て金鋪に上る、

【句釋】　勤政樓は玄宗、宮西に於て樓を置く、其の西を華萼相輝之樓と曰ふ、其の南を勤政務本之樓と曰ふ、祿山亂後、頽廢して修せず、千秋佳節は玄宗の生日、卽ち八月十五日、百僚を華萼樓に宴す、名空在實已に無く、名のみ在り、承露絲囊是の日、三公以下鏡及び承露囊を獻じて祝意を表するなり、世已無佳節廢して修せず、之に伴ふ百事皆無きは當然なり、唯有紫苔「ムラサキノコケ」偏稱意十分に發生、卽ち「コケ」のみ得意なり、年年因雨上金鋪コケが得意に

雨の力を借りて金鋪卽ち樓上の「蝶ツガヒ」に生ず、扉の上に金華あり、華中に獸及び龍蛇を作る、鋪は以て環を銜めり、張九齡『千秋金鏡錄』を獻ず、前後興廢の事を言ふ、宣宗主十六令狐綯に之を讀しめ、「亂は未だ嘗て不肖に任せずんばあらず、治は未だ嘗て忠賢に任せずんばあらず」に至り、之を止めて曰く凡そ太平を致さんと求めば、當に此の言を以て首と爲すべしと、

【評論】　此の篇、牧之平生の放態全く表はれず、國を思ふの至情出づ、後世君主をして二讀三讀せしむべし、

送客

李羣玉

沅水羅紋海燕回　柳條牽恨到荆臺
定知行路春愁裏　故郢城邊見落梅

沅水羅紋海燕回る、柳條恨を牽て荆臺に到る、定んで知る行路春愁の裏、故郢城邊落梅を見る、

【句釋】　送客客の江陵へ赴くを送る、沅水は現今湖南省常德府辰州より流れて東南洞庭に入る、羅紋は水の小浪俗に「サザナミ」なり、海燕回鳥衣國より彼岸の節に回る、柳條牽恨客の爲めに